

信越県境地域の地域資源情報

2019

2019（平成31）年3月

上越市創造行政研究所

はじめに

この冊子は、新潟県上越市を起点としつつ、上越地方や魚沼地方、県境を越えた長野県の北信・長野地方などの広域的な地域に着目し、全国的な視点から特徴的と考えられる地域資源の情報を20のテーマに取りまとめたものです。

本格的な人口減少時代の中で、地域が本来持っている特徴に磨きをかけ、地域の魅力を高めていくことがますます重要となっています。突き詰めれば、地域への誇り・愛着の本気度や全国的・世界的な視点から地域の存在意義を広く発信する力が問われているように感じます。

私たちの地域は一体どのような特徴を持っているのでしょうか。筆者が居住する上越市では、日本三大夜桜や上杉謙信といった具体的な名称のほか、自然が豊かで食べ物がおいしく人もいい、さらには一通りものが揃っていて住みやすい、むしろ特徴がないのが特徴——などといったものがよく挙げられます。

もちろんこれらは上越市の特徴といえるものではありませんが、これからの地域づくりの手がかりを指し示し、この地に愛着や誇りを持てるような情報とするためには、他の地域との比較が可能な客観的な捉え方や、特徴の因果関係を含めた総合的な捉え方をもって深掘りしていくことが必要と考えます。

そこでこの冊子では、「この地域の特徴は何?」、「それは他の地域とどう違うの?」、「その特徴が生まれたのはなぜ?」などの素朴な疑問に答えられるよう、特徴的な地域資源の紹介やその因果関係の整理に取り組みました。

上越市にとどまらず広域的な地域資源に着目した理由の一つは、当市の魅力をより深く認識できることにあります。例えば、お隣の地域に素晴らしい地域資源があるならば、それはこの地域にとっての魅力ともいえますし、その魅力が生まれた一因を探てみると、自らの地域が大きく関わっていることに気づく場合もあります。

また、ご近所の地域同士で互いの地域資源やその関係性を共有し、その特徴を自分の事のように感じたり考えたりすることは、真の広域的なまちづくりを進める上では必要不可欠なことと考えます。特にこの地域は、国内有数の豪雪地帯、県の端にある条件不利地域、人口減少の顕著な地域などを有する一方で、主要な幹線交通の結節点にあり、特徴的で魅力的な地域資源を数多く有しており、自然・歴史・文化などの面において様々なつながりもあります。このような地勢的条件を考えたとき、運命共同体としてこの地域が力を合わせていくことは理に適うものと考えます。そのためにも、お互いの地域を知ることは第一歩となります。

近隣の地域のことは、何となく知っているようで意外に知らないこともたくさんあるのではないのでしょうか。親近感がありながら新しい発見も得られる、共通点が多い中にも違いが

感じられるなど、共に学び切磋琢磨できる関係性をつくるには、この県境をはさむ地域は適度なサイズ感であると感じます。

筆者らは、このエリアで地域づくりに関心のある人々が学びと交流を深める会として、3年前から「信越県境地域づくり交流会」を開催してきましたが、その思いも同じところにあります。したがって、この交流会は地域資源情報を作成するための基盤の一つであり、地域資源情報もこの交流会の新たな基盤の一つになることを想定しています。

地域資源情報の収集は、基本的に郷土関係や各テーマに関する文献調査、各分野の地域資源に詳しい地元有識者へのヒアリング調査等によって行いましたが、地域の特徴を見いだす作業は思いのほか難航しました。したがって、今回手始めに取り上げた20のテーマについても加筆の余地は十分にありますし、他にも取り上げるべき、取り上げたいテーマも数多くありました。また、特徴の中で取り上げた具体例は、あくまでも地域全体の特徴の一端を紹介するためのものであり、各市町村のバランスへの配慮は不十分な点があります。それらの点については何卒ご容赦願いたく存じます。

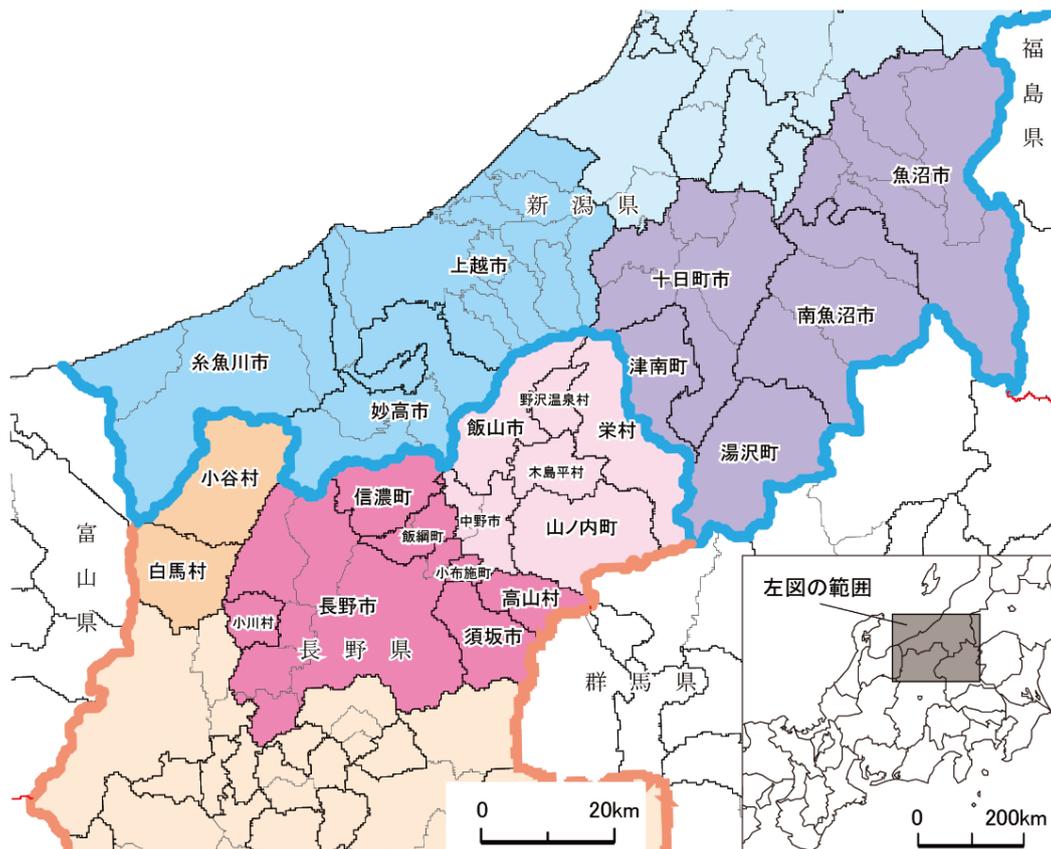
歴史的事実について新たな知見を見いだす研究とは異なるため、“知っている人には当たり前”の内容になった点は否めませんが、地域の特徴とその因果関係を総合的にまとめることを意識して収集・整理を行っていることから、地域づくりを考えるきっかけとしては一定の役割を果たせるものと考えています。むしろ多くの方々に活用いただきながら、並行して情報の精度を高めていくことに意味があると考えます。そこで、この冊子を「初版」として公開するとともに、今回提示した特徴の根拠となるデータ等の情報、その出所である参考文献等を示した【資料編】を別途作成します。

この冊子が、地域づくりに関心のある方々や将来の担い手が地域を学ぶための参考資料として、あるいは学習材料としての信頼性を高めていくためのたたき台として、地域学習・研究ネットワーク形成の一助となることを願うものです。

2019（平成31）年3月
上越市創造行政研究所

■ 対象とする地域の概況

- この冊子の対象地域は、新潟県上越市を基点としつつ、長野県（信濃）と新潟県（越後）の県境付近に位置する市町村を含むエリアです。
- 具体的な市町村は、取り上げる地域資源のテーマによって異なりますが、新潟県内は概ね上越地方と魚沼地方、長野県内は北信地方、長野地方の一部、大北地方の一部の範囲であり、かつての郡の範囲でいえば、新潟県の頸城郡と魚沼郡、長野県の水内郡、高井郡、更級郡、および北安曇郡小谷村・白馬村を含む範囲を基本としました。



※ 細線は、平成の大合併前の市町村界を示す。

* 県境付近の主な市町村名

県	地方区分	市町村名	旧郡名
新潟	上越	上越市(197)、妙高市(33)、糸魚川市(44)	西頸城、中頸城 東頸城
	魚沼	十日町市(55)、中魚沼郡津南町(10) 南魚沼市(59)、魚沼市(37)、南魚沼郡湯沢町(8)	東頸城、中魚沼 南魚沼、北魚沼
長野	北信	飯山市(21)、下水内郡栄村(2) 中野市(44)、下高井郡山ノ内町(12)、木島平村(5)、野沢温泉村(3)	下水内 下高井
	長野 (一部)	須坂市(51)、上高井郡小布施町(11)、高山村(7) 長野市(378)、上水内郡信濃町(8)、飯綱町(11)、小川村(3)	上高井 上水内、更級
	大北 (一部)	北安曇郡小谷村(3)、白馬村(9)	北安曇

備考) ()内の数値は2015年国勢調査人口(単位:千人)

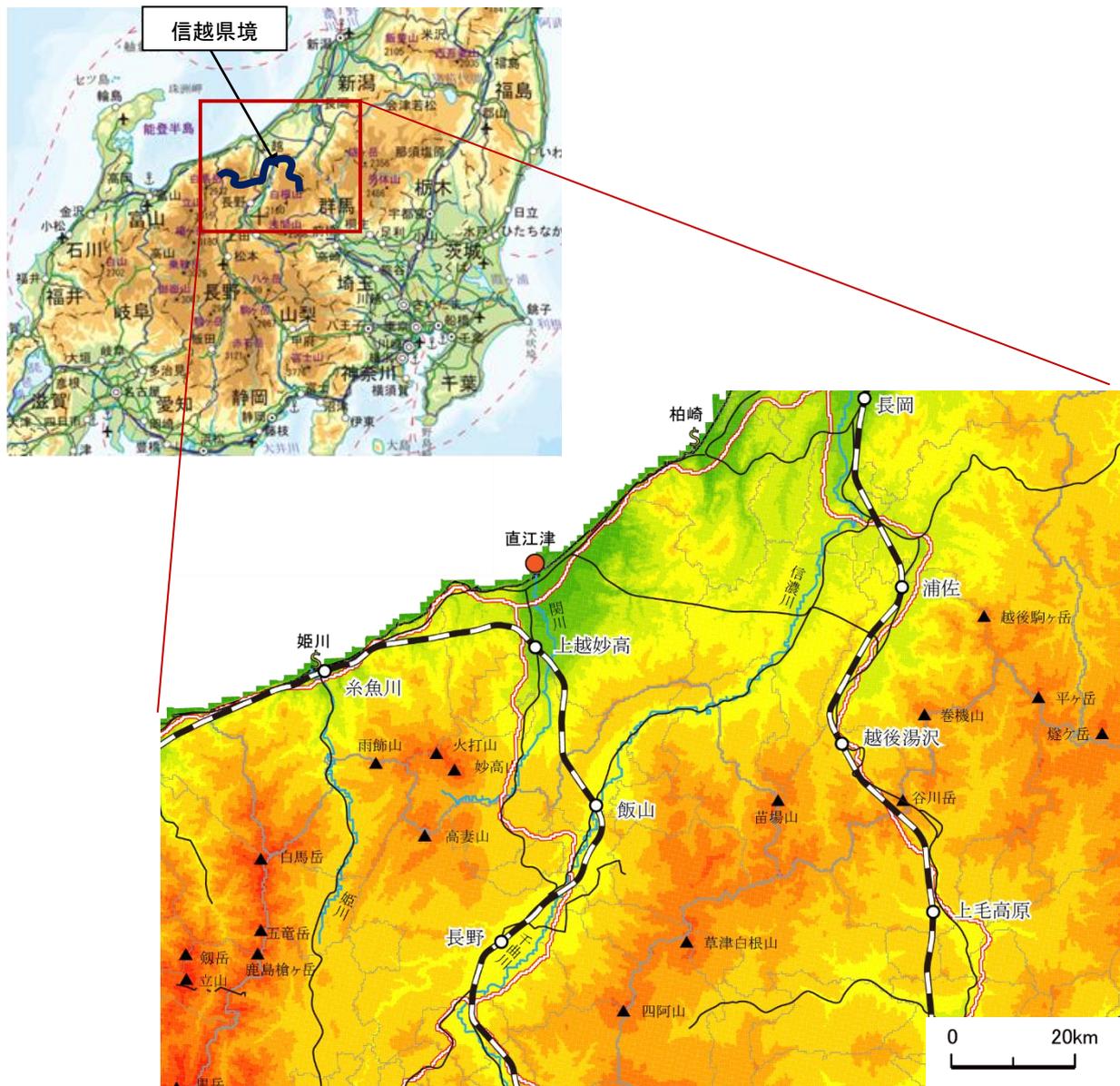
郡の範囲と市町村の範囲は完全一致しないため、目安として表記した。

● 地 形

- ・ 県境は、白馬岳¹などを含む中部山岳国立公園、妙高山などを含む妙高戸隠連山国立公園、標高 1,000m 前後の関田山脈、苗場山などを含む上信越高原国立公園などの山間部が中心であり、国内トップクラスの豪雪地帯でもあります。その合間を一級河川の姫川、関川、信濃川（千曲川）が横切り、日本海側に注いでいます。
- ・ 県境の北側が新潟県、南側が長野県であり、日本海に面する平野部や、起伏に富む丘陵地帯、信濃川（千曲川）水系の盆地などで構成されています。

● 交 通

- ・ 東側の魚沼地方には上越新幹線や関越自動車道が走っており、新潟方面と首都圏を結んでいます。また、上越・北信・長野地方には、2015 年に開業した北陸新幹線や上信越自動車道



出所) 国土交通省「国土数値情報」をもとに作成

図1 新潟・長野県境付近の地形

¹ 白馬岳の位置は、新潟・長野県境付近ではあるが、正確には長野・富山県境である。

などが走っており、北陸方面と首都圏を結んでいます。このほか、日本海側にも北陸自動車道や北陸本線などの主要幹線が走ります。

- 古くから、三大都市圏を結ぶメインルートが太平洋側にあるのに対し、日本海側あるいは内陸部を通じてそれらをつなぐサブルートが走る地域でもあります。

● 人口分布

- 都市規模が最も大きいのは長野市（2015年国勢調査人口 38万人）で、次いで上越市（同 20万人）です。糸魚川市、妙高市、十日町市、南魚沼市、須坂市、中野市、飯山市などの平坦部にも、一定の人口集積のある市街地がみられます。
- 地域の大半は、長期間にわたって人口減少が進行しており、規模の小さい都市、中山間地域ほどその減少率は高い傾向にあります。

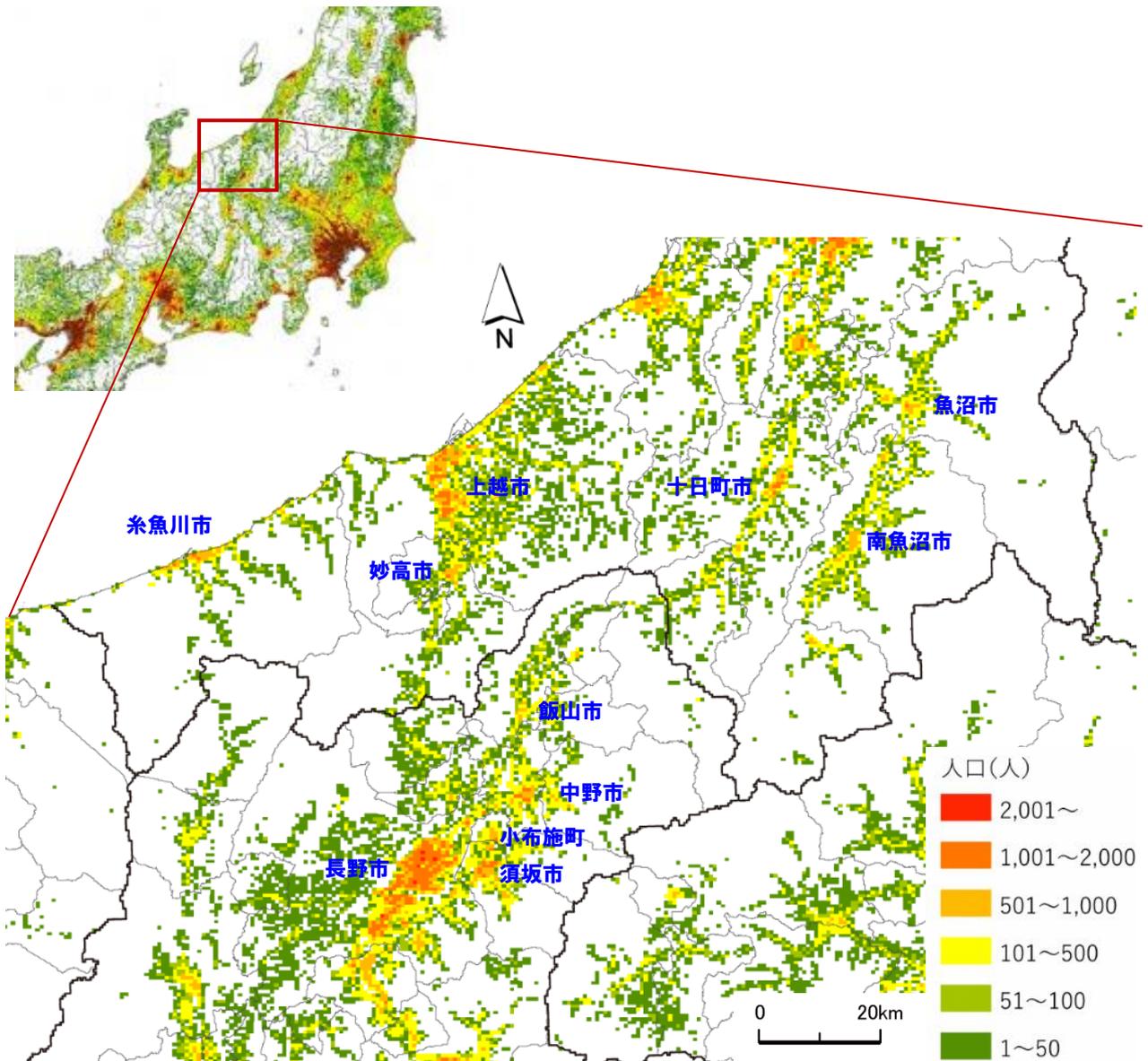


図2 新潟・長野県境付近の人口分布

備考) 一定の市街地形成がみられる市町村名のみを明記した

出所) 国土交通省「国土数値情報」および総務省統計局「2015年国勢調査」をもとに作成

■ 対象とする地域資源

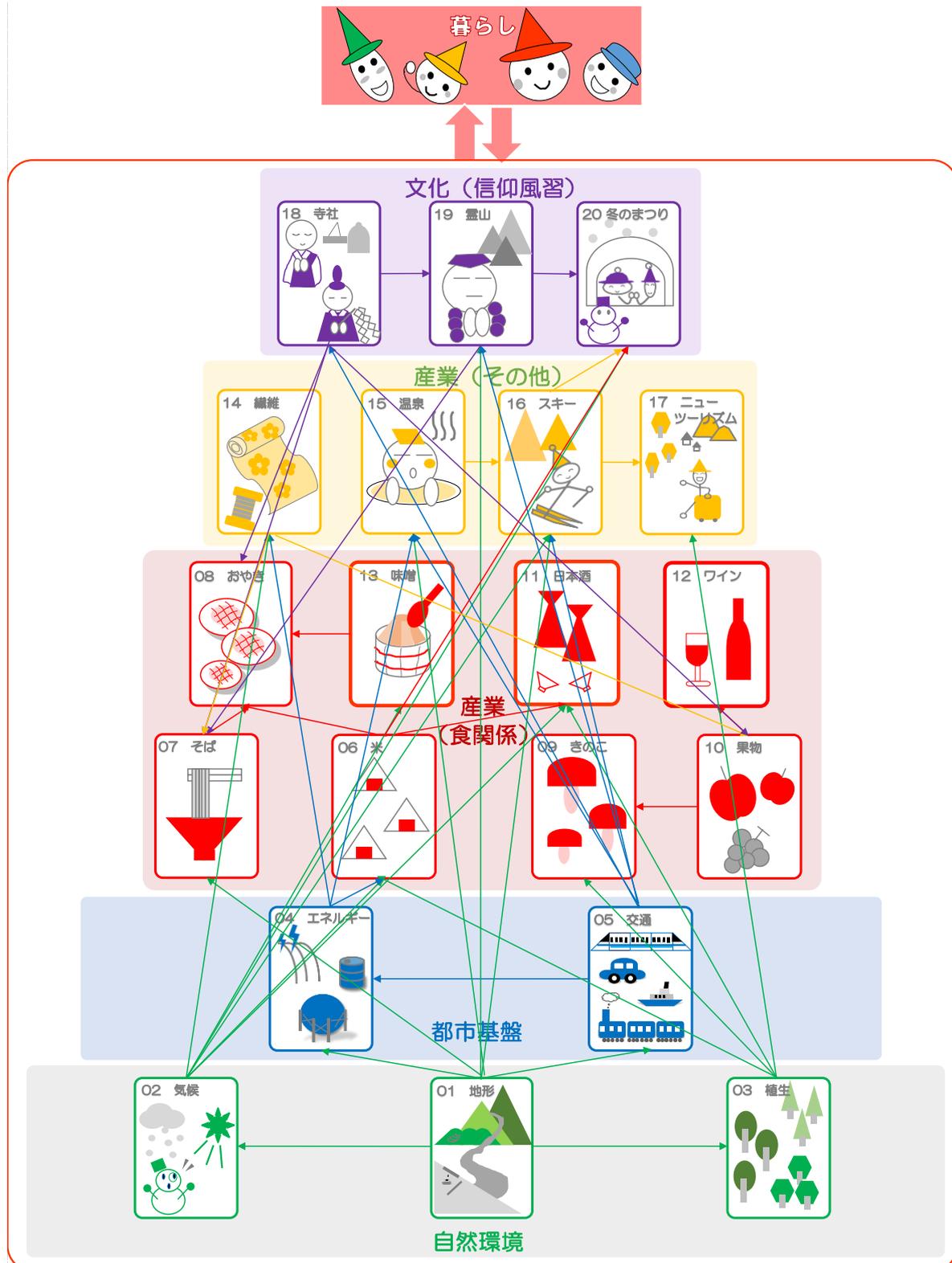
この冊子では、私たちの暮らしを支える自然環境、都市基盤（インフラ）、産業、文化（信仰風習）などに着目して、この地域の特徴を表現できるテーマを取り上げました。これ以外にも説明可能なテーマは数多くあるものと思いますが、今後の継続・発展を期待しつつ、今回は手始めに20のテーマとしました。

表1 特徴的な地域資源のテーマ一覧

分類	テーマ		ページ
自然環境	01	地形 （新旧・高低・長短の多様な地形が集積）	10
	02	気候 （日本有数の豪雪地帯と少雨地帯が隣接）	14
	03	植生 （多様な植生が集積／典型的なブナ林帯）	18
都市基盤	04	エネルギー （国内有数のエネルギー供給地）	22
	05	交通 （国内の主要な交通網の通る地域）	26
産業（食関係）	06	米 （国内有数の米どころ）	30
	07	そば （つなぎの多様なそばが集積）	34
	08	おやき （多様なおやき類の生産地）	38
	09	きのこ （日本一を争うきのこ王国が隣接）	42
	10	果物 （国内有数のりんご・もも・ぶどう生産地）	46
	11	日本酒 （国内有数の酒どころ）	50
	12	ワイン （対照的なワイン産地の存在）	54
	13	味噌 （生産量と質を誇る味噌の生産地）	58
産業（その他）	14	繊維 （国内有数の蚕糸や織物生産の歴史）	62
	15	温泉 （国内有数の温泉集積地）	66
	16	スキー （国内有数の歴史と規模を誇るスキー場群）	70
	17	ニューツーリズム （自然環境を活かしたツーリズムの草分け的地域）	74
文化（信仰風習）	18	寺社 （浄土真宗や山神信仰などの集積がみられる地域）	78
	19	霊山 （様々な信仰を取り入れた霊山の集積地）	82
	20	冬のまつり （多彩な小正月行事と現代の雪まつり）	86

例えば自然環境は都市基盤、産業、文化の成り立ちに影響を与え、都市基盤は産業などの成り立ちに影響を与えるなど、それぞれの地域資源は相互に影響を及ぼし合いながら盛衰を繰り返してきました。そして、それらの地域資源は私たちの暮らしを守り育む役割を果たすとともに、私たちの暮らしがそれらの地域資源を守り育み、ときには負の影響を与えることもあります。

このことから、それぞれの地域資源が持つ特徴とともに、地域資源同士の関係性にも着目して整理を行いました。



■ この冊子の見方 (地域資源情報のレイアウト)

地域資源情報は、テーマごとにはじめに、特徴、因果関係、解説の4ページで構成しており、全20テーマを取り上げます。

1 はじめに

- この地域の特徴を知る前に知っておきたい基礎知識として、言葉の定義や種類、歴史的経過、現在の傾向(種類別、時間的、空間的分布など)などを簡単に示しました。
- 全国的な傾向の中で、すでに新潟県・長野県の位置付けが表れているテーマについては、あわせてその説明も加えました。
- 色彩は下記のとおりとしました。

グリーン	自然環境
ブルー	都市基盤
オレンジ	産業(このうち食はレッド)
パープル	文化(信仰風習)

2 特徴

- この地域の特徴的な事柄の例を示しました。
全国的な視点からみた特異性について、客観的またはそれに準ずる評価基準によって説明できる地域資源を中心に記載しました。
例：○○の数は日本一
○○による評価は全国トップクラス
- 全国的な視点からみて特異性があるとまでは言い切れないものの、地域の形成において影響が大きい(大きかった)と思われるものについては記載した場合があります。

10 果物 (全国トップクラスのりんご・もも・ぶどう生産)

1 はじめに

果物の原産地は、海外由来のものが多いですが、日本では縄文時代の遺跡から種が出土するなど、古い歴史を有する果物もあります。

果物の種類によって気候や土壌の条件による適地が異なります。たとえばりんごは比較的冷涼な地域、ももやぶどうは比較的少雨で水はけの良い地域、みかんは日照が多く温暖な地域で主に生産されています。長野県全体ではりんご、もも、ぶどうなど、新潟県全体では西洋なしなどが国内有数の生産地となっています。

最近30年間でみると、国内の果物全体の消費量は大きく変わっていませんが、果物の種類によっては消費量が減少したり、輸入品に押されているものも少なくありません。

選定作業や害虫駆除の作業など、栽培には大きな手間を要しますが、様々な品種改良が行われ数多くの品種を生み出すとともに、品質によっては付加価値が大きく海外への輸出などが期待される産業の一つでもあります。

■ 果物の受給状況の推移

■ 主要果物の出荷量の推移

■ 都道府県別の生産量(2017年)

■ その他の果物生産

- ブルーベリー
- 梨
- 柿

2 特徴

■ りんごの生産

- 都道府県別の生産量は、青森県に次いで長野県が第2位。長野県内では長野市をはじめ、須坂市・甲斐市で4割強を占める。青森県生果出荷増進とならんで国内トップクラスの生産地といつてよい。
- 「ふじ」をはじめ、「つがる」や長野県生まれのりんご三兄弟といわれる「秋映(あきばえ)」、シナゴールド、シナスイート」などを栽培。

■ ももの生産

- 都道府県別の生産量は、山梨県に次いで長野県が第3位。長野県内では長野市・甲斐市・須坂市の生産量が大半を占める。
- 「川中島白桃」、「あかつき」をはじめ、長野県が生産量日本一の「ネクターリン」などを栽培。
- 桃とネクターリンの自然交配により、須坂市で生まれた「ワッサー」などもある。

■ 果物の産地

■ ぶどうの生産

- 都道府県別の生産量は、山梨県に次いで長野県が第2位。長野県内では、須坂市や中野市などの北信地域の生産量が大半を占める。
- 長野県が生産量日本一の「巨峰」をはじめ、須坂市が同日本一の「ナガノパープル」や、「シャインマスカット」、ワイン用ブドウの「シャルドネ」や「メルロー」などを栽培。

■ その他の果物生産

- ブルーベリー
- 梨
- 柿

※ 市町村別生産量の一部は、農林水産省「平成16年農作物統計」に基づくものであるため、近年の数は変動している可能性がある。

3 因果関係

- 2で説明した特徴がなぜ生まれたのか、その結果として何が生まれたのかなど、特徴形成にまつわる因果関係を示しました。
- 中心に特徴を示すイラストを記載しました。中心に矢印が向かっている場合は「要因」、中心から矢印が出ている場合は「結果」を表します。
- 因果関係のうち、他のページで特徴（テーマ）として説明している場合は、そのテーマの番号を右上に示しました。
- 色彩は、1で示したものと対応しています。

4 解説

- 1～3で説明したテーマの概要やこの地域の特徴、その因果関係をふりかえりつつ、今後の地域学習や地域づくりにおいて皆さんと共に考えたい課題について提示しました。
- ここでの考察はあくまでも一つの見方であるため、皆さん独自の捉え方をしていただければ幸いです。

3 因果関係

<p>水はけの良い地形・地質 01</p> <ul style="list-style-type: none"> 果物は一般的に水はけの良いところを好む。 かつての火山である高社山や飯綱山などの山麓は、扇状地が形成され、水はけが良い。 千曲川流域には、古い時代の盆地の上に堆積した砂や砂礫からなる丘陵や台地、段丘、自然堤防などがあり、同じく水はけが良い。 	<p>少雨で気温の日照差が大きい気候 02</p> <ul style="list-style-type: none"> 国内有数の少雨地帯（年間降水量1,000mm前後）で、日照が多く、朝晩の温度差が大きい地域では、果物の糖度が高まり、果物の色付きも鮮やかになる。（多雨地域は不適。また糖度が高すぎると、酸味・澁の問題が発生） りんごは比較的冷涼な気候を好む（ただし剪定作業の遅れる雪国では栽培困難）。もも・ぶどうは、りんごに比べてより乾燥を好む。 	<p>畜産業の衰退 14</p> <ul style="list-style-type: none"> 明治・大正時代の長野県は、国内トップクラスの畜産の生産地であり、海外への輸出を積極的に進めていたが、昭和の好牧畜や競争などを経て衰退。 これに代わる産業として、畜産の転用などにより果樹、畜産時代は、動物生産が優先され生産制約される。
---	--	---



<p>研究開発の経緯</p> <ul style="list-style-type: none"> 病害虫の対応、国内他地域や輸入品との競争、栽培・収穫・販売時期の様分け、消費者の嗜好の変化など様々な課題を抱える中、須坂市にある果の果樹試験場では、様々な新品種の果樹や生産方法の改善に向けた研究開発を継続的に実施。 	<p>りんご産からの転換 10</p> <ul style="list-style-type: none"> 1960年代以降は腐乱病による被害が頻発、りんご産の一部はももやぶどうへの転換が進む。 （中野市の一部地域では、アスパラガスやジャケツクなどの畑作へも転換が進む） 1970年代からは、稲作の生産調整を受けて水田からの転換も。 	<p>ワイン等加工工場の生産開始 12</p> <ul style="list-style-type: none"> ワイン、シードル、ジャムなどの様々な加工品生産が進む。
---	---	--

<p>総合等による組織的対応</p> <ul style="list-style-type: none"> 戦後、果実栽培の大きな課題である労働時間・経費や価格の安定化に向け、消費出荷作業などの共同化を推進。 	<p>山岳や観光寺など観光地の発達 16 18</p> <ul style="list-style-type: none"> りんごは、善光寺詣りの土産品として明治時代から人気。 現在では、果物加工品も含め、登山やスキー、避暑などで訪れる観光客のお土産として人気。 一部の果樹農園は、観光資源として交流人口の増加にも貢献。
--	---

4 解説

要約

- 長野県北部の長野地域や北信地域は、果物の中でもりんご、もも、ぶどうについては国内有数の生産地です。
- この地域は、国内有数の少雨地帯であることや、朝晩の温度差が大きいといった気候条件に加え、水はけの良い地形・地質など、これらの果物栽培に適した自然環境を有しています。
- また、善光寺参りや、山国ならではの登山、スキー、避暑などの観光客が数多く訪れる地域であるため、土産物としても重宝され、さらには農園の一部が観光地としても認知されるなど、住民以外の需要があることも追い風になっています。
- しかし歴史を振り返れば、明治時代に国を挙げてけん引した畜産業があり、長野県がその中心的役割を果たしていたこと、その背景には稲作などに適さない土地を数多く有し、手間のかかる産業ではあるものの「豊饒で勝負するしかない」状況下で力を注いだ結果として、大きな発展を遂げたといえます。しかし、畜産業は世界的な経済情勢の変化などから、大正から昭和にかけてほとんど倒産します。それに代わる産業の一つとして見いだされたのがりんご栽培です。同時に「りんごで勝負するしかない」状況下で力を注いだ結果、戦後も大きく発展した時期がありましたが、その後の病害虫の被害などで壊滅的被害を受けた地域もありました。その状況下から、ももやぶどう、野菜や花卉への生産転換も行われました。
- その後、国民の食生活や嗜好の変化、国内外の産地間や嗜好品の中での競争下で、労働負担の軽減や病害虫対策、新たな品種開発などの研究開発を続け、様々な商品を世に出しながら今日に至っています。
- このように度重なる危機に対し、あるときは地道な研究開発の力で、あるときは思い切った転換で乗り切ってきた点では、あると大きな違いがあるといえます。
- 今後は、国内はもとより輸入品との差別化に加え、国内の人口減少、異常気象の増加などの新たな課題にも対応を迫られています。

解説

- 隣接する新潟県の上越地方や魚沼地方では、これらの果物栽培はほとんど行われていません。気候条件をはじめ、地形・地質、それらに伴う中心的産業（稲作が主要）の違い、観光地としての発達度の違いなど、自然の力の大きさを物語っており、近距離で生産物が全く異なるおもしろさを見ることができそうです。
- 新潟県は、豪雪地帯として経済的に苦節してきた地域ではありませんが、古くから稲作を中心に生活を立て続けてきた点では、歩んできた道に大きな違いがあるといえます。
- ただし、これらを含め別々の環境と捉えるよりも、「環境に慣れたあるある間山脈があって、新潟県側でたっぷり水分をいただくから、長野盆地でりんごやももが実が成り、お互いに育つことができる」などの見方をすることによって、実は両者に深い関係があるともみることができそうです。（全国トップクラスの果物生産量を誇る隣には、国内トップクラスの降水量の少なさがあり、その隣には国内トップクラスの降水量を誇る新潟県があるということになります。）
- 隣接しながらも対極的な側面をもつ両県ですが、このようにこの県境をはさまる地域を一体として地域経営を考えてみると、意外と安定的な地域になるかもしれません。

主な参考文献
内山幸次（1996）果樹生産地域の構成。大田実 / 柏企画編（2007）信州のりんご 戦後を支えた赤い果実

※ 1～4の具体的な根拠などの補足説明は、別途作成する資料編に掲載します。



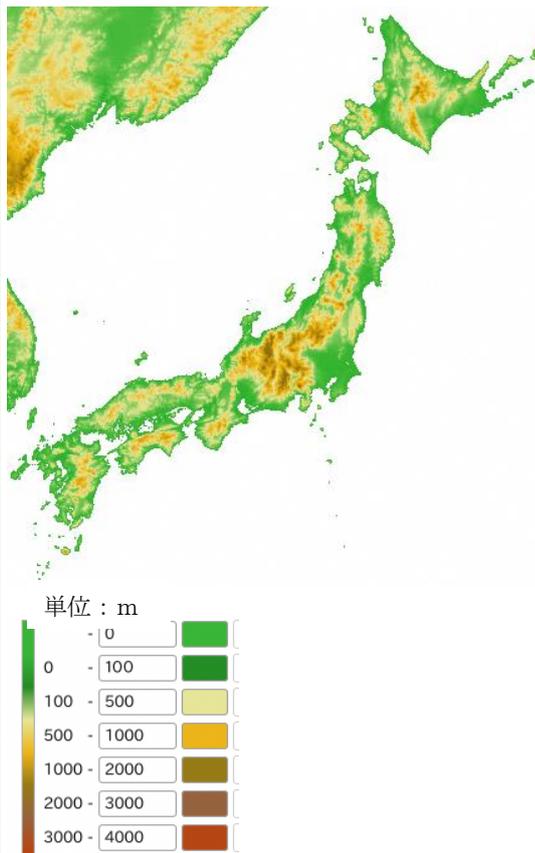
1 はじめに

日本列島の面積は、山地と丘陵で全体の約7割を占めており、世界的に見ても山地が多く、急峻な地形です。これは、日本列島が新しい造山帯に属しているため山地の隆起が激しく、降水量の多さにより河川による浸食もはげしいことに由来しています。

約2,000万年前、日本列島はアジア大陸から離れていき、その真ん中で折れてフォッサマグナの海ができ、そこに土砂が流れ込むなどして砂や泥の厚い地層が形成されました。約300万年前には日本列島全体が隆起を始め、その後の地殻変動や火山活動、河川による土砂の堆積などで山や平野が形成されました。現在の地形はそのほとんどが約200万年前以内に形成されたものといわれています。

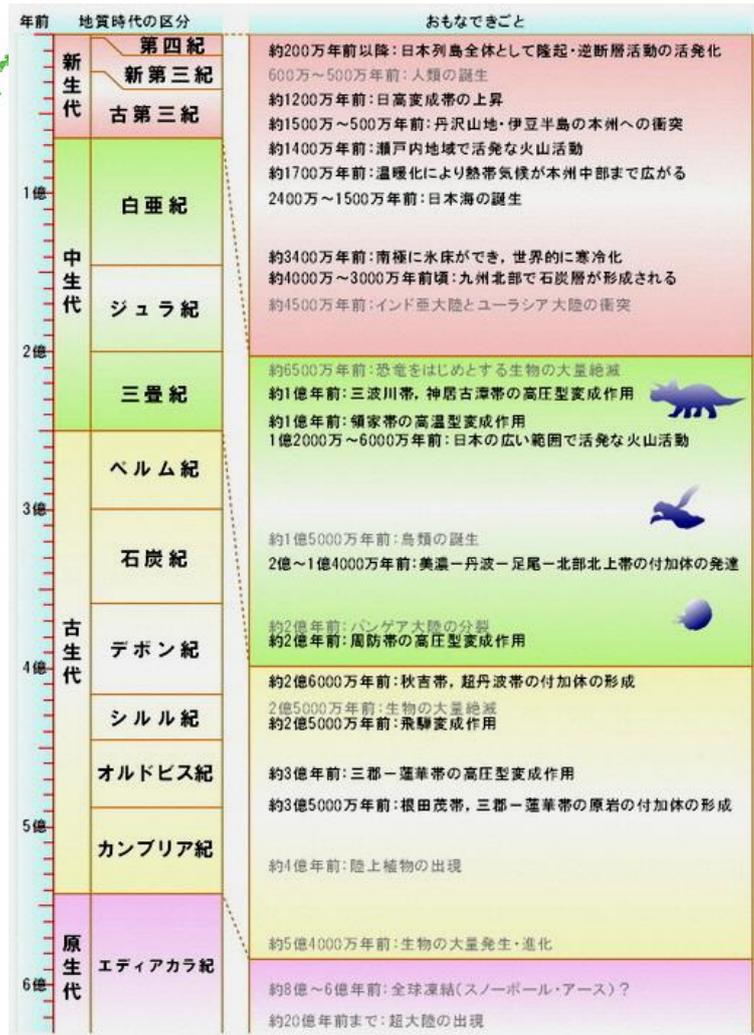
地球は約46億年の歴史をもち、主に生物の進化の過程をもとに時代が区分されています。最も新しい時代は約260万年前から現在までの「第四紀」とされていますが、現在見られる地形のほとんどが、この新しい時代に形成されています。

■ 標高



出所) 国土地理院ホームページをもとに作成

■ 地質時代と主なできごと



出所) 産業技術総合研究所地質調査総合センターホームページ

2 特徴

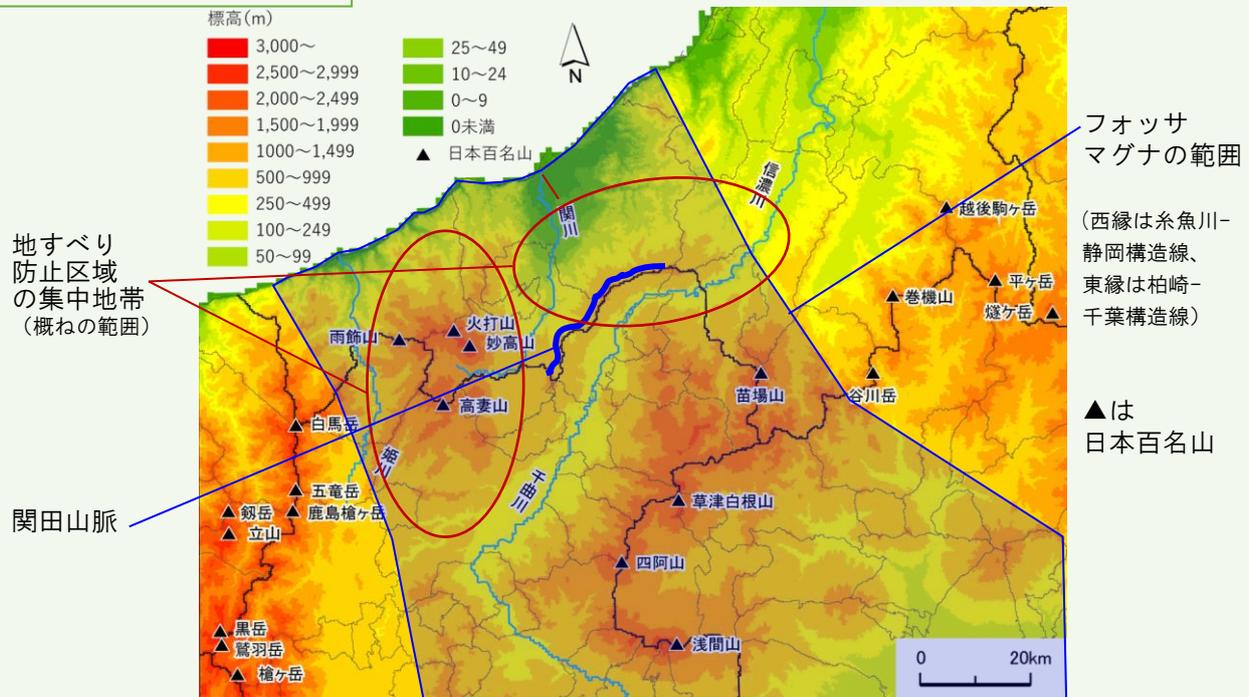
歴史の多様性（古い～新しい）

- 糸魚川—静岡構造線の西側は1億年前より古い岩石、東側は2,000万年前より新しい岩石。糸魚川市内の断層ではその両方を見ることができる。
- 新潟・長野県境の関田山脈は、約100万年前に海や平地であったところから隆起や褶曲によって1,000m級の高さに成長した山脈。“若い”山脈としてはトップクラスの高さを持つ。
- 信濃川（千曲川）は、約40万年前まで上越地方に流れ込んでいたものが、急激に形成された山脈や丘陵などとともに大きく曲がり、魚沼地方へ流れ込む。

集中する地すべり地帯

- 新潟県における地すべり防止区域の指定箇所は、数・面積ともに全国1位。中でも西頸城、東頸城、魚沼の丘陵地帯に集中する。
- 長野県における地すべり防止区域の指定箇所は、数・面積ともに全国3位。中でも長野・北信地域の一部（千曲川やその支流の犀川、姫川で囲まれた地帯）に集中する。

信越県境付近の地形・標高



出所) 国土地理院数値地図および日本百名山協会ホームページをもとに作成

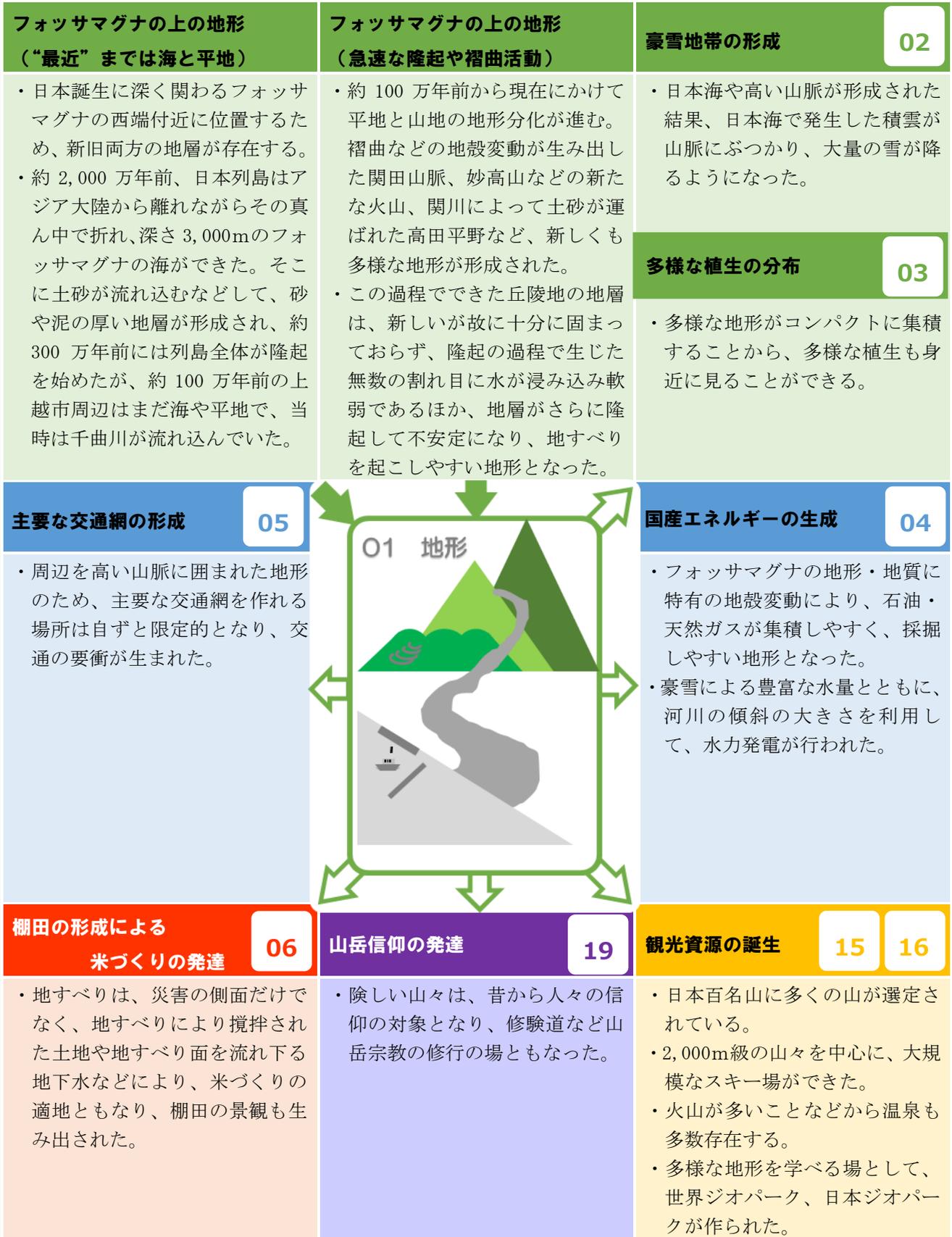
地形の多様性（高～低・短～長）

- 関川水系は、2,000m以上の高山を水源とした一級水系の中で4番目に短いことから、その傾斜の大きさと短さは国内有数。糸魚川市内での標高差2,800mも国内有数。このことから、上越地方には短い距離の間に海岸・砂丘・平野・丘陵・高山などの多様な地形が存在する。
- 信濃川（千曲川）は日本最長の河川。源流は埼玉県、山梨県との県境にある甲武信ヶ岳にあり、長野・北信地方や魚沼地方を經由して新潟市に至る全長367kmの河川である。

その他特徴的な地形

- 信濃川の津南町付近は、日本最大級の河岸段丘と称されることもある。
- 清津峡（十日町市）は日本三大溪谷の一つと称される。

3 因果関係



4 解説

要約

- 約 2,000 万年前、日本列島がアジア大陸から離れていく過程の中で、その真ん中で折れて造られたのが深いフォッサマグナ（地質学的な溝）です。この地域は、このフォッサマグナの海に土砂が流れ込むなどして形成された厚い地層の上にあります。

したがって、約 300 万年前に列島全体が隆起を始めましたが、上越市周辺は約 100 万年前でもまだ海や平地であり、例えば妙高山などの火山、短期間に 1,000m 以上成長した関田山脈、大幅に経路変更をした信濃川（千曲川）、全国有数の地すべり地帯などの特徴的な地形は、これより後に作られました。一方、フォッサマグナの外縁部にあたる糸魚川市などには、数億年前の古い地形も残っています。

また、国内有数の傾斜と長さをもつ関川水系が象徴するように、短い距離の中に、砂丘、平野、丘陵、高山が存在している一方、国内最長の信濃川やそれらが作り出した盆地があり、両者が隣り合う地域にあります。わずか 100 万年前まではこの関川と信濃川が一緒のものであり、現在の対照的な地形は奇しくも関田山脈の隆起などがもたらした結果でもあります。

このように古い地形と新しい地形、急峻な地形と緩やかな地形がコンパクトにまとまった国内有数の地域ということもできます。

- 山脈や日本海が形成された結果、国内有数の豪雪地帯となり、豊富な雪解け水と急峻な地形を利用して、水力発電が行われました。フォッサマグナの地形・地質は、石油・天然ガスの基となる層や地殻変動により石油・天然ガスが集まりやすい特徴があり、石油・天然ガスが採れやすい地域となりました。

また、周辺を高い山脈に囲まれた地形のため、その地形的条件が影響して交通の要衝となり、高い山々は人々の信仰の対象となり、修験道など修行の場ともなりました。日本百名山に選定された山も多数存在します。火山が多いことなどから温泉も多く、2,000m 級の山々を中心に大規模なスキー場もできました。地すべりは災害という側面だけではなく、米づくりの適地や美しい棚田の景観なども生み出しています。

考察

- 地形の歴史を考えると、1,000 年はもちろん 100 万年前も最近であり、時間的スケールの違いを感じさせられます。地域づくりの本質、あるいは自然災害や環境問題への対応を考えるための広い視野を与えてくれます。
- 日常生活においては大地の特徴を感じる機会は少ないかもしれませんが、まちは大地の上に造られたものであり、その土地の地形・地質の影響を多分に受けています。まちの特徴を探り、地域にある資源を磨き上げる上で、今一度こうした地形・地質の特徴にまで立ち返り、地域を見直すことは重要であるといえます。

その意味では、最近注目されているジオパーク（この地域内では、糸魚川と苗場山麓）、NHK の「ブラタモリ」などは、地形・地質にさかのぼってまちの成り立ちを考える好材料といえます。

主な参考文献

フォッサマグナミュージアム（2006）：フォッサマグナってなんだろう / 成瀬洋（1977）：日本島の生いたち、同文書院 / 小林巖雄・国土交通省北陸地方整備局（2007）：信濃川・越後平野の地形と地質、北陸建設弘済会 / 市川正夫（2013）：改訂版やさしい長野県の教科書 地理、しなのき書房



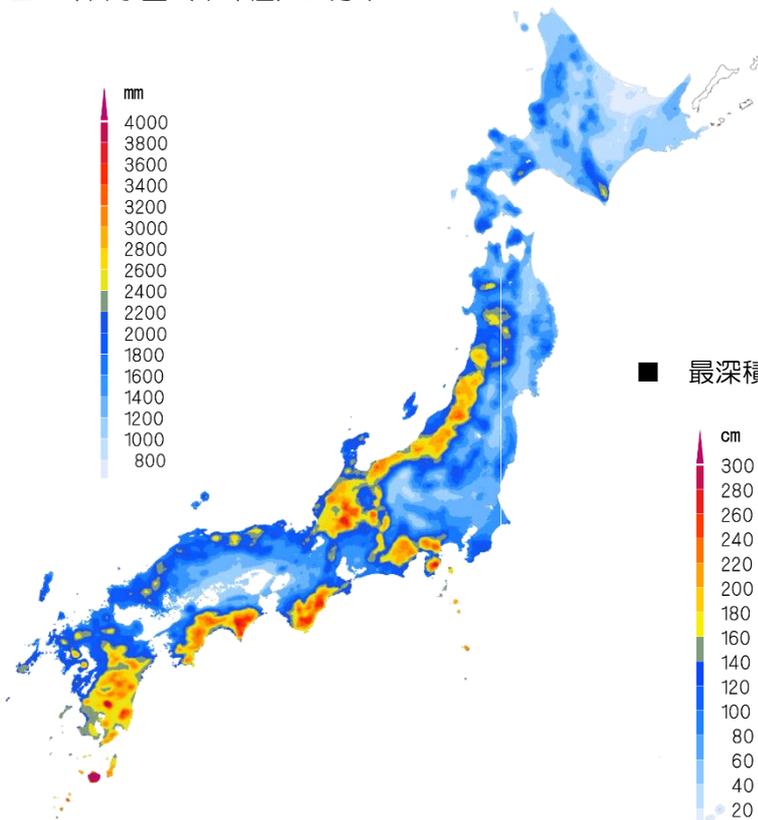
1 はじめに

日本列島は南北に長く、高い山々が連なる山脈もあるため、亜寒帯から亜熱帯まで様々な気候区分に属しています。

例えば年間の降水量をみると、屋久島や三重県尾鷲など西南日本の太平洋側が多くなっていますが、日本海側の北陸地方にも多い地域がみられます。冬期間では、太平洋側で晴れの日が多くなる一方、日本海側では曇りや雪または雨の日が多くなります。

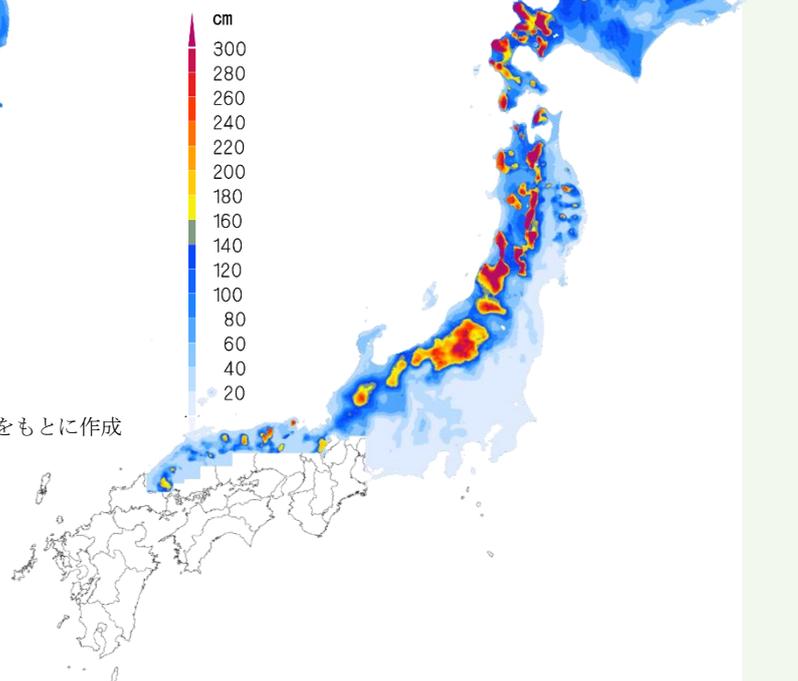
海外で雪がたくさん降る地域は、基本的に標高の高い山地や人があまり住んでいないところであり、日本ほど人口密度が高いところに大量に雪が降る国はないといわれています。その中でも、新潟県などは豪雪地帯として知られています。近年では、地球温暖化の影響からか昔ほどの大雪は降らなくなりましたが、それでも全国の中で雪が多いことに変わりはありません。

■ 年降水量（平年値）の分布



出所) 気象庁「メッシュ平年値 2010 降水量 (年)」をもとに作成

■ 最深積雪（平年値）の分布



出所) 気象庁「メッシュ平年値 2010 最深積雪 (年)」をもとに作成

2 特徴

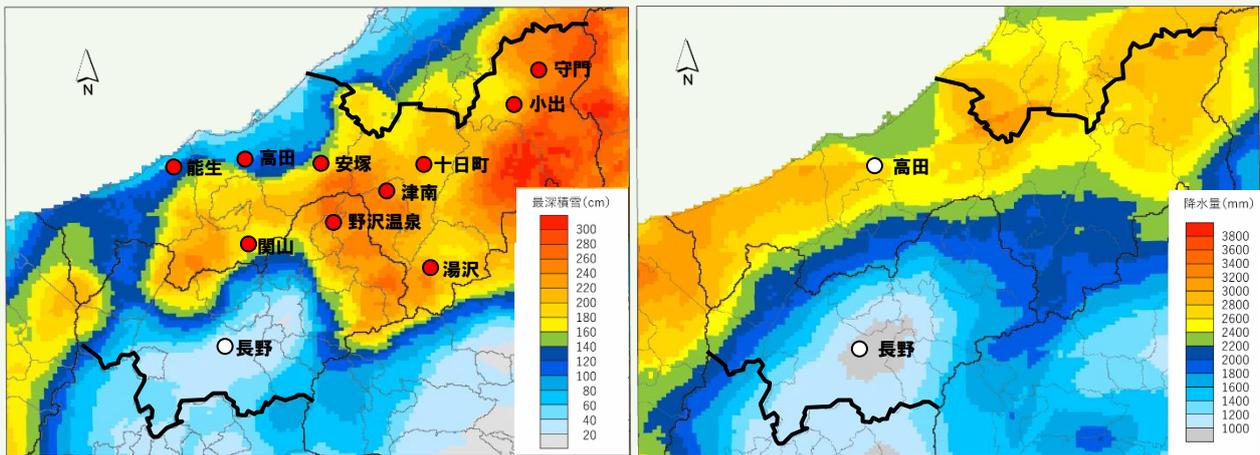
雪の多さと少なさ（最深積雪）

- アメダスの国内トップ 20 に、3 位の魚沼市守門（463cm）や5位の津南町（416 cm）をはじめ 10 か所が含まれる。
 - 人の住むところでの日本記録は、上越市板倉区 柄山の 818 cm（1927 年）。
 - 旧国鉄の日本記録は、飯山線森宮野原駅（栄村）の 785 cm（1945 年）。
 - 気象台等のある都市での日本記録は、上越市高田の 377cm（1945 年）。
（一方、長野市ではあまり積雪はみられない）
- *1 日の降雪量について、旧国鉄の日本記録は関山駅（妙高市）の 210cm（1946 年）。

雨量の多さと少なさ（年降水量の平年値）

- 長野市は 933 mm であり、県庁所在地の中で最も雨が少ない。
- 上越市高田は 2,755 mm であり、1 位の屋久島（4,477mm）や2位の三重県尾鷲（3,849mm）ほどではないが、全国で9番目に降水量が多い。

信越県境付近の最深積雪（左）と年降水量（右）の平年値の分布



備考) 気象台等のある都市および最深積雪トップ 20 に入るアメダス観測値を記載
出所) 国土地理院数値地図および国土交通省「国土数値情報」(平成 24 年度作成) をもとに作成

日照時間の多さと少なさ（年日照時間の平年値）

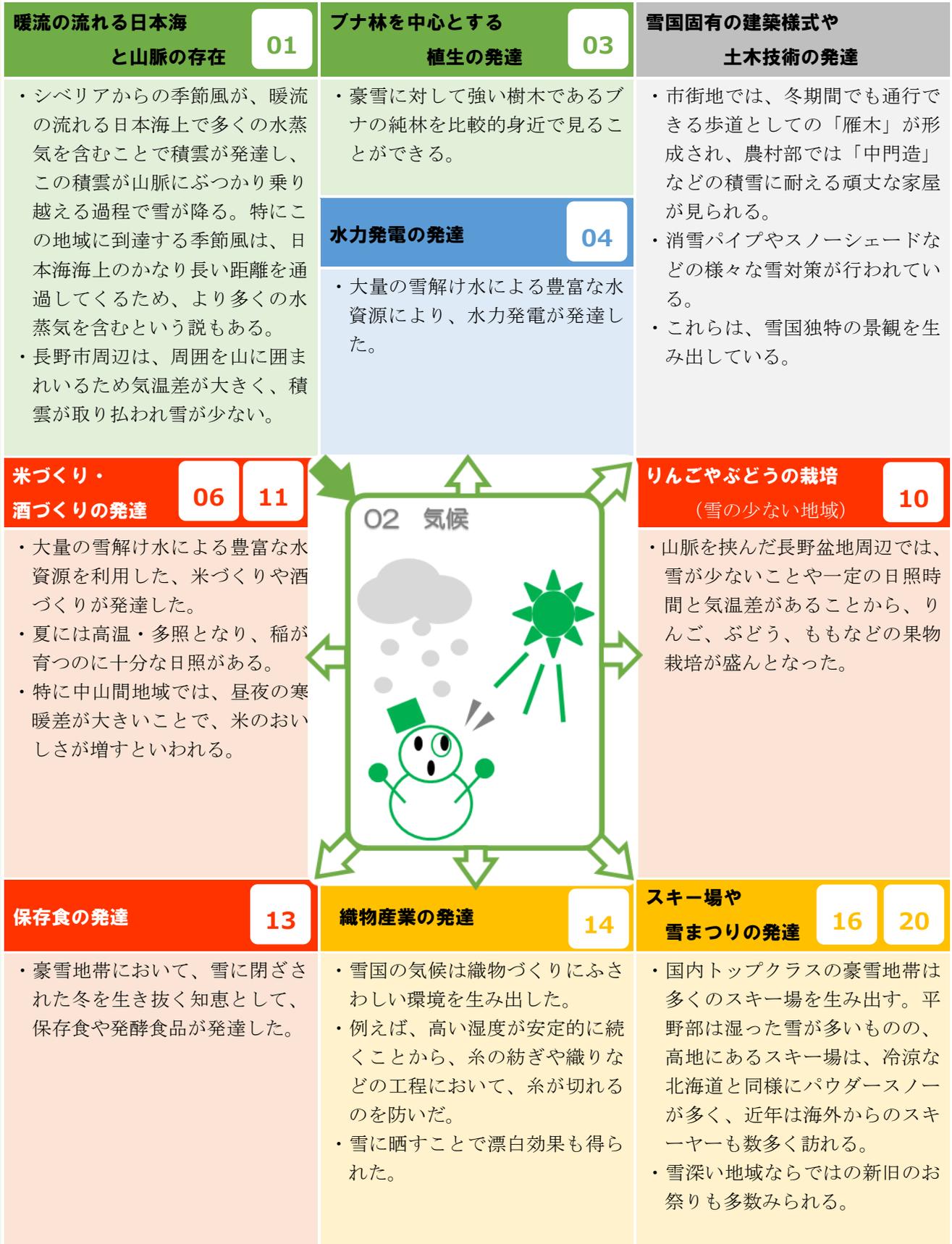
- 長野市は 1,940 時間で同 54 位。上位を占めるのは太平洋側や瀬戸内海付近の温暖な地域が大半であり、それらを除くと比較的日照時間の多い地域といえることができる。
- 上越市高田は 1,591 時間であり、全国 134 位。北海道と沖縄を除くと、10 番目に日照時間が少ない地域である。

気温差の大きさ（平年値）

- 7月の1日の気温差（最高気温と最低気温の差）
- 長野市は 9.1℃であり全国7位の大きさ。
- 高田は 8.1℃で全国 32 位だが、長野をはじめ内陸の盆地が上位を占める中で、それ以外の地域としてはかなり上位に位置する。
- 1年間の気温差（一年のうち最も高い月平均気温と最も低い月平均気温との差）
- 長野市は 25.8℃で全国 6 位の大きさ。北海道を除くと最も気温差が大きい。
- 高田も 23.9℃で全国 31 位と上位に位置する。

※ 降水量、日照時間、気温差については、気象台等のある 156 地点の中での順位を表す。また特に断りのない限り平年値（1981～2010 年の平均値）を表す。

3 因果関係



4 解説

要 約

- この地域は、アメダスの最深積雪国内トップ 20 に 7 か所が入るほか、人の住むところでの積雪深の日本記録や、旧国鉄の積雪深の日本記録、旧国鉄の 1 日の降雪量の日本記録なども有し、国内有数の豪雪地帯といえます。そもそも日本は人の住む地域では世界有数の豪雪地帯であるため、この地域は世界有数の豪雪地帯ということもできます。

降水量では、上越市高田は全国 9 位であるのに対し、長野市は全国 151 位と対照的です。日照や 1 年間の気温の差についても違いがみられます。このように、峠を挟み対照的な気候が隣り合っている稀な地域でもあります。

- 豪雪となる理由には、日本海と山脈の位置が大きく関係しています。

冬には、シベリアからの季節風が、日本海で多くの水蒸気を含み積雲が発達します。この積雲が山脈にぶつかり乗り越える過程で信越県境付近に雪が降ります。特に信越県境地域に到達する季節風は、日本海海上のかなり長い距離を通過してくるため、より多くの水蒸気を含むという見方があります。

また、長野県側でも県境付近から少し離れると、高い山脈により積雲が取り払われ雪はあまり降りません。周囲を山に囲まれているため、むしろ降水量が少なく、気温差も大きくなります。

海から比較的近い場所に高い山脈があり、その山脈を挟んで隣り合っている（地形がコンパクトにまとまっている）ため、こうした違いが際立つこととなります。

- 雪を中心とした降水量の多さは豊富な水資源となり、水力発電や米づくり、酒づくりなどが発達しました。また、雪国で生活するための知恵として保存食品や発酵食品が発達しました。冬期間でも人が行き来できる雁木、一斉雪おろしや消雪パイプなどの雪対策、積雪に耐える頑丈な家屋も見られ、これらは、雪国独特の景観も生み出しました。

その他、多雪地帯を特徴づけるブナ林を比較的身近で見ることができる一方で、山を挟んで雪が少なく、日照や気温が果物栽培に適した地域では、りんごやぶどうなどの栽培が盛んとなりました。

考 察

- 雪国に住み続ける人にとって「雪はない方が楽」という思いが正直なところかもしれませんが、雪はほぼすべての地域資源に関わっており、雪なしにこの地域を語ることはできません。湯沢町など 7 市町村で構成する雪国観光圏が提唱する「雪国文化」は、まさにこのことを言い当てています。
- 豪雪地帯が存在する故に、その隣接地に雨が少ない地域を生み出しています。この範囲で捉えることで、対照的な地域が隣り合っていることにより得られてきた恩恵に気づくこともできます。
- 地球温暖化により降雪量が大きく変わる可能性もある中、雪の減少を喜ぶ声も多い一方で、それによって失われる雪国文化は少なくありません。その価値を発信しつつ、世界的な環境問題に取り組む意義や力を持ち合わせた地域であると感じます。
- あわせて、一定の気候変動は避けられない状況にあることから、蓄積された地域の DNA でもある雪国文化を大切にしつつ、気候変動に適応する文化をその礎の上に積み重ねる視点も重要と考えます。

主な参考文献

気象庁ホームページ / 上越市の気象編集委員会 (1979) : 上越市の気象、上越科学教育研究室 / 斉木昭 (2000) : 上越地方の気象、アルゴス / 市川正夫 (2018) : 信州学 長野と松本のなぜ?、信州教育出版社

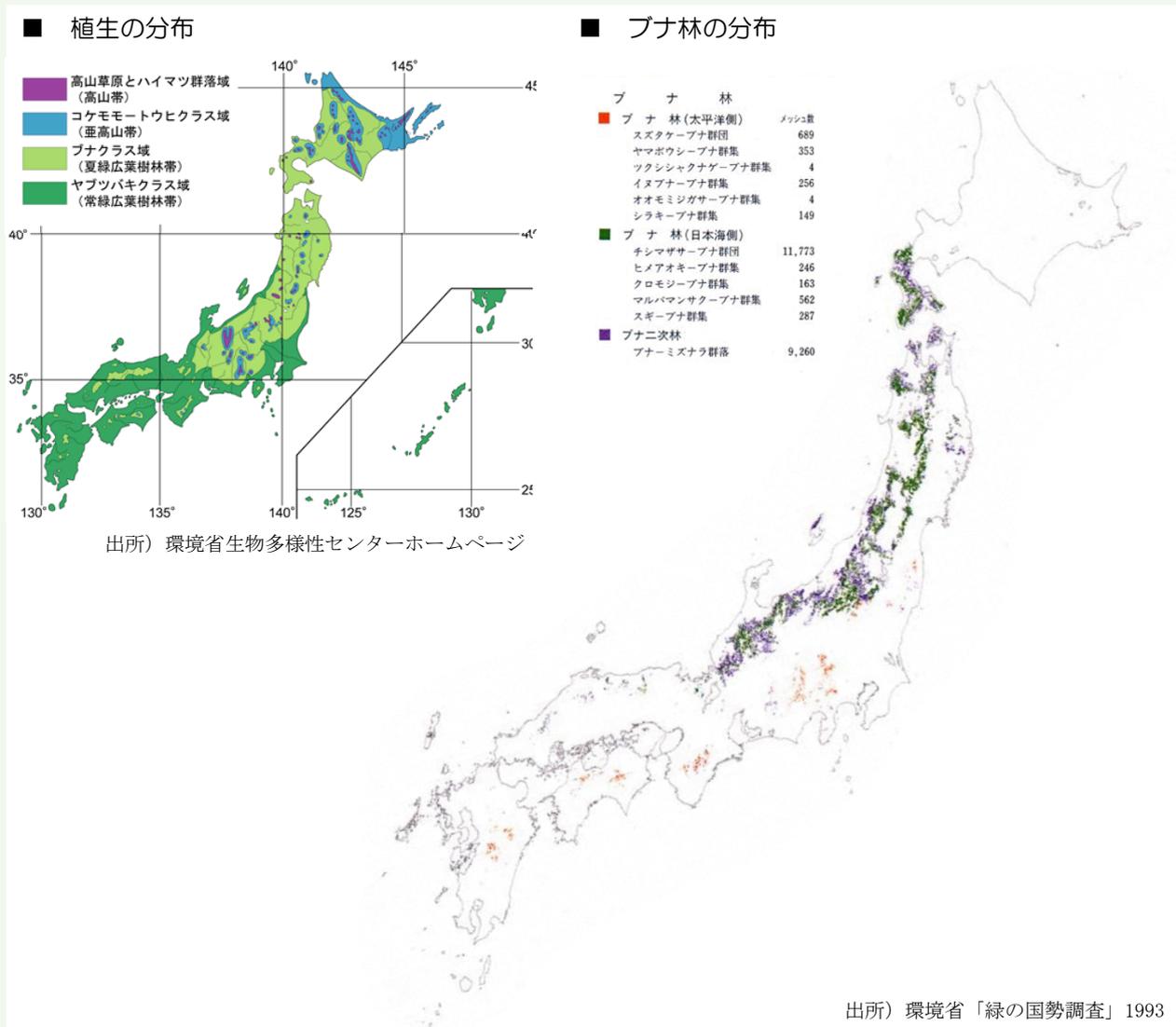


1 はじめに

日本列島は、北から南に約 3,000 km と長く、海岸から高山まで様々な立地を有するため、それぞれの地域に応じた多様な生物相が形成され、植物も多様です。植物の分布は、基本的には気温と降水量に対応しますが、3,000m 級の山脈を有する日本列島では、緯度に伴う水平分布と標高による垂直分布の分布パターンが見られます。

植生とは、ある地域を覆っている植物体の総称をいい、それらの面的な配分状況を地図上に表現したものが植生図です。日本の植生は、高山帯、コケモモトウヒクラス域、ブナクラス域、ヤブツバキクラス域の大きく 4 つに分類されています。新潟・長野県境や富山県周辺は、多様な植生を楽しむことができる国内有数の地域ともいえます。

なお、豪雪地帯を特徴づける森林にブナ林があり、中心的な分布は北海道渡島半島から本州中部までの日本海側の山地部にみられますが、新潟県も国内有数の分布地です。



2 特徴

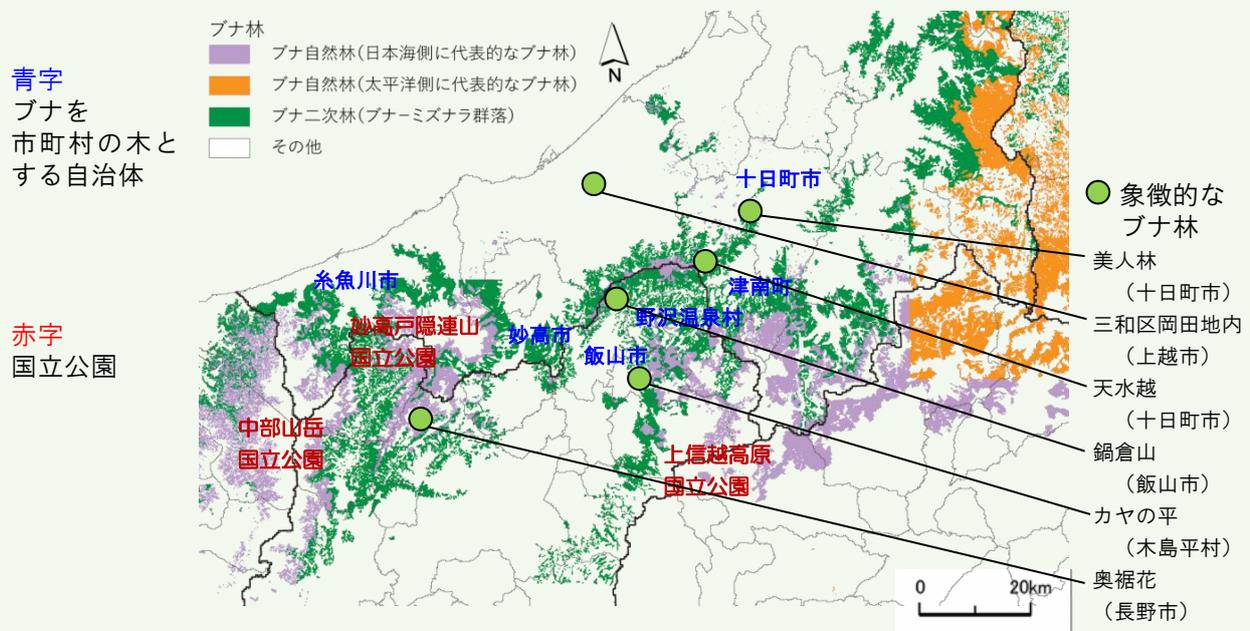
植生の境界

- 沿岸部は、落葉広葉樹林帯と常緑広葉樹林帯の境界に位置する。
- 妙高山・白馬岳山頂付近など標高の高い地域では、亜高山帯や高山帯の植生もみられる。
- 上越市は、日本海側の雪の多い地域に自生するユキツバキ、温暖な地域に多いヤブツバキ、両者の中間種ユキバタツバキが分布する数少ない地域といわれている。

ブナ林の発達

- 日本の自然 100 選の天水越（十日町市）、森の巨人たち 100 選の森太郎（飯山市）をはじめ、象徴的なブナ林が集積している。
- それらはブナの純林が多く、比較的近くで見ることができる。
- ブナを市町村の木に選定する自治体が 6 つもある。（全国では 40 程度と思われる）

信越県境付近のブナ林の分布

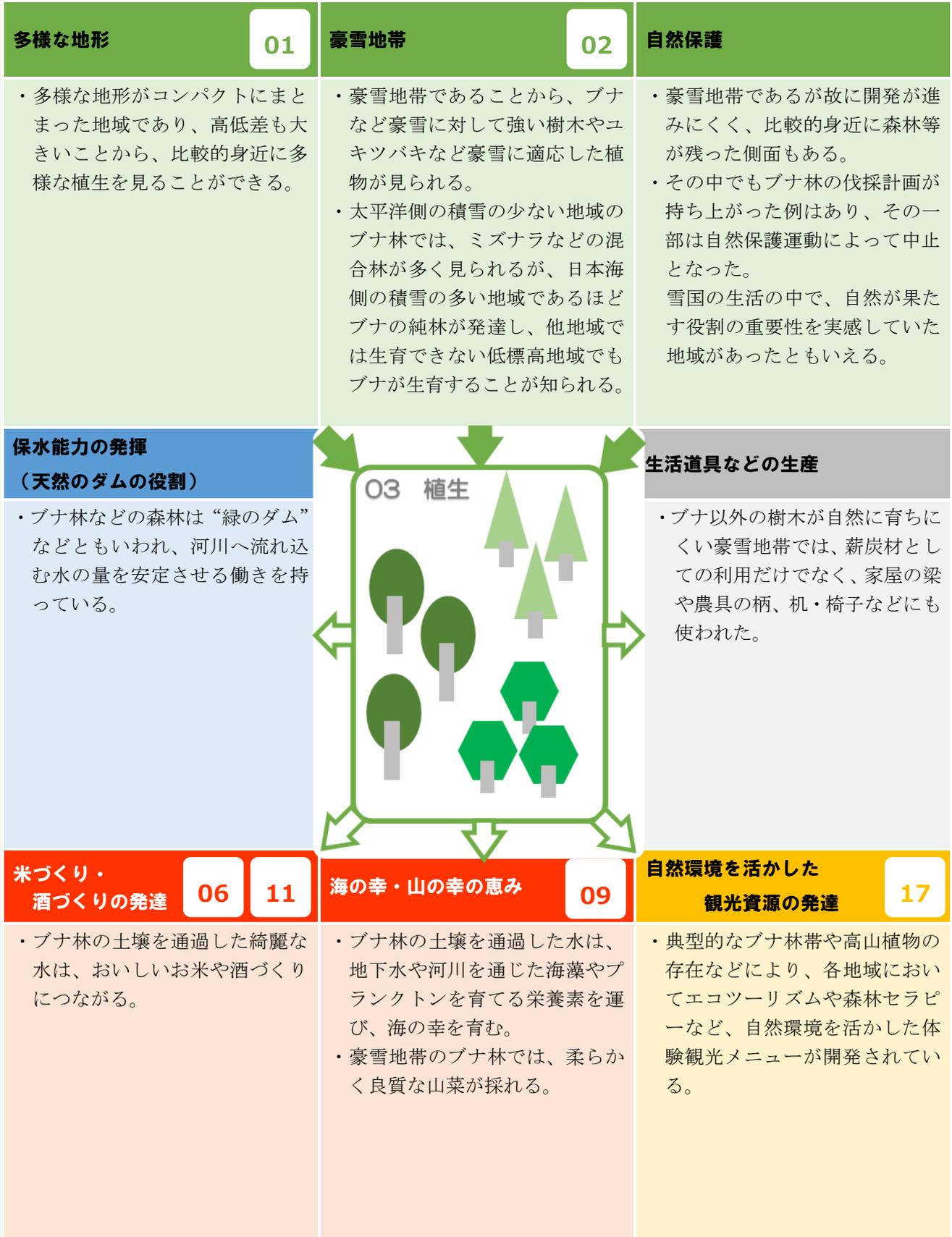


出所) 環境省「5万分の1現存植生図メッシュ」(1979~1998) および各市町村ホームページなどをもとに作成

積極的な自然保護活動

- 妙高戸隠連山国立公園をはじめ、保護・管理すべきすぐれた自然が存在する国立公園が 3 か所ある。
- 志賀高原は、生態系の保全と持続可能な利活用の調和を目的としたユネスコエコパークに登録されている（国内の登録件数は 9 件）。
- 鍋倉山のブナ林帯（飯山市）では、かつて営林署による伐採計画が持ち上がるも中止となる。これは地元の自然保護運動が国の方針を変えた全国初の事例ともいわれる。

3 因果関係



4 解説

要約

○ 信越県境地域では、沿岸部は落葉広葉樹林帯と常緑広葉樹林帯の境界に位置し、標高の高い地域は亜高山帯や高山帯の植生がみられます。これら植生の境界に位置することから、多様な植生を身近で見られる地域でもあります。

また、日本の自然100選の天水越（十日町市）、森の巨人たち100選の森太郎（飯山市）など、象徴的なブナ林が集積しており、雪国に特徴的なブナの純林を比較的近くで見ることができます。

そのほか、3か所の国立公園、志賀高原のユネスコエコパークなど、様々な保全と活用の取組が行われている地域でもあります。

○ 信越県境地域は、多様な地形がコンパクトにまとまった地域であり、高低差が大きいことに加え、低標高でありながら大量の雪が降ります。このことが、比較的身近に多様な植生を見ることができる要因となっています。

また、ブナは豪雪に対して強い樹木であるため、太平洋側では、ミズナラなどの混合林が多くみられますが、日本海側の積雪の多い地域であるほどブナの純林が発達し、他地域では生育できない低標高地域でもブナが生育することが知られています。このほかに、日本海側のブナ林の周辺に生育する植物も、雪に適応したものが多くみられます。

鍋倉山の例に見られるように、人里近くに自然が残っている背景には、豪雪により開発が進まなかった面もありますが、雪国の生活の中で自然が果たす役割の重要性を実感していたことも理由の一つといえるかもしれません。

○ ブナ林など森林は、河川へ流れ込む水の量を安定させる働きを持っているほか、ブナ林の土壌を通過したきれいな水は、おいしいお米や酒づくりにつながり、海の幸も育みます。豪雪地帯のブナ林では、柔らかく良質な山菜が採れるともいわれています。

ブナ以外の樹木が自然に育ちにくい豪雪地帯では、かつて薪炭材としての利用だけでなく、家屋の梁や農具の柄、机・椅子などにも使われていました。

近年では、ブナをはじめとした多様な植生は、エコツーリズム、森林セラピーなど、観光や癒しの場所としても注目されています。

考察

○ この地域は、豊かで多様な自然を有しており、人々は厳しさも含めてその自然環境に適応した生活をしてきたともいえます。ブナは使いづらいものの、雪国ではブナしか育たないため仕方なく活用してきたなどの見方もありますが、今一度これらの恩恵と自然との共存の歴史（活用しながら保存してきた知恵）を再確認することで、今後ますます問われてくる自然との向き合い方を考えるきっかけになると思います。

主な参考文献

環境省生物多様性センターホームページ / 福嶋司（2005）：図説日本の植生、朝倉書店 / 市川健夫（1987）：ブナ帯と日本人、講談社 / 小林誠、永野昌博、伊藤千恵、村山暁（2011）：雪里のブナ林のめぐみ、十日町市



1 はじめに

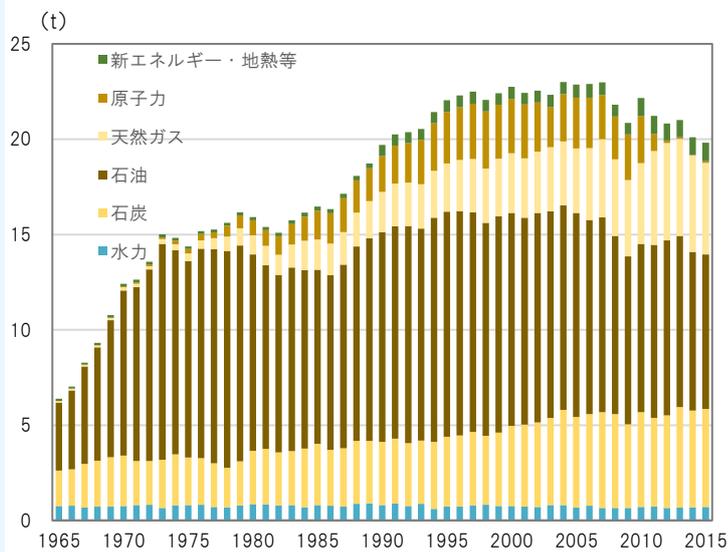
エネルギーは、人間生活において欠かすことのできないインフラです。エネルギーの種類には、石炭、石油、天然ガス、ウランなどの化石エネルギー、水力、太陽光、風力、雪氷などの自然エネルギー、木材などのバイオマスエネルギーや、それらを原料として生成・供給される電力や都市ガスなどがあります。

古くは植物由来の熱や灯、雪氷による冷熱を活用するなど、自然エネルギーの利用が基本でしたが、欧米では産業革命以降、日本国内では明治時代から各地域でガスや電力の供給が始まります。その後電力・ガス会社は統合が進み、供給施設は港湾部への集中化・大型化が進み、全国的な供給ネットワークが作られました。

中心的なエネルギー源は、時代とともに水力、石油、天然ガス、原子力などへと変遷しつつ、燃料の多様化と海外からの輸入によって消費量の増加に対応してきました。日本は化石燃料のほとんどを輸入に頼る中、新潟県は古くから石油や天然ガスを産出する数少ない地域です。

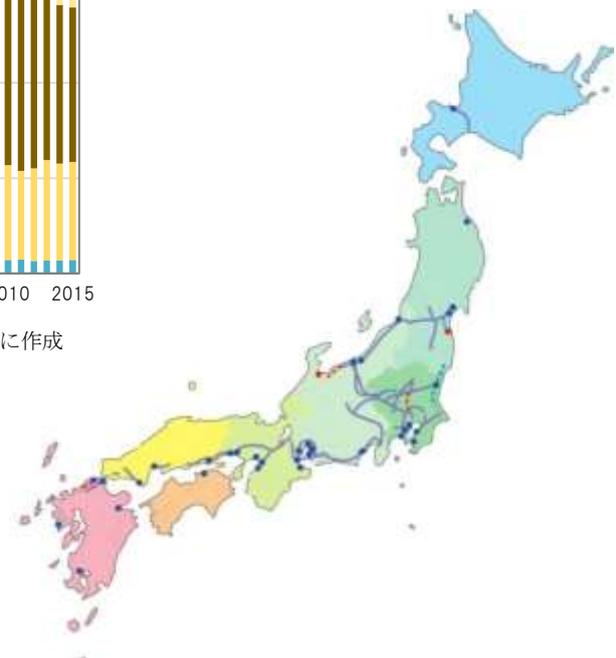
このほか、近年は温暖化対策や震災後の対応、技術開発の進展などにより、太陽光や風力等の自然エネルギーによる発電所や地域独自の電力会社をつくる動きもあります。

■ 国内のエネルギー供給量の推移



出所) エネルギー庁「エネルギー白書」をもとに作成

■ 国内のガスパイプラインと供給基地



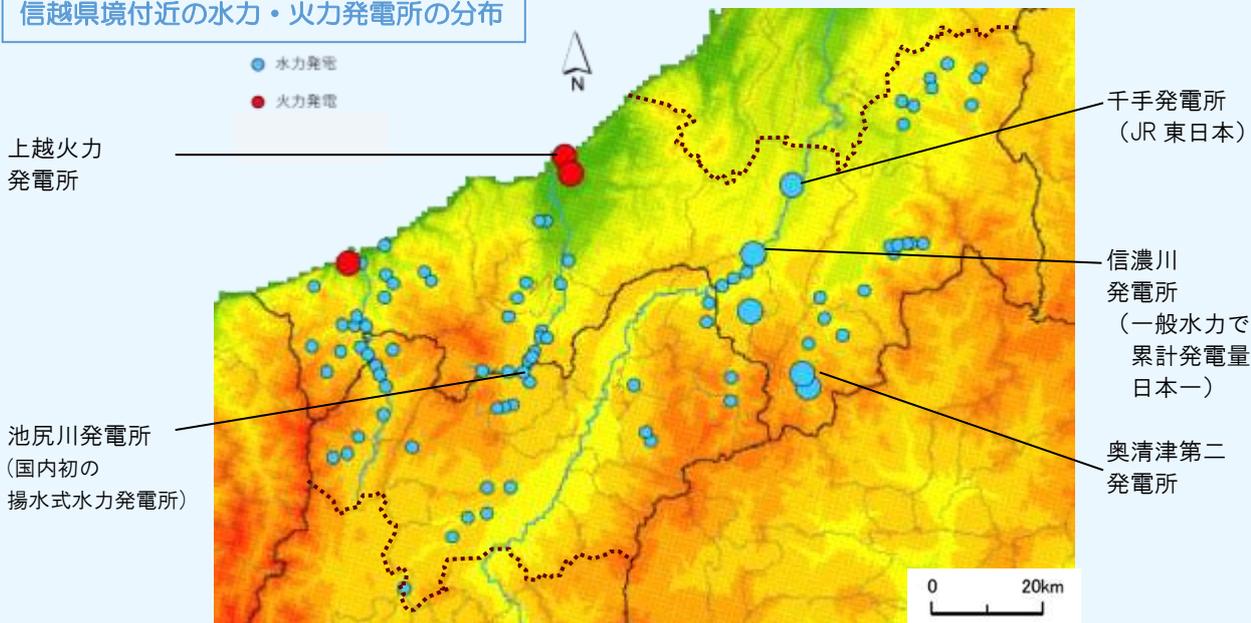
出所) 日本ガス協会ホームページをもとに作成

2 特徴

自然エネルギー（水・雪）活用の歴史

- 長野県は、古くは菜種油の産地であった。
- 小布施町の「信濃及び周辺地域の灯火用具」は、照明器具やあかりに関する歴史を知る貴重な資料として国指定有形民俗文化財に指定。
- 上越・魚沼地方などではかつて多くの雪室が存在した。現在では雪冷房施設の数が国内有数といわれる。
- 関川水系の県境付近にある池尻川発電所は、国内初の揚水式発電所として、農業用水との共存を図るなど珍しいタイプの発電所である。

信越県境付近の水力・火力発電所の分布



備考) 1MW未満の水力発電所および100MW未満の火力発電所を除く。大きな円は10MW以上の発電所
信越県境付近にある市町村(破線で挟まれた地域、市町村名はp.3に掲載)の発電所のみ掲載
出所) 国土地理院数値地図および電力土木技術協会ホームページなどをもとに作成

石油・天然ガス発掘地としての古い歴史

- 上越市の玄籐寺油田では、1877年、日本初の石油の機械掘りに成功し、その後日本初の石油パイプラインを設置した。
- 長野市では、日本初の石油会社である長野石炭油会社(後に長野石油会社に改称)が設立、浅川油田を開発した。
- 1888年、新潟県頸城郡域の油田は国内の約3分の1の石油産出量を誇っていた。
- 上越市には、1900年、当時東洋一の製油所といわれたインターナショナル石油会社が設立された。
- 戦後産出した上越市の頸城油田・ガス田は、1959年当時で日本一の石油・天然ガス産出量を誇った。

*いずれも現存はしていない。

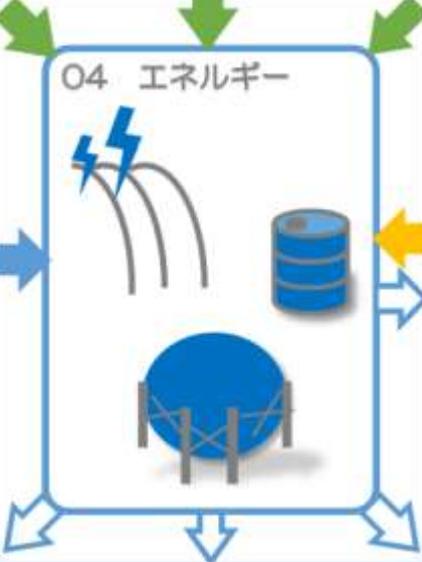
大規模な水力発電所

- 津南町の信濃川発電所は、一般水力において累計総発電電力量が日本一とされる。(津南町は日本一の水力発電地帯とも称される。)
- 湯沢町の奥清津第二発電所の出力は100万kWであり、国内の揚水式水力発電所のトップクラス。
- 十日町市の千手発電所は、小千谷、小千谷第二とともにJR東日本の発電施設であり、東京都のJRの約半分の電力を賄っているとされる。

天然ガスの国内供給拠点の一つ

- 上越市と長岡市を起点とする東京ラインは、国内最長のガスパイプラインである。
- 直江津港は、国内3か所のLNG部門日本海拠点港の一つ。LNG火力発電所、LNG基地が稼働している。
 - ・上越火力発電所は、中部電力管轄である長野県に電力需要量の8割を供給する。
 - ・LNG基地は、ガスパイプラインを通して太平洋側や北陸方面に輸入LNGを供給する。
- 新潟県上越沖は、表層型メタンハイドレートの調査海域として、国内数か所の調査地で唯一、初年度から3年連続で選定されている。

3 因果関係

<p>フォッサマグナ特有の地形・地質 (石油・天然ガスの集積) 01</p> <ul style="list-style-type: none"> ・フォッサマグナ (地質学的な溝) の真上に位置し、かつて海の底にあったため、石油・天然ガスのもととなる地層が堆積。その上に石油、天然ガスをためる砂岩層とその拡散を防ぐ泥岩層が交互に重なり、この地層が地殻変動で褶曲することによって山形の背斜部に石油や天然ガスが集積しやすい構造となった。 	<p>フォッサマグナ特有の地形・地質 (活発な火山・隆起・沈降) 01</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活発な火山活動や隆起・沈降などにより、水力発電に適した急峻な地形が作られた。 	<p>豪雪地帯 02</p> <ul style="list-style-type: none"> ・周辺の山岳地帯に大量の雪が積もり、豊富な雪解け水を蓄える天然のダム役割を果たすため、水力発電にも有効活用できる。
<p>首都圏への近さ 05</p> <ul style="list-style-type: none"> ・エネルギーの大消費地である首都圏に近接する地域であり、首都圏までのガスパイプラインが形成された。 ・その後、上越市内での採掘は廃止されるが、パイプラインの存在がLNG基地設置の一因ともなる。 ・首都圏への送電を目的として設置された大規模な水力発電所もある。 		<p>蚕糸業による開発 14</p> <ul style="list-style-type: none"> ・長野県須坂市などで発展した蚕糸業は、水力発電への投資の原動力となった。 ・水力発電による動力は、器械による製糸に利用された。
<p>化学・金属などの工場立地</p> <p>(上越地域の場合)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・明治から昭和初期には、電力会社が主導し、水力発電所の建設とともに化学・金属関係の工場の設置や誘致が進む。 ・天然ガスの産出に伴い、化学・金属関係の工場が立地。関連工場として、金属・機械・電子、精密機械工場なども立地する。 ・一部は撤退・休止あるいは業種転換した工場もあるが、現在もなお地域経済を支えている。 	<p>商業・サービス業の発展</p> <p>(上越地域の場合)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・水力発電所の存在は、旧日本陸軍の高田第13師団の誘致成功の一因となり、その後のスキー産業の発達や、朝市の開設、様々な商店の創業などにつながった。 	<p>採掘に伴う新たな発見 (ナウマンゾウの骨、温泉など) 15</p> <ul style="list-style-type: none"> ・野尻湖ナウマンゾウの骨は、水力発電によって湖の水位が低下する時期に発見されたもの。その後の博物館設置や大規模な発掘調査の発端となった。 ・石油・天然ガスの採掘に伴い温泉が噴出し、鶴の浜温泉、六日町温泉などの温泉地が形成された。

4 解説

要約

- 上越地域は、かつて国内でもまれな石油・天然ガスの産地でありました。また、信越県境地域では、地形や水資源にも恵まれ、比較的早期に水力発電が整備され、現在でも国内有数規模の水力発電所が存在します。こうしたことから、越境してエネルギー供給が盛んに行われ、エネルギー面で首都圏の生活を下支えしてきた地域でもあります。このほか、古くから雪氷エネルギーの活用も盛んに行われています。エネルギー自給率の低い日本にあって、エネルギー資源のフロンティア的な地域といえるかもしれません。

- 上越市周辺は、フォッサマグナ（地質学的な溝）の真上に位置しており、かつて海の底にあったため、石油・天然ガスのもととなる地層の堆積や、その後の砂岩層、泥岩層の堆積と地殻変動によって、石油や天然ガスが集積しやすい構造となりました。

また、周辺の山岳地帯に積もる雪による豊富な雪解け水と急峻な地形は、水力発電の立地を促しました。水力発電事業に投資する原動力となった蚕糸業が、近隣の長野県で栄えていたことも一つの要因です。

このほか、大消費地である首都圏へも比較的近く、エネルギーを供給する上でも好立地であったことから、ガスパイプラインなどが形成されました。

- 上越地域では、明治から昭和初期には、電力会社が主導して化学・金属関係の工場の設置や誘致が進みました。天然ガスの産出に伴い、化学・金属関係の工場が立地し、関連工場として、金属・機械・電子、精密機械の工場なども立地しました。こうした工場の多くは、現在もなお地域経済を支えています。

また、水力発電所の存在は、旧日本陸軍の高田第13師団の誘致成功の一因となり、その後のスキー産業の発達や、朝市の開設、様々な商店の創業などにつながりましたし、天然ガスの産出とともに温泉が噴出し、温泉街も形成されました。

このように、直接的・間接的に地域経済への影響を与えたほか、積み重ねられた基盤をもとに、首都圏等へのエネルギーの一大供給地としての地位を確立しつつもあります。

考察

- 人々の暮らしに不可欠なエネルギー資源を供給してきた地域であったことを知ることで、見えないところで他地域の生活を支えてきたことがわかります。また、エネルギー拠点として維持してきた先人の努力、他分野とのつながりによる発展を知ることができます。
- 一方で、国際情勢や国政に大きく左右されるエネルギー分野は、今後の暮らしや地域経済を考える上で避けられないテーマです。環境問題も含めエネルギー資源のあり方について考えるきっかけを作れる地域だと考えます。

主な参考文献

新潟県社会科教育研究会（1978）：新潟県上越地方の地誌、あかつき印刷 / 赤羽孝之・西山耕一（1990）：地方工業の研究、山越企工 / 長野県立歴史館（2018）：日常生活からひもとく信州



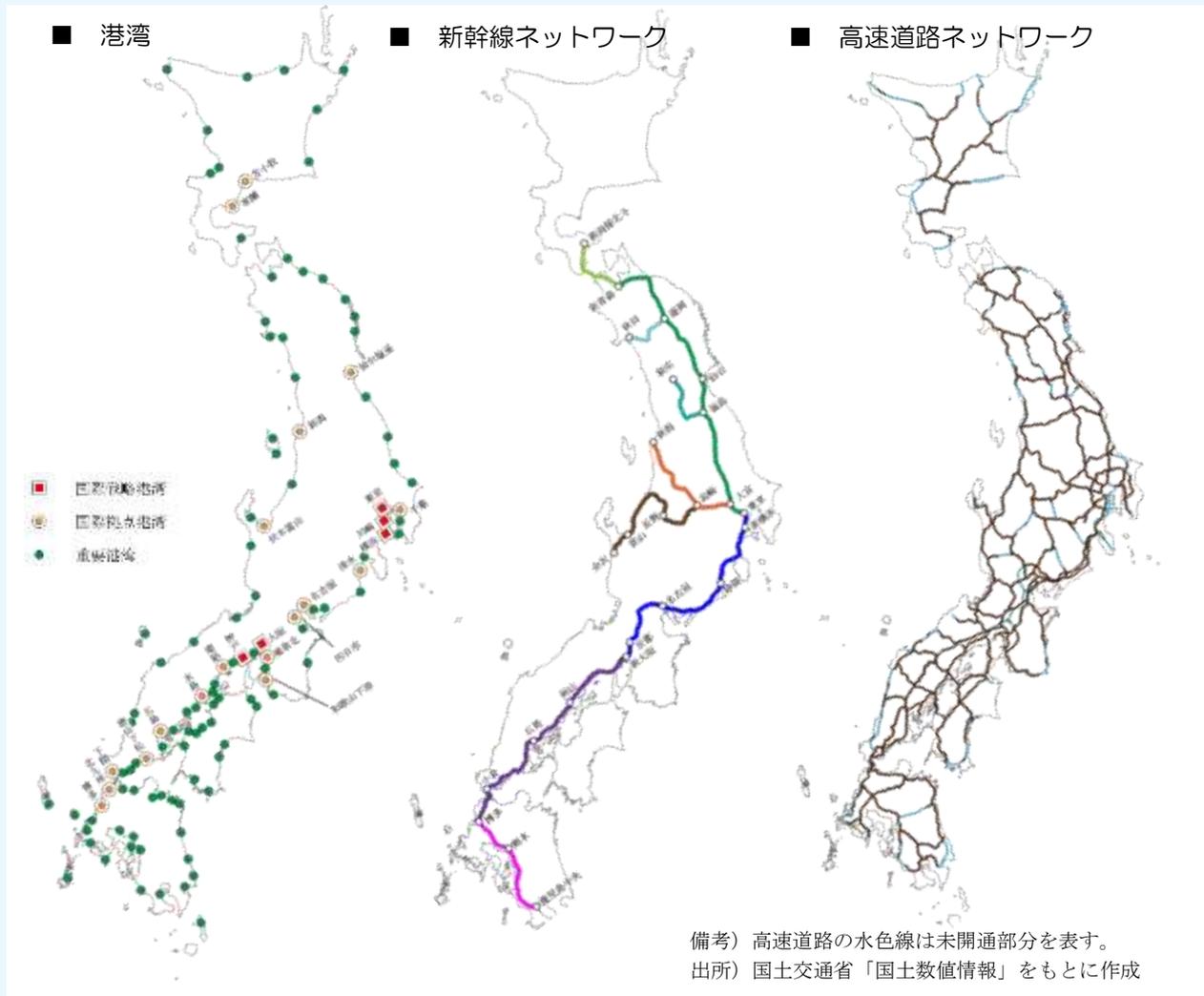
1 はじめに

全国的な道路網としては、奈良時代の律令制下で東海道や北陸道などの「七道駅路」ができ、江戸時代には五街道やその脇街道、明治時代には国道が整備されました。1965年には初めての高速道路が整備され、今もなお建設・計画中の区間があります。

港は、室町時代に日本の十大港を指す「三津七湊」があり、江戸時代には北前船などの寄港地が栄え、現在は国指定の重点港湾や重要港湾などがあります。各港をつなぐ旅客・貨物航路が発達していますが、旅客航路の中にはモータリゼーションの進展や過疎化などにより廃止となるものもあり、貨物航路は、近隣のアジア諸国との関係性から盛衰があります。

鉄道は、1872年に新橋～横浜間が開業以来、全国各地に発達しましたが、近年はモータリゼーションの進展や過疎化などにより廃止となる路線もあります。一方、新幹線は1964年に東京～新大阪間が開業後、東京を中心とするネットワークが形成され、なおも建設・計画中の路線があります。

今も昔も交通が与える地域への影響は多大なものがありますが、時代とともに、徒歩や船運、鉄道、車へと中心的な移動手段が変わり、高速道路、新幹線、飛行機などによる高速化、グローバル化などが進み中で、地域の置かれた状況は大きく変容を続けています。

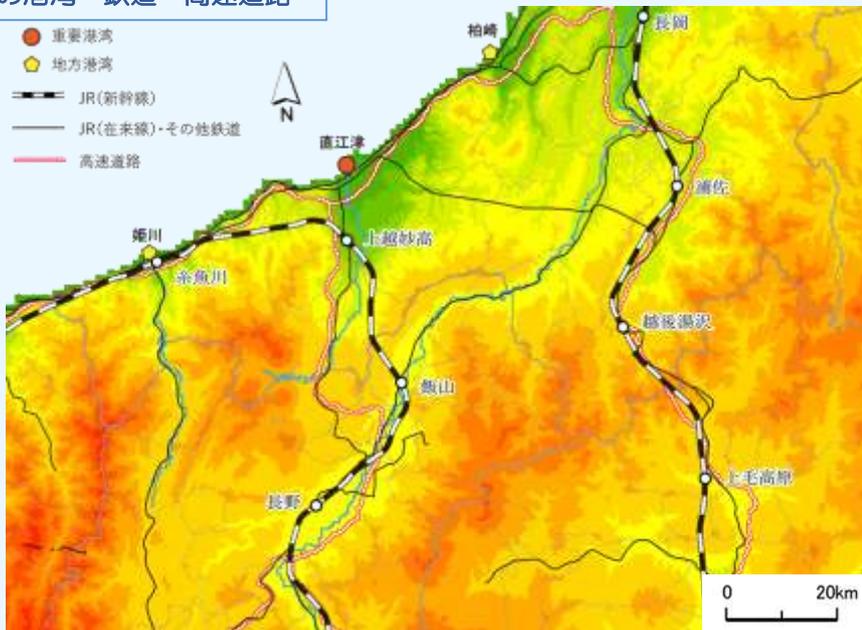


2 特徴

幹線道路の存在（街道～国道～自動車道）

- 古代には、中央と地方諸国を結ぶ幹線道路（七道駅路）が整備される中で、日本海側を通る北陸道と長野県内を通る東山道のほか、両者をつなぐ東山道支道なども整備された。
- 江戸幕府は、江戸を起点とする五街道や脇街道を整備する中で、この地域には五街道に次ぐ重要な脇街道の一つである北国街道と加賀街道※が整備され、上越市がその結節点となった。
※ 街道の呼称は、複数存在する。
- 1885年に認定された全国44の国道の中に、東京～新潟を結ぶ5号線と8号線、東京～富山を結ぶ21号線の3路線が含まれた（現在の国道ではそれぞれ18号、17号、8号にほぼ相当）。
- 高速道路は、新潟と首都圏をつなぐ関越自動車道（全線開通は1985年）、日本海側を走る北陸自動車道（同1986年）、上信越自動車道（同1999年）の3路線があり、全国の幹線ネットワークの一翼を担っている。

信越県境付近の港湾・鉄道・高速道路



出所) 国土地理院数値地図および国土交通省「国土数値情報」をもとに作成

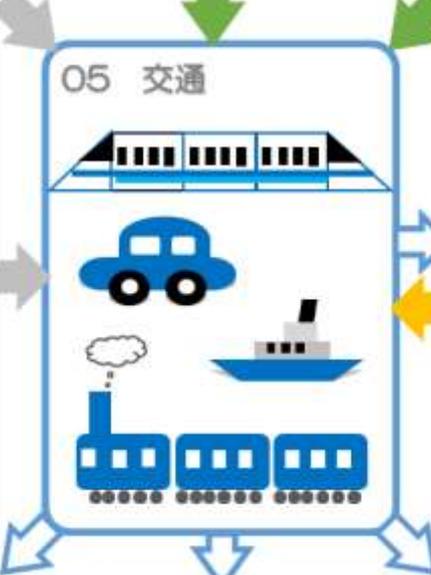
幹線鉄道の存在（鉄道・新幹線）

- 1886年、信越本線の直江津～関山間が開通し、その7年後には高崎まで全線開通。直江津駅の設置は、本州日本海側では敦賀に次ぐ2番目の早さ。その後新潟方面や北陸方面の鉄路が開通し、直江津駅は日本海側と太平洋側をつなぐ重要な駅となる。
- 上越新幹線は新潟～大宮間が1982年開業、1991年には東京まで全線開通する。一方、北陸新幹線は1997年に東京～長野間、2015年に長野～金沢間が開業した。この結果、2つの新幹線が近接し、使い分けることができる珍しい地域となった。

主要な港湾の存在

- 直江津港は、室町時代に三津七湊（日本の十大港）の一つに数えられ、廻船の寄港地であった。江戸時代には、海産物や年貢米を運ぶ北前船が寄港し、直江津（今町）は港町として繁栄。現在は、全国102港ある重要港湾の一つ。佐渡航路のほか、かつては九州や北海道を結ぶフェリー航路もあった。韓国や中国への国際定期コンテナ航路が開設され、コンテナ取扱貨物量は全国46位（2015年）、国のLNG（液化天然ガス）部門の日本海側拠点港にも指定される。
- 姫川港は、全国の地方港湾の中で唯一のリサイクルポートである。

3 因果関係

<p>関東と北陸・関西を結ぶ位置関係</p>	<p>急峻な地形に囲まれた存在 01</p>	<p>海や河川が存在 01</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・信越本線は、もともと東京ー大阪間を結ぶ線路が中山道（長野県）を経由する計画があり、その路線への物資輸送等を目的として早期に整備された。 ・ほくほく線（北越急行）や北陸新幹線は、首都圏と北陸圏を短時間で結ぶ目的が整備の大きな推進力になったと考えられる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・上越市の位置は、関西・北陸や新潟・佐渡、東北を結ぶ日本海側の幹線上にある。 ・また、日本海側から内陸部や太平洋側へ向かうルートは地形や気候などの面から限定され、上越市から南下するルートは古くから重要な存在であった。 ・この結果、陸路の結節点が生まれた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大量の物資を運ぶ観点から、日本海に面し陸路の結節点を有する上越市（直江津港）では、港の開発や発展にもつながった。 ・特に直江津港は北前船の寄港地の一つに。 ・一定規模の河川に接する地域では、船による運送が発達。
<p>政治家の存在</p> <ul style="list-style-type: none"> ・越後国府、春日山城、高田城などの政治的拠点が古くから置かれ、まちと交通網の発達を相互に支えた。 ・新幹線や高速道路の経路の一部は、田中角栄の政治力によるものとされる。 		<p>温泉地・スキー場の発達 15 16</p> <ul style="list-style-type: none"> ・首都圏からの近接性や交通の利便性により、数多くの温泉地やスキー場の発展に貢献した。 ・ウィンタースポーツの盛んな長野県は冬季オリンピックの開催地となり、1997年に長野まで北陸新幹線が部分開業する契機となった。
<p>様々な産業の発達</p> <ul style="list-style-type: none"> ・明治時代には、この「地の利」と豊富なエネルギー資源との組み合わせにより、化学・金属関係の工場の進出や陸軍第13師団の誘致などが行われた。 ・政治拠点や工場、師団の存在は、地域経済の基礎となり、それらに付随して生まれた様々な産業と共に人々の暮らしを支えた。 ・それらの中には、老舗企業や城下町の雁木通りなどとして今日まで残り、まちの歴史・文化的価値を高めているものもある。 	<p>様々な信仰の伝播 18 19</p> <ul style="list-style-type: none"> ・様々な信仰がこの地域に伝わる一因となった。具体的には、熊野信仰、白山信仰、浄土真宗、曹洞宗などが挙げられる。 	<p>ローカル鉄道の誕生 05</p> <ul style="list-style-type: none"> ・長野電鉄は、地方都市の中で数少ない生活路線・観光路線として活躍する私鉄である。 ・しなの鉄道やえちごトキめき鉄道は、新幹線開業後に誕生。長野新幹線以降の整備新幹線は、その沿線のJRを経営分離することが整備の前提条件であったため。 ・ほくほく線は、北陸新幹線の開業に伴いローカル鉄道としての役割が強くなった。

4 解説

要約

○ この地域は、昔から道路、航路、鉄道などの主要幹線が通る場所であり、中でも上越地域はそれらの結節点となっています。近代以降は太平洋側の発展に伴い、かつてほど「地の利」による優位性は大きくなくなりましたが、それでも、現在も交通の結節点としての地位を保っているといえます。

また、上越新幹線と北陸新幹線が乗り入れ、その周囲に異なる会社による鉄道が多数存在する全国有数の地域でもあります。

○ 上越市の位置は、関西・北陸や新潟・佐渡、東北を結ぶ日本海側の幹線上であり、地形や気候の関係で古くから日本海側から内陸部や太平洋側へ向かう重要なルートでもありました。このため、陸路の結節点が生まれました。さらに、大量の物資を運ぶ観点からは、日本海に面し陸路の結節点を有することで、港の開発や発展にもつながりました。

あわせて、上杉謙信をはじめ現在に至るまで、「地の利」を活かしてまちや交通網の発展に貢献した地元の先人たちの力により、交通の要衝として一定の地位を維持してきました。

このような「地の利」から生まれたヒト、モノ、カネ、情報の往来は、国府、春日山城、高田城などの政治的拠点、化学・金属関係の工場の進出や陸軍第13師団の誘致、それらに付随して生まれた老舗企業など様々な産業と合わせ、人々の暮らしを支え、まちの歴史・文化的価値を高めることにもつながりました。そして、これらは交通の要衝としての地位を支えることにもなりました。

考察

○ 都市の発達要件には、ヒト、モノ、カネ、情報の接近性、結節性、創造性などが必要といわれます。この点で上越市は恵まれた地域でありましたが、その地位を維持してきた背景には、先人たちの努力の積み重ねがあったことがわかります。

○ 一方、全国的に交通の利便性が向上し、移動時間の短縮が進んだ今日は、交通面の接近性だけでは結節性を持ってない時代でもあります。また、交通の利便性と地域の求心力は“にわとりとたまご”のような関係でもあります。地の利から得られた交通の利便性を地域の求心力につなげ、その求心力をもって交通の利便性をさらに高める戦略、そのときに今ある価値を活かしながら、新しいまちの価値をどう作り出していくかという視点は、これからの地域づくりにおいて重要であると思います。

○ また、首都圏と北陸を結ぶ幹線交通、日本海沿線都市を結ぶ幹線交通という面に着目すると、この間度重なる経路変更がありました。この経路変更による影響はあまり波及しなかったようにも思います。裏を返せば、それらの鉄道を近距離輸送として活かさきれていないということであり、前向きに言えばまだ発展の伸びしろがある、と捉えることもできるでしょう。

主な参考文献

国土交通省ホームページ（道の歴史） / 児玉幸多（1992）：日本交通史、吉川弘文館 / 老川慶喜（2014）：日本鉄道史 幕末・明治編、中央公論新社 /



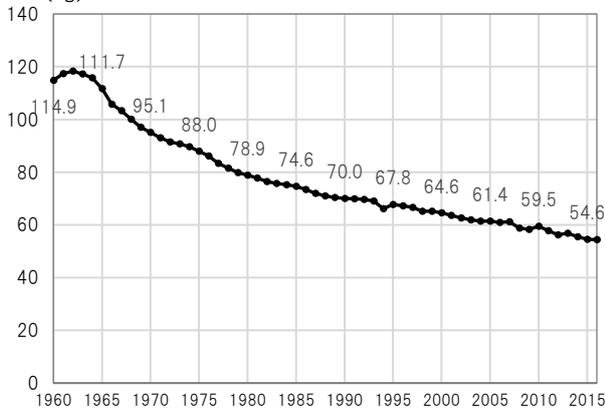
1 はじめに

稲作の起源は、最近の研究では中国の長江流域と考えられており、そこからインドやアジア各地へと広がりました。日本では、縄文時代後・晩期には水田稲作が始まっていた可能性が高く、弥生時代以降には、日本各地へと広がっていったといわれています。これに伴い、狩猟・採集中心の生活から農耕中心の生活に変化し、米は単に主食としてだけでなく、祭祀や経済活動とも深く結び付きながら、日本人にとって特別な存在であり続けてきました。また、各地でより多くの米を収穫するために、新田開発や品種改良などの努力が行われてきました。

新潟県で1956年に奨励品種に選定された「コシヒカリ」は、そのおいしさから多くの人に好まれ、日本各地で生産されるようになりました。また、新潟県は現在、米の作付面積・収量とも全国1位です。長野県は県全体では高冷地が多いため面積・収穫量は多くありませんが、10アール当たりの収量及び一等米比率は全国トップレベルです。

近年、食の多様化などに伴い、主食とされてきた米の消費量は年々減少し、減反政策をはじめ長らく国の規制や保護の下で進められてきた米の生産も、農業としての競争力強化に向けた取組がそれぞれの産地で求められています。こうした状況の中、気候にあった品種の開発により、おいしいお米が増えるなど、様々な取組が行われています。

■ 米の1人当たり消費量の推移(全国)
(kg)



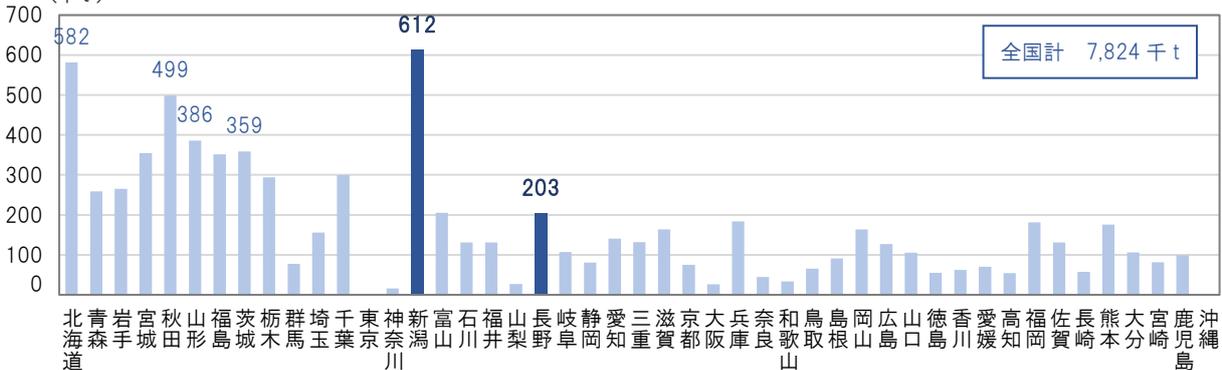
出所) 農林水産省「食糧需給表」をもとに作成

■ 食味ランキング特Aの品種数の推移(全国)



出所) 日本穀物検定協会ホームページをもとに作成

■ 米(水陸稲)の生産量(都道府県別・2017年)
(千t)



出所) 農林水産省「作物統計」をもとに作成

2 特徴

作付面積の広さ・収穫量の多さ

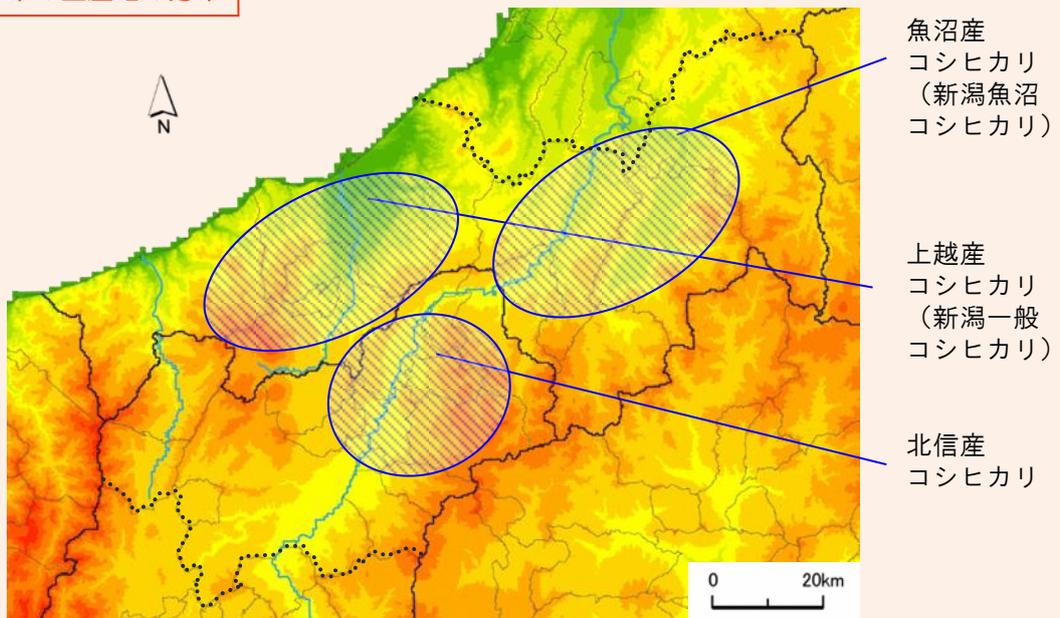
- 水稲作付面積（2017年・農水省）は新潟県が全国1位であり、全国市町村の中では上越市も4位に位置する。
- 水稲収穫量（2017年・農水省）は新潟県が全国1位であり、全国市町村の中では上越市も8位に位置する。

食味の良さ

- 米の価格（2016年・農水省）をみると、新潟魚沼コシヒカリの価格は全国1位で最も高い。上越地方のお米が含まれる新潟一般コシヒカリの価格も全国7位である。

- 米の食味ランキングをみると、新潟県魚沼産コシヒカリは28年連続、新潟県上越産コシヒカリは5年連続、長野県北信産コシヒカリは4年連続で特Aを取得した記録を持つ。近年特Aの数は急増しているが、新潟県の魚沼産コシヒカリと上越産コシヒカリは、特Aの数が10品前後の時代からの実績がある。
- 米・食味分析鑑定コンクール・国際大会における過去11回から20回の総合部門金賞受賞者は161名。このうち長野県の長野・北信地方と新潟県の魚沼地方から37名が受賞、全体の2割強を占める。

信越県境付近の米の生産地の分布

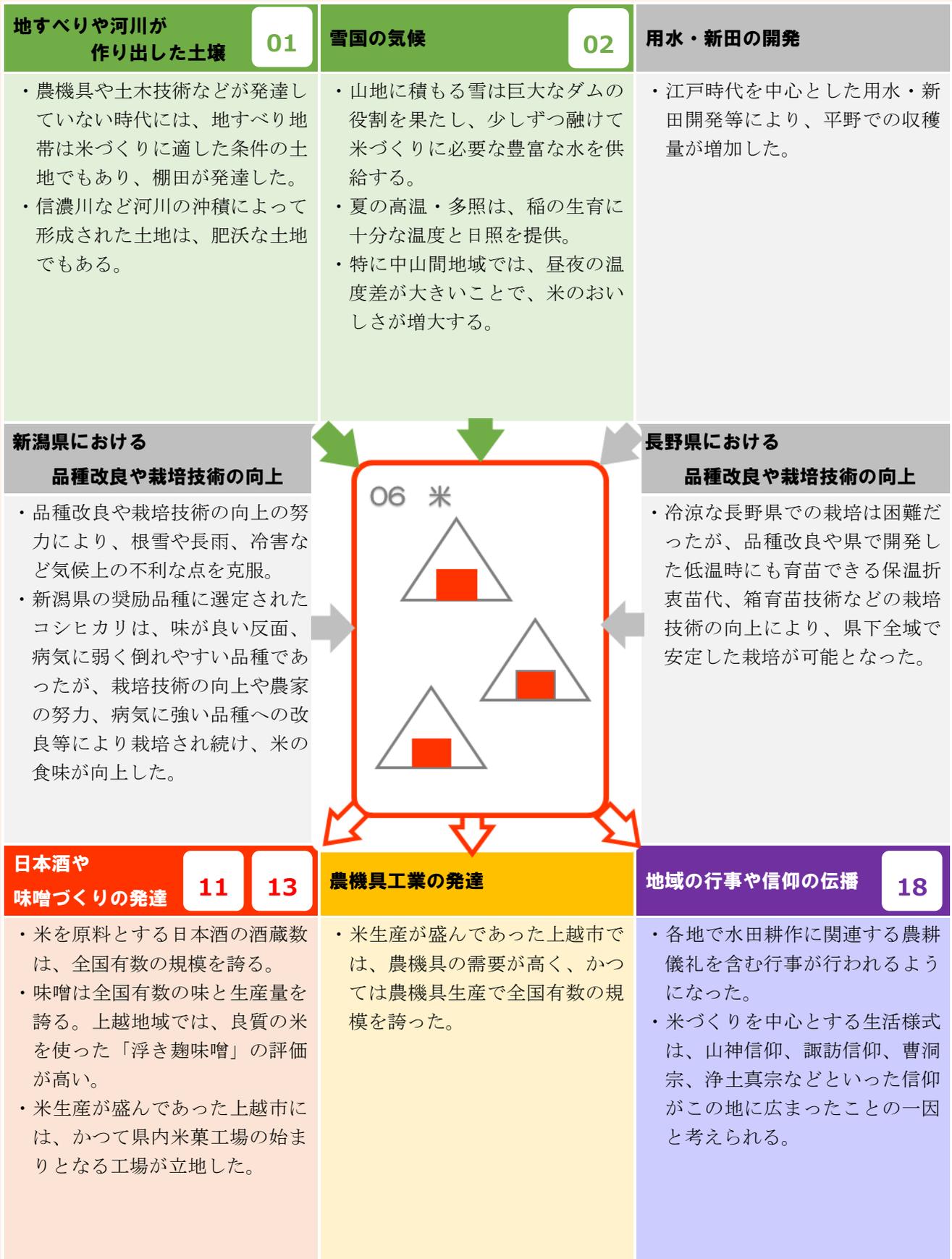


備考) 信越県境付近にある市町村（破線で挟まれた地域、市町村名は p.3 に掲載）の範囲のみ表記
出所) 国土地理院数値地図などをもとに作成

優れた基盤整備の歴史

- 日本の棚田百選には、上越市の上船倉・蓮野、十日町市の狐塚、飯山市の福島新田などをはじめ、県境付近で12地区が選定されている。
- 上越市の上江用水は、世界かんがい施設遺産に選定されている。
- 上越市の青野池、坊ヶ池、朝日池は、農林水産省のため池百選に選定されている。

3 因果関係



4 解説

要約

- 信越県境地域は、平野部では用水・新田開発等により広大な水田地帯が広がり、国内有数の栽培面積や収穫量を誇っています。また、中山間地域を中心に、全国的に有名な魚沼産コシヒカリをはじめ、同じ豪雪地帯である信越県境地域にはそれに匹敵する米の産地が集積しており、質・量ともに米どころといえます。
- 信越県境地域の山地に積もる雪は、巨大なダム役割を果たしており、この雪が少しずつ融けて米づくりに欠かせない豊富な水を供給します。

夏は高温・多照であり、稲が育つのに十分な温度と日照があります。特に中山間地域では昼夜の温度差が大きいことで、米のおいしさが増します。ただし、根雪や長雨、冷害など、米づくりに不利な点を克服するための品種改良や栽培技術の向上など努力の上に成り立ったものでもあります。

農機具や土木技術などが発達していない時代には、地すべり地帯は、米づくりに適した条件の土地でもありました。特に地すべり地帯が多い上越・長野・北信地域には棚田が集中しています。また、信濃川など河川の沖積によって形成された土地は、肥沃でもあります。

収穫量の多さは、かつての用水・新田開発などにより、一面に田んぼが広がったことが背景にあります。

また、米の食味については、1956年に新潟県の奨励品種として選定されたコシヒカリの誕生も大きく影響しています。
- 米を原料とした日本酒の酒蔵数は、全国有数の数を誇り、味噌については質・量とも全国有数となっています。

また、明治時代、上越市での農機具生産は全国でも有数の規模を誇っていたほか、県内米菓工業の始まりとなる工場が立地していました。

そのほか、米づくりにまつわる祭り、風習が数多く見られます。

考察

- 米はこの地域のブランド製品の一つであり、経済商品としての意味合いにとどまらず、地域そのものへの愛着・誇りや発信につながる地域資源です。このブランドを守り育てることにこだわるプロセス自体が、地域づくりそのものとも考えられます。
- 持続可能な地域づくりの観点からは、地域そのものの価値やそれを生み出すストーリー、暮らしぶりなどが問われる時代となっています。近年、米生産では、農業としての競争力強化に向けた取組がそれぞれの産地で求められていますが、その取組として生産の効率化や拡大だけにとどまらず、米どころを作り上げた風土、発展した技術や暮らしぶりなども含め、まちのストーリーとして意識的に磨き、未来につなげていくことも大切と考えます。

主な参考文献

農林水産省ホームページ / 諸橋準之助編(1996):新潟の米ものがたり、新潟日報事業者出版部 / 新潟県農林部(1974):新潟の米百年史 / 新潟県(1982):「新潟米」50年のあゆみ/長野県農業改良協会(1986):米づくりへの誘い / 長野県農業関係試験研究一世紀記念事業実行委員会(1998):長野県農業試験研究一世紀記念誌、長野県



1 はじめに

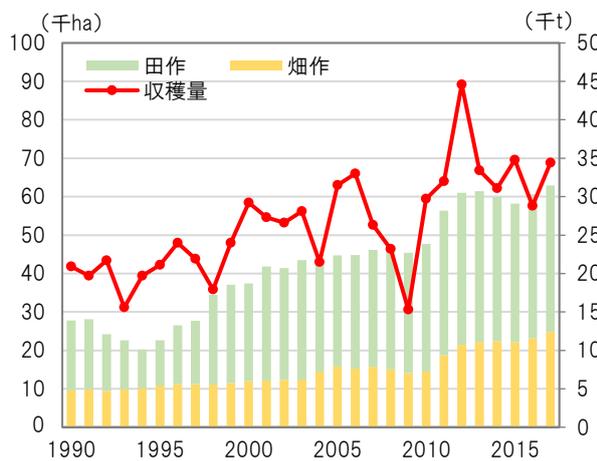
蕎麦は、縄文時代から栽培されていたと考えられており、収穫までの日数が短いことや、乾燥に強いなどの特性から、米などが収穫できない場合の救荒作物として、幅広い地域で栽培されてきました。

そば粉に熱湯を注いで作る蕎麦がきは、最も古くからあったものといわれ、朝食や携帯食としてのそば焼餅などは、山村でよく食べられていました。

ざるそばやかけそばのような麺の形状である「そば切り」が誕生したのは、戦国時代から江戸時代初期にかけてです。一説では、信州が誕生の地であったともされています。

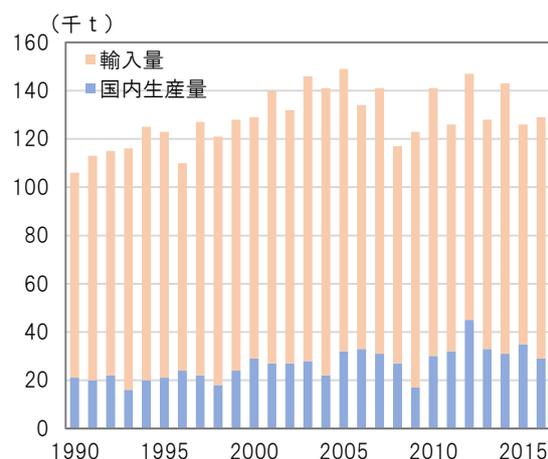
近年の蕎麦の需要は12万～14万t程度で推移しており、そのうちの約3万tが国内の蕎麦で賄われています。麺、菓子の原料としてのみならず、焼酎やお茶の原料などとしても利用されています。

■ そばの作付面積と収穫量の推移（全国）



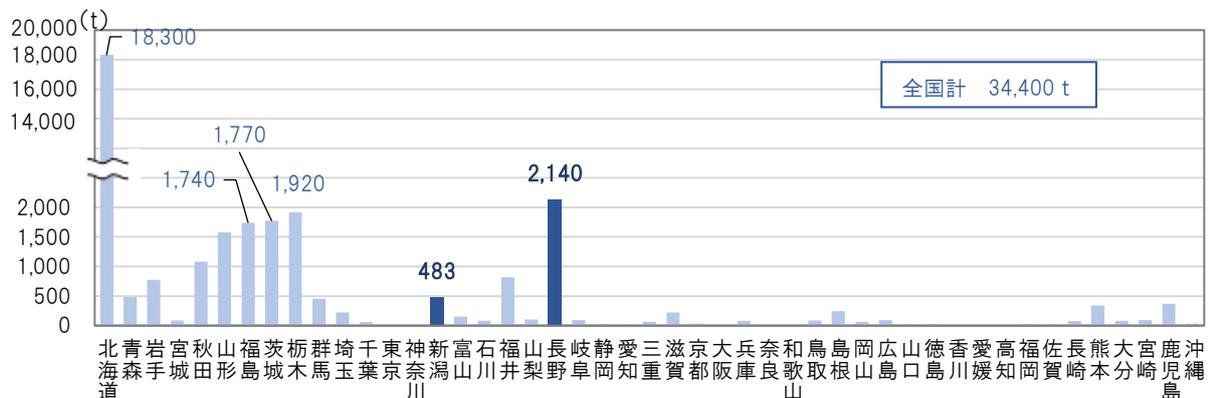
出所) 北海道庁「麦類・豆類・雑穀便覧」をもとに作成

■ そばの供給量の推移（全国）



出所) 北海道庁「麦類・豆類・雑穀便覧」をもとに作成

■ そばの生産量（都道府県別・2017年）



出所) 農林水産省「作物統計」をもとに作成

2 特徴

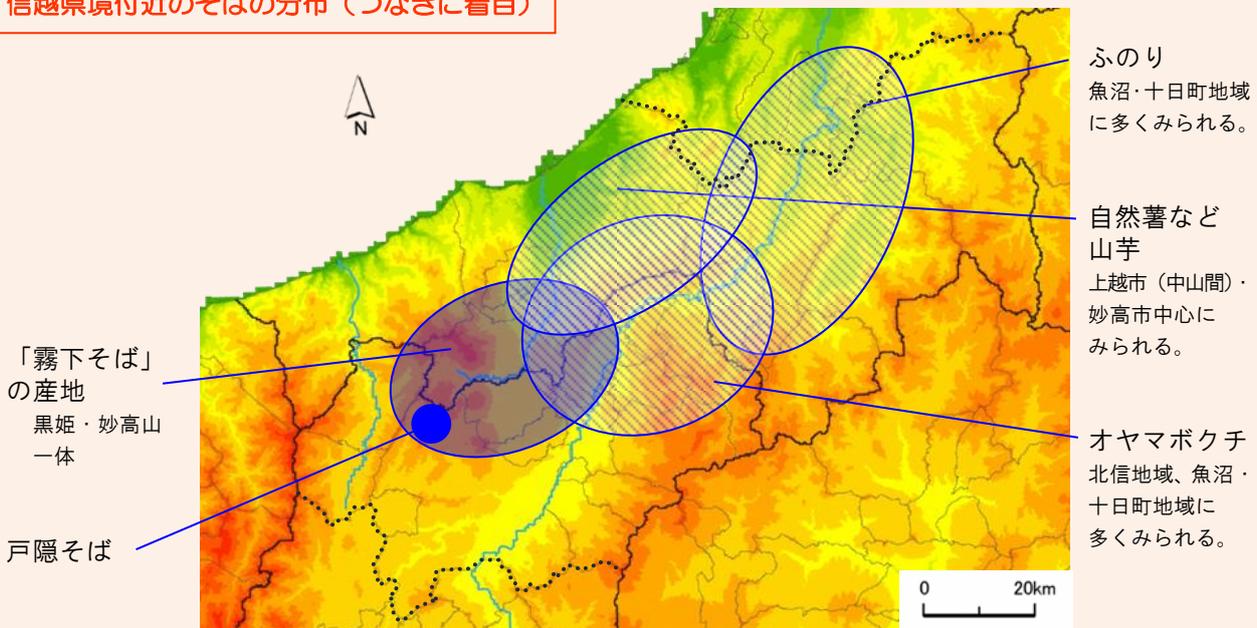
小麦をつなぎに使う著名なそば

- 戸隠そばは、岩手県のわんこそば、島根県の出雲そばとならび、日本三大そばの一つといわれる。
- 竹ザルに小さな玉状に持った「ポッチ盛り」と大根との組み合わせが特徴。

オヤマボクチをつなぎに使うそば

- オヤマボクチ（山ゴボウ）の葉の繊維をつなぎに使った蕎麦であり、北信地域に多く見られるほか、新潟県の一部にも見られる。オヤマボクチのつなぎを使う蕎麦は、かつては各地にあったとされるが、現存するのはこのあたりだけではないかともいわれる。
- 富倉そば（飯山市）、須賀川そば（山ノ内町）、名水火口そば（木島平村）などがある中で、特に富倉そばは、そば好きの間で「幻のそば」といわれたこともある。

信越県境付近のそばの分布（つなぎに着目）



備考) 信越県境付近にある市町村（破線で挟まれた地域、市町村名は p.3 に掲載）の範囲のみ表記
出所) 国土地理院数値地図などをもとに作成

ふのりをつなぎに使うへぎそば

- 海藻の一種である「ふのり」をつなぎに使う「へぎそば」は、十日町・魚沼地域に多く見られる。ふのりのつなぎを使う蕎麦は、全国的にも1, 2程度の珍しさではないかとされる。
- うすく剥いだ木で作った特徴的な器であるへぎに、一口大に丸めて盛り付けるのが特徴的。
- 十日町周辺では薬味に「辛子」を使うが、これは山葵の入手が難しかったことに由来しているともいわれている。

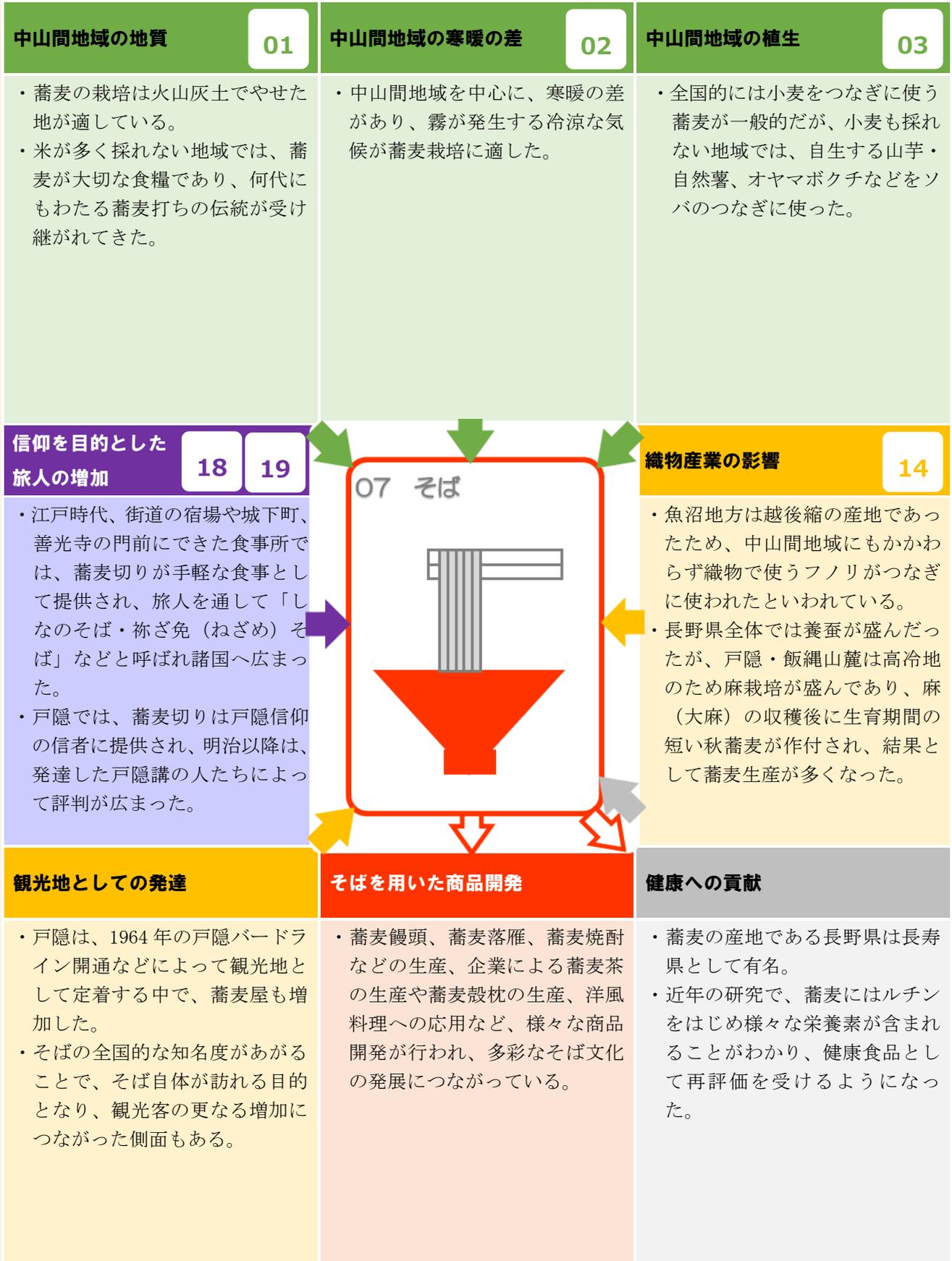
自然薯など山芋をつなぎに使うそば

- 魚沼と上越地域（中山間地域）では、つなぎに自然薯のとろろなどを使用する蕎麦が多い。

その他のそば

- 黒姫・妙高山一体は、古くから霧下地帯の良質なそばの産地とされ、「霧下そば」などとも呼ばれてきた。
- つなぎを使わない十割そば麦も各地で見られる。信濃町（柏原）では伝統食。
- 秋山郷や山ノ内町須賀川でつくられる「早蕎麦」は、全国的に見ても珍しいといわれる。

3 因果関係



4 解説

要 約

- 信越県境地域は、古くから黒姫・妙高山一帯が良質なそばの産地とされ、全国的にも有名な戸隠そばもあります。また、全国的にみても珍しいフノリやオヤマボクチのほか、自然薯・山芋、小麦など、多様な“つなぎ”を用いたそばが、狭い範囲に集積している地域でもあります。
- 豪雪地帯で米が多く採れない地域では、蕎麦が大切な食糧で、何代にもわたる蕎麦打ちの伝統が受け継がれてきました。つなぎとなる小麦が採れないほど雪深い地域もあり、フノリ、山芋・自然薯、オヤマボクチを蕎麦に使うのは伝統の知恵ともいえます。

また蕎麦は、寒暖の差があり、霧が発生する冷涼な気候のものがおいしいとされており、信越県境地域の山間部では蕎麦に適した地域が多くありました。

戸隠・飯縄山麓は高冷地のため養蚕用の桑ではなく麻（大麻）栽培が盛んであり、麻の収穫後に蕎麦が作付され栽培面積が増えました。

また、善光寺や戸隠周辺では、信仰や観光地として人が訪れることに伴い、蕎麦の知名度が上がっていきました。
- そばは麺に留まらず、蕎麦饅頭、蕎麦落雁、蕎麦焼酎などの生産、企業による蕎麦茶の生産や蕎麦殻枕の生産、洋風料理への応用など、多彩なそば文化の発展につながっています。近年では、蕎麦にはいろいろな栄養素が含まれることがわかり、健康食品として高い評価を受けるようになってきました。そばの産地である長野県は長寿県として有名でもあります。

また、そばの全国的な知名度があがることで、そば自体が訪れる目的となり、観光客の更なる増加にもつながっています。

考 察

- かつて蕎麦は、中山間地域で生活するための重要な食であり、気候的な制約で食べざるを得なかったという側面も強くありました。しかし、一方で、その土地ならではの産物として評判が広がることで、現在でも観光やまちづくりで重要な資源となり、健康志向の中で注目される食品ともなっています。
- 当たり前にある地域の資源を、別の視点で捉えなおすことは、地域に対する誇りや地域づくりにとって重要であると考えます。

主な参考文献

本間伸夫（2010）：食は新潟にあり、新潟日報事業社 / 金子万平（2004）：信州そば紀行、信濃毎日新聞社 / 市川健夫（200）：信州 蕎麦学のすすめ、オフィスエム / 長野県立歴史館（2001）：信濃の風土と歴史⑦ 食 ーとる・つくる・たべるー



1 はじめに

おやきをはじめとする「こなもの」は、かつては全国各地で作られており、地域により、やきもち、あんぼ、ちやのこなど、様々な呼ばれ方もしています。

おやきの起源は、もともと室町時代のお菓子や戦国時代のせんべいなどにさかのぼるともいわれ、縄文時代にはおやきの原型ともいえる加工食品がすでにつくられていたともいわれています。

こねる材料は、雑穀、そば、小麦、くず米などがあり、その中に野菜、山菜、餡などを包み、焼く、蒸かす、焼いて蒸かす、揚げるなど、各土地ならではの材料や方法でつくられています。

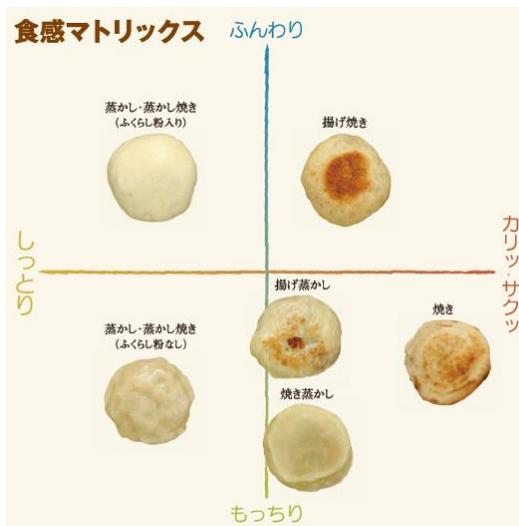
稲作以外の農業を中心とする地域において、合理的に栄養を摂取できる食べ物としてつくられてきましたが、戦後の経済成長や食生活、生活様式の変化に伴い、そのほとんどが作られなくなりました。その中で「おやきといえば信州の郷土食」というまでのイメージが確立されています。

■ 全国にあったおやき (大正10年頃及び昭和19年の資料による)



出所) 金子萬平「おやき・焼餅の話」

■ おやきの種類



出所) ながの「四季の彩」実行委員会パンフレット

2 特徴

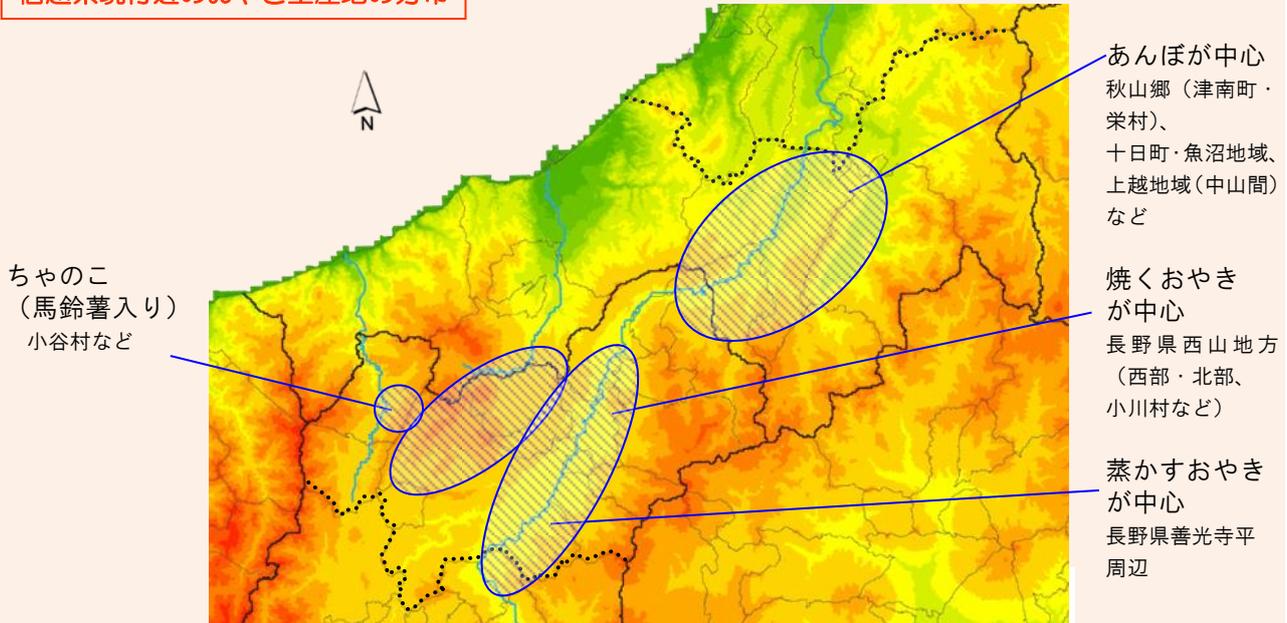
雑穀をこねて焼くおやき

- 山間部の長野県西山地方（長野市西部・北部、小川村など）では、雑穀をこねて野菜を包み、いろりの火と灰で焼くおやきが主流であり、本場との認識が強い。冬の保存食でもある。
- 小川村や旧鬼無里村などのおやきづくりは、村おこしの原動力ともなっている。
- 新潟県側の中山間地域でもみられるが、長野県側から持ち込まれたものと思われる。

小麦をこねて蒸かすおやき

- 平野部の善光寺平などでは、稲作の裏作で栽培する小麦をこねて、かまどで蒸かすおやきが主流だった。まんじゅうともいう。
- 冠婚葬祭で登場する場合もある。

信越県境付近のおやき生産地の分布



備考) 信越県境付近にある市町村 (破線で挟まれた地域、市町村名は p. 3 に掲載) の範囲のみ表記
出所) 国土地理院数値地図などをもとに作成

雑穀や米粉などを使う「あんぼ」と「ちやのこ」

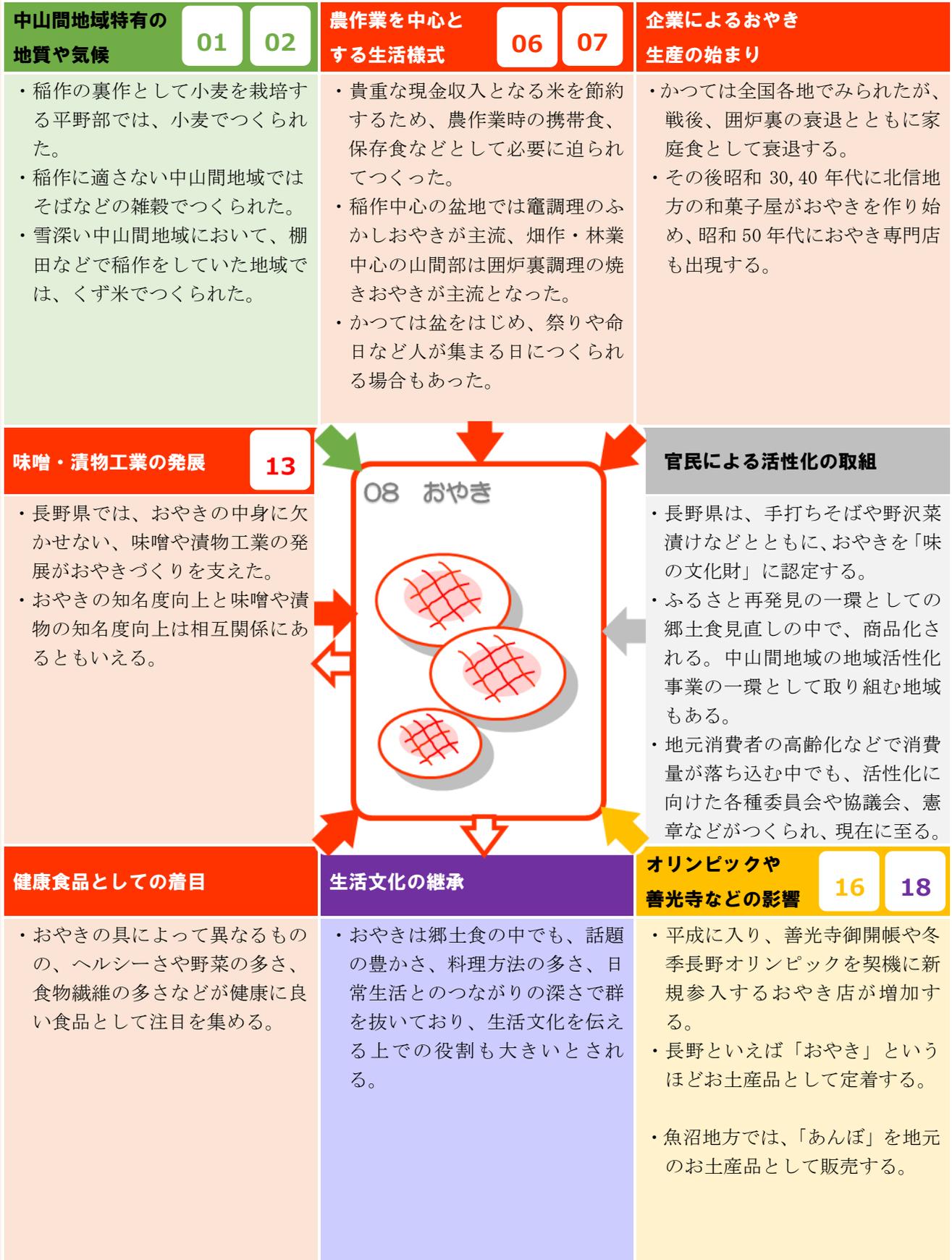
- 県境付近の豪雪地帯である秋山郷（津南町・栄村）や魚沼地方では、ヒエ、ソバ、くず米などをこねて、餡を入れたものを「あんぼ」、入れないものを「ちやのこ」という。
- 小谷村の「ちやのこ」は、そば粉と馬鈴薯をこねた生地に野菜などの具を包んだものをいう。
- 近年は、特産品化される中でおいしい米を使用するものが多い。

【参考】 他の地域のおやき

※長野県の中南部でも「おやき」というが、作り方が異なるものもある。
例えば、南信では、小麦粉に刻んだサツマイモなどを混ぜて薄焼きにするものが多い。塩さんまをそば粉で包んで焼いたものもつくられていた。

※正式な分類上は「おやき」ではないが、共通点が多いことから類似の食品として記載した。

3 因果関係



4 解説

要 約

- 「おやきといえば信州の郷土食」というまでのイメージが確立されている中、その周辺の信越県境地域でも、皮の原料や作り方、餡の中身が多種多様な「おやき」が作られており、あんぼ、ちゃのこななどの呼び方もあります。
こうした多様さは地形や気候の多様さにも通じるものがあり、郷土の特色を表わした、全国的にも貴重な郷土食といえます。
- 様々な材料でおやきがつくられた背景には、土地や気候の違いによる主食の違いがあります。かつて米は売るものであり、稲作と小麦の二毛作を行う地域では小麦、稲作に適さない中山間地域では蕎麦などの雑穀、雪深く米の単作地域ではくず米が、それぞれおやきの皮に使われています。
全国的には減少したおやきがつくられ続けている背景には、長野県北信地域のおやき専門店による商品化、県による味の文化財としての認定、善光寺参詣や冬季オリンピックを契機としたおやき店の増加などがあります。地元消費者の高齢化などで消費量が落ち込む中でも、活性化に向けた各種委員会や協議会、憲章などがつくられ、現在に至っています。
- おやきは郷土食の中でも、話題の豊かさ、料理方法の多さ、日常生活とのつながりの深さで群を抜いているといわれています。こうしたおやきが続くこと自体が、生活文化を伝える上で大きな役割を果たしているともいえます。
また、長野県では、おやきの中身に欠かせない、味噌や漬物工業の発展が、おやきづくりを支えています。おやきの知名度向上と味噌や漬物の知名度向上は、相互関係にあるともいえます。

考 察

- 米が貴重であった時代、おやきは米が食べられない地域のものであり、自慢できるものではなかったといわれています。しかし、現在おやきは、長野県を代表するお土産品へと発展しました。
- おやきの珍しさについては客観的で明確な説明は難しいものの、長野県ほどおやきをPRし、かつバラエティに富む地域はないと考えられることから、ここに取り上げました。
- 蕎麦などと同様に、地域に根差した資源を活かして、地元の人にも気づいていない価値を磨き上げることは、地域に対する誇りや地域づくりにとって重要な視点と考えます。

主な参考文献

金子萬平（1984）：おやき・焼餅の話、銀河書房 / 柏企画（2000）：語るおやき生きるおやき / 柏企画（2006）：おやき56の質問 / 小出陽子（2013）：信州おやき巡り、川辺書林 など



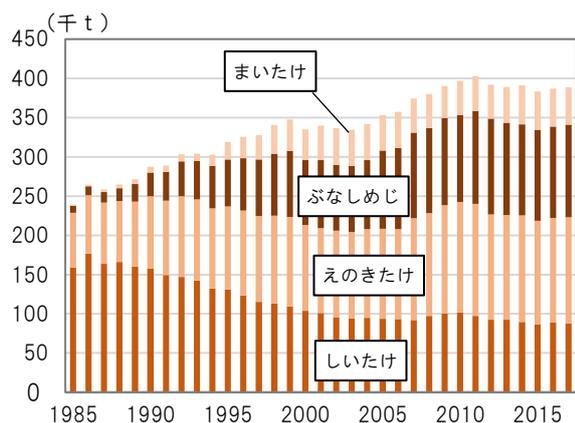
1 はじめに

きのこは、日本全国でその気候・風土にあったものが自生し、古くから森の恵み、秋の味覚として親しまれてきましたが、今では栽培技術の進展・普及にともない、約 20 種類のきのこが人工栽培されており、食材としていつでも手に入れることができるようになりました。

生産量（重量）が最も多いのは「えのきたけ」であり、以下多い順に「ぶなしめじ」、「しいたけ」、「まいたけ」、「エリンギ」などがあります。一部のしいたけなど原木栽培が行われているものもありますが、えのきたけやぶなしめじ、なめこなどは、ほとんどが工場での菌床栽培でつくられています。

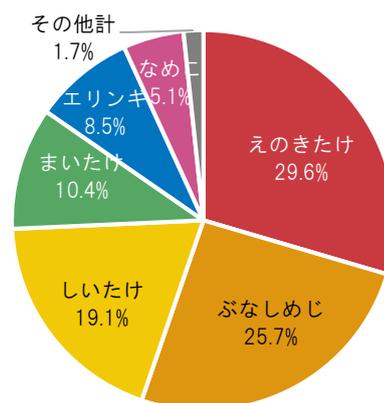
健康志向の高まりなどの中で需要は比較的安定していますが、産地間競争や価格の上下動への対応が求められる産業でもあります。きのこ全体の生産量を都道府県別にみると、長野県が第 1 位、新潟県が第 2 位であり、この 2 県で半数以上のシェアを占めています。

■ 主なきのこの生産量の推移（全国）



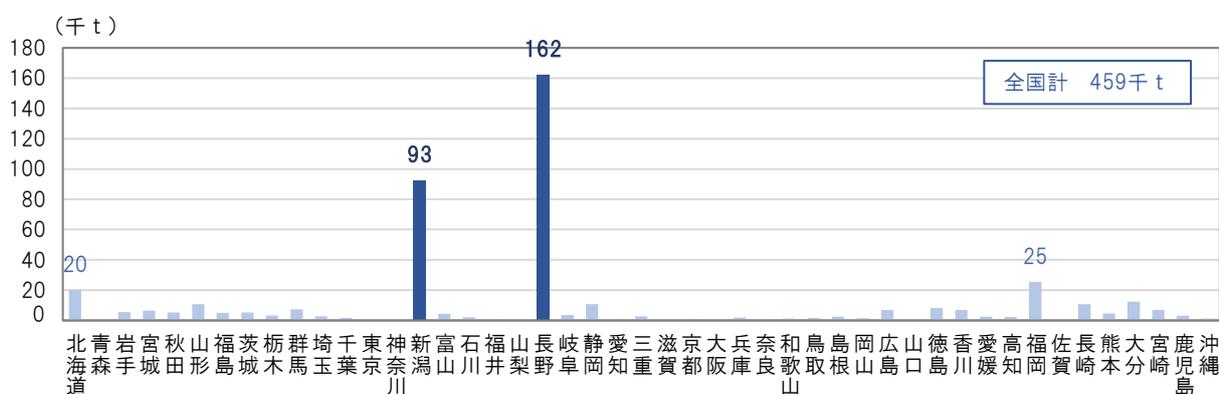
出所) 農林水産省「特用林産物生産統計調査」をもとに作成

■ きのこの品種別生産量（全国・2017年）



出所) 農林水産省「特用林産物生産統計調査」をもとに作成

■ きのこの生産量（都道府県別・2017年）



出所) 農林水産省「特用林産物生産統計調査」をもとに作成

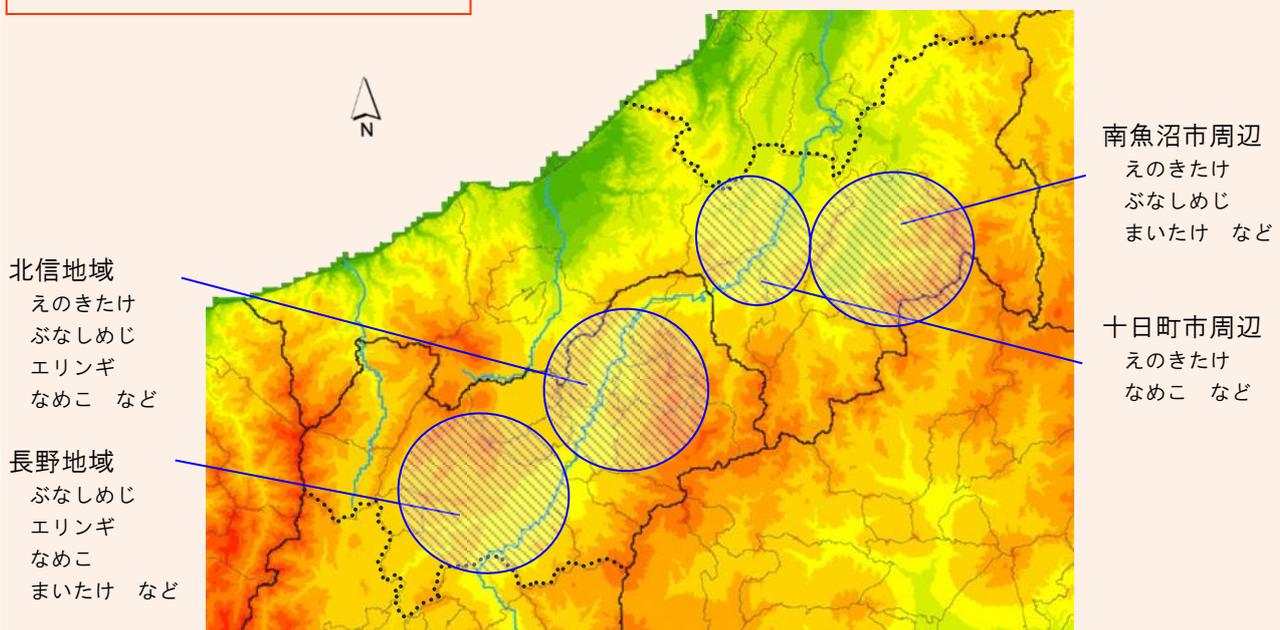
2 特徴

長野県が生産量第1位のきのこ

- **えのきたけ**
 - ・都道府県別では長野県が第1位、新潟県が第2位、2県で国内シェアの8割を占める。
 - ・特に長野県北信地域での生産が多く、市町村別では中野市が全国1位とされる。新潟県内では十日町市、上越市、南魚沼市などで生産される。
- **ぶなしめじ**
 - ・都道府県別では長野県が第1位、新潟県が第2位、2県で国内シェアの6割を占める。

- ・長野県内では北信・長野地域のシェアが約6割を占め、市町村別では飯山市が全国1位とされる。新潟県内では南魚沼市などで生産される。
- **エリンギ**
 - ・長野県が第1位、新潟県が第2位、2県で国内シェアの4分の3を占める。
 - ・長野県内では北安曇地域が半数近く、長野・北信地域で4割強のシェア。新潟県内では南魚沼市などで生産される。

信越県境付近のきのこ生産地の分布



備考) 信越県境付近にある市町村(破線で挟まれた地域、市町村名はp.3に掲載)の範囲のみ表記
出所) 国土地理院数値地図などをもとに作成

新潟県が生産量第1位のきのこ

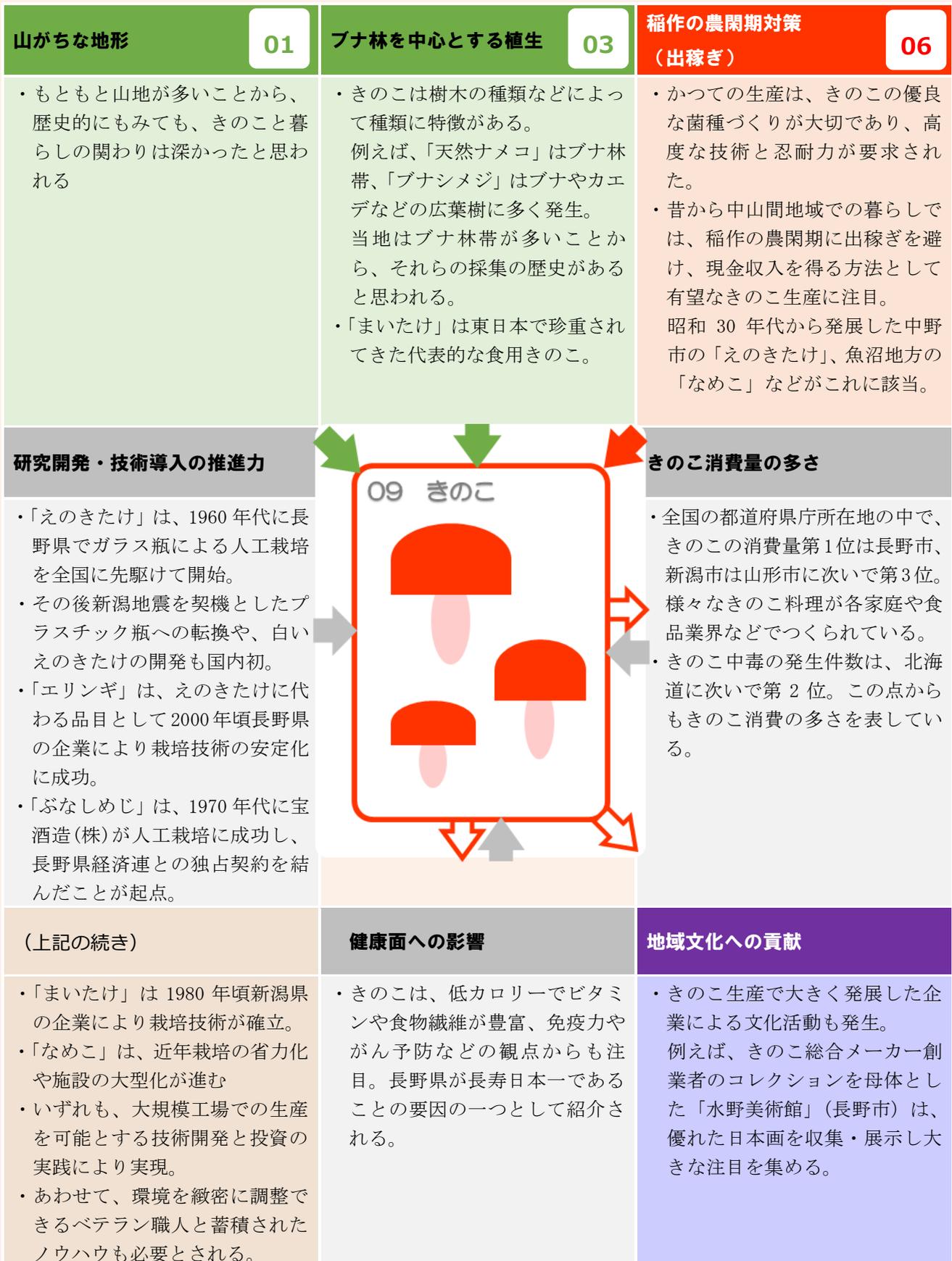
- **なめこ**
 - ・都道府県別では新潟県が第1位、長野県は山形県に次いで第3位、2県で国内シェアの4割を占める。
 - ・長野県内では北信・長野地域のシェアが約7割、新潟県内では十日町市、津南町等で生産される。
- **まいたけ**
 - ・都道府県別では新潟県が第1位、長野県は静岡県・福岡県に次いで第4位、2県で国内シェアの7割弱を占める。
 - ・長野県内では長野・北信地域のシェアが約7割、新潟県内では魚沼地域のシェアが約6割、市町村別では南魚沼市が全国1位とされる。

【参考】その他のきのこ

- **しいたけ**
 - ・乾しいたけは、生産量第1位の大分県をはじめ西日本に多い。生しいたけは、同1位の徳島県をはじめとする西日本や北海道・東北に多い。
 - ・長野・新潟の2県を合わせても、全国シェアは生しいたけで5%程度、乾しいたけで1%弱。
- **まつたけ**
 - ・輸入が大半を占め、国産品は2%程度に過ぎない。その中で長野県は岩手県に次ぐ第2位だが、県北部での生産量は少ない。新潟県はほとんどなし。

※ 市町村別の生産量の一部は、農林水産省「平成16年特用林産物生産統計調査」に基づくものであるため、近年の数値は変動している可能性がある。

3 因果関係



4 解説

要 約

- きのこの生産量は、長野県が全国第1位、新潟県が同2位であり、両県合わせて国内シェアの半数以上を占めています。中でも市町村別のデータをみると、南魚沼市のまいたけ生産量、中野市のえのきだけ生産量、飯山市のぶなしめじ生産量がそれぞれ日本一などのデータが示すように、県境をはさんだ両側の地域は中心的生産地の一つです。
- 表面的には、きのこの国内2大メーカーが隣県で大きく発展した結果とみることもできますが、昔から全国に様々なきのこが自生する中で、この地域では山国で現金収入を得る方法としていち早くきのこ栽培について研究と投資を重ね、その土壌の中からこれらの企業が登場したとみることができます。
- また、両県はある意味でライバル関係との見方もありますが、両者の間に目に見える大きな関係性は確認できないものの、人的な面や意識の面など有形無形の交流はあり、切磋琢磨につながったとみることができるかもしれません。

考 察

- 企業が大型化し、グローバル経済の中での活動が中心になるほど、地域との接点は薄くなることも考えられますが、この事例では、地域に対する文化振興や地域のブランド形成などにおいて大きな貢献があるといえます。
- また、きのここと健康長寿の関係性に着目し、過去の経験則的な知見を科学的知見に置き換える研究活動と情報発信活動は、地域に根差した食文化を再評価する取組でもあります。きのこ産業の発展と健康増進の好循環を生み出すプロセスは、持続可能な地域社会づくりの一つのモデルとみることができるでしょう。

主な参考文献

特産情報きのこ年鑑編集部（2018）：きのこ年鑑 2018 年度版、プランツワールド / 長野県特産林産協会（1996）：信州 山里の幸、川辺書林 / 長野県林業後継者対策協議会（2006）：山菜の栽培と村おこし 信州山菜の風土と技術、川辺書林 / 斎藤暖生（2013）：北日本におけるキノコ採りの論理とその展開、ネイチャー・アンド・ソサエティ研究第2巻「生き物文化の地理学」、海青社 / 第一企画株式会社（2015）：日本の健康を支える長寿日本一 信州の食企業13社、ダイヤモンド社 / ホクトきのこ総合研究所監修（2016）：改訂版きのこ検定公式テキスト、実業之日本社



1 はじめに

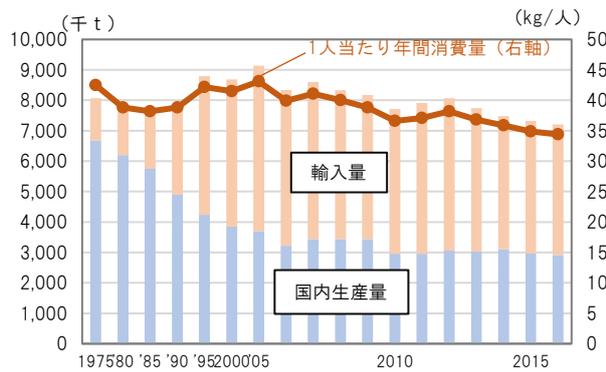
果物の原産地は、海外由来のものが多いですが、日本では縄文時代の遺跡から種が出土するなど、古い歴史を有する果物もあります。

果物の種類によって気候や土壌の条件による適地が異なります。例えば、りんごは比較的冷涼な地域、ももやぶどうは比較的少雨で水はけの良い地域、みかんは日照が多く温暖な地域で主に生産されています。長野県全体ではりんご、もも、ぶどうなど、新潟県全体では西洋なしなどが国内有数の生産地となっています。

最近 30 年間でみると、国内の果物全体の消費量は大きく変わっていませんが、果物の種類によっては消費そのものが減少したり、輸入品に押されているものも少なくありません。

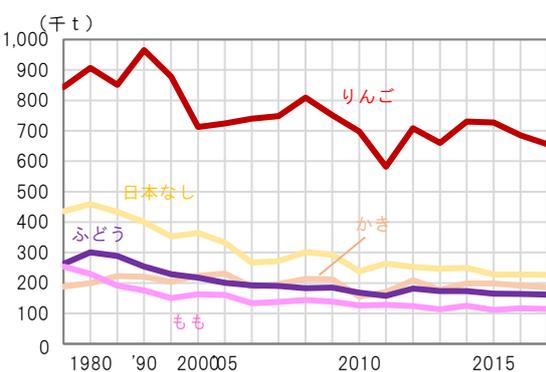
選定作業や害虫駆除の作業など、栽培には大きな手間を要しますが、様々な品種改良が行われ数多くの品種を生み出すとともに、品質によっては付加価値が大きく海外への輸出などが期待される産業の一つでもあります。

■ 果物供給量の推移（全国）



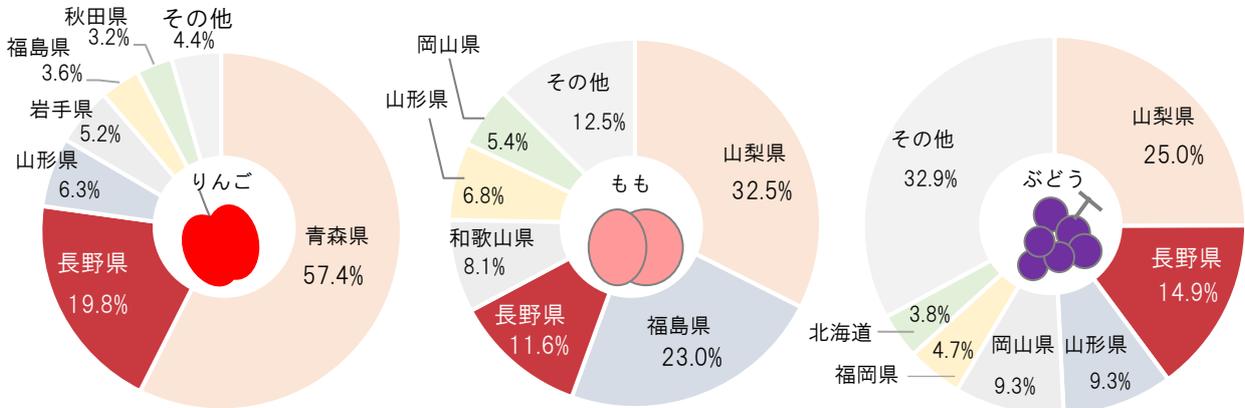
出所) 農林水産省「作物統計」をもとに作成

■ 主な果物出荷量の推移（全国）



出所) 農林水産省「作物統計」をもとに作成

■ りんご・もも・ぶどうの出荷量（都道府県別・2017年）



出所) 農林水産省「作物統計」をもとに作成

2 特徴

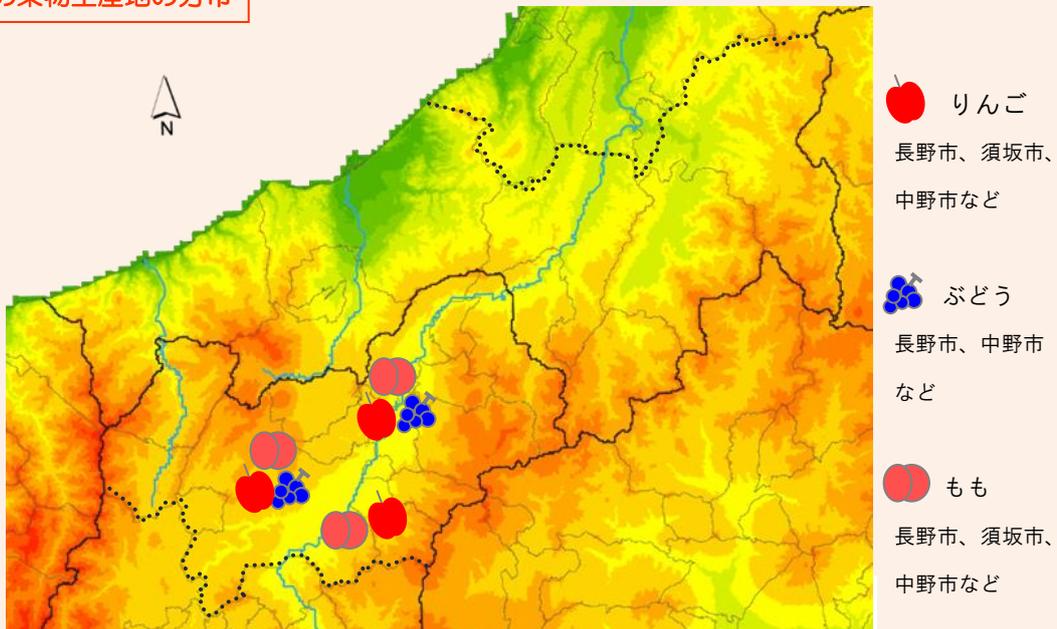
りんごの生産

- 都道府県別の生産量は、青森県に次いで長野県が第2位。長野県内では長野市をはじめ、須坂市・中野市で4割弱を占める。青森県弘前市周辺とならんで国内トップクラスの生産地といつてよい。
- 「ふじ」をはじめ、「つがる」や長野県生まれのりんご三兄弟といわれる「秋映（あきばえ）、シナノゴールド、シナノスイート」を栽培。

ももの生産

- 都道府県別の生産量は、山梨県に次いで長野県が第3位。長野県内では長野市・中野市・須坂市の生産量が大半を占める。
- 「川中島白桃」、「あかつき」をはじめ、長野県が生産量日本一の「ネクタリン」などを栽培。
- 桃とネクタリンの自然交配により、須坂市で生まれた「ワッサー」などもある。

信越県境付近の果物生産地の分布



備考) 信越県境付近にある市町村 (破線で挟まれた地域、市町村名は p.3 に掲載) の範囲のみ表記
出所) 国土地理院数値地図などをもとに作成

ぶどうの生産

- 都道府県別の生産量は、山梨県に次いで長野県が第2位。長野県内では、須坂市や中野市などの北信地域の生産量が大半を占める。
- 長野県が生産量日本一の「巨峰」をはじめ、須坂市が同日本一の「ナガノパープル」や「シャインマスカット」、ワイン用ブドウの「シャルドネ」や「メルロー」などを栽培。

その他の果物生産

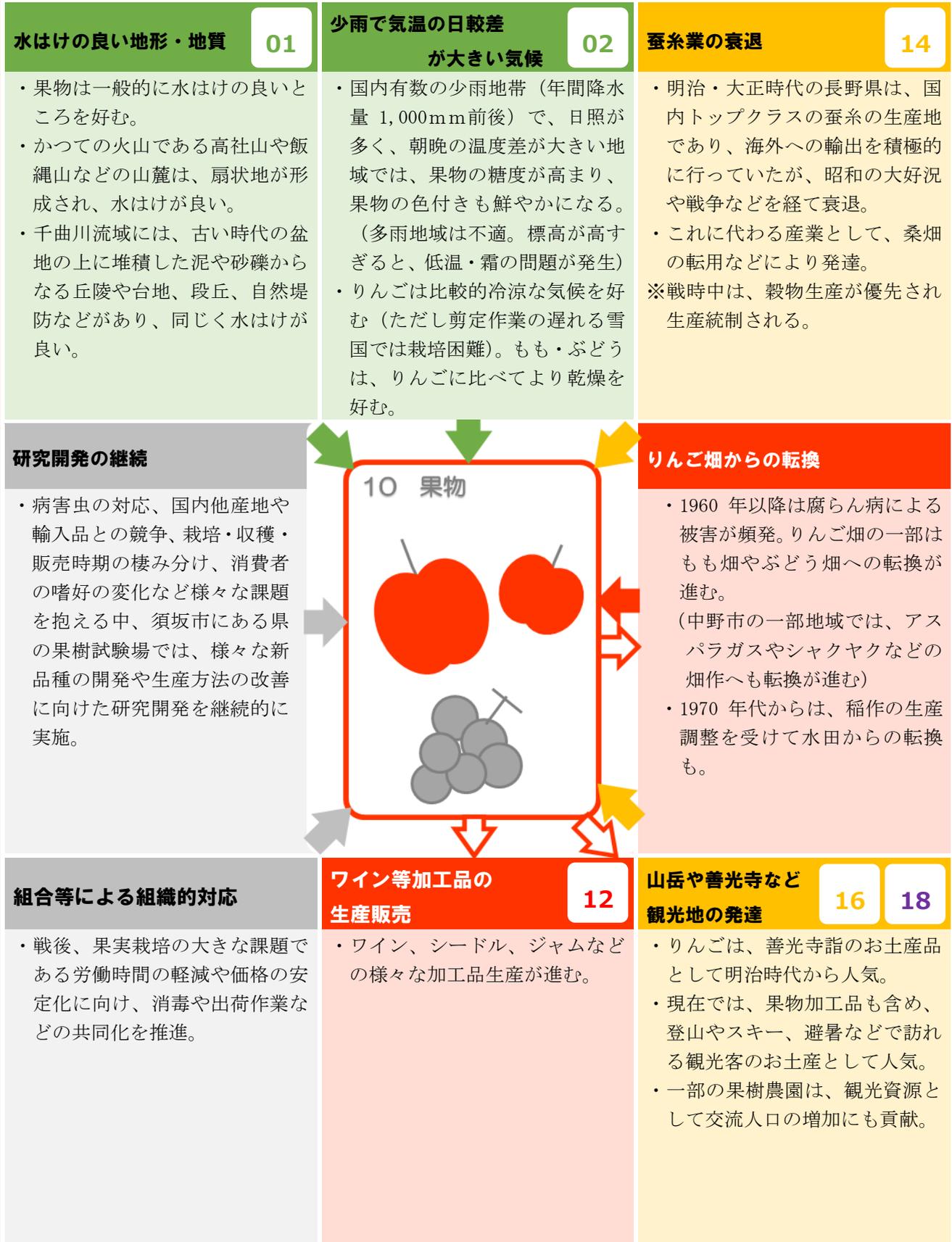
- すももの生産量は、長野県が第2位。長野市の生産量は全国トップ10に入る。

- ブルーベリーの生産量は、長野県が長らく第1位であったが、2016年は第2位。信濃町や大町市などが栽培の中心である。
- 西洋ナシは、長野市の生産量が全国トップ10に入る。
- 栗の生産量は、全国的にみて多くないものの、小布施町の栗は、江戸時代には藩の献上品であり、天領の栗林も存在 (これは丹波と小布施のみ)。明治時代は栗鹿子を開発、今に続く。

※新潟県側の上越・魚沼地域でも、すいかやいちごなどの果物を生産する農家はあるが、ここに示した果物の生産は少ない。

※ 市町村別生産量の一部は、農林水産省「平成16年作物統計」に基づくものであるため、近年の数値は変動している可能性がある。

3 因果関係



4 解説

要約

- 長野県北部の長野地域や北信地域は、果物の中でもりんご、もも、ぶどうについては国内有数の生産地です。
- この地域は、国内有数の少雨地帯であることや、朝晩の温度差が大きいといった気候条件に加え、水はけの良い地形・地質など、これらの果物栽培に適した自然環境を有しています。
- また、善光寺参りや、山国ならではの登山、スキー、避暑などの観光客が数多く訪れる地域であるため、土産物としても重宝され、さらには農園の一部が観光地としても認知されるなど、住民以外の需要があることも追い風になっています。
- しかし歴史を紐解けば、明治時代に国を挙げてけん引した蚕糸業があり、長野県がその中心的役割を果たしていたこと、その背景には稲作などに適さない土地を数多く有し、手間のかかる産業ではあるものの“養蚕で勝負するしかない”状況下で力を注いだ結果として、大きな発展を遂げたといえます。しかし、蚕糸業は世界的な経済情勢の変化などから、大正から昭和にかけてほとんど倒産します。
それに代わる産業の一つとして見いだされたのがりんご栽培です。同様に“りんごで勝負するしかない”状況下で力を注いだ結果、戦後まもなく大きく発展した時期がありましたが、その後の病害虫の被害などで壊滅的被害を受けた地域もありました。その状況下から、ももやぶどう、野菜や花卉への生産転換も行われました。
- その後、国民の食生活や嗜好の変化、国内外の産地間や嗜好品の中での競争下で、労働負担の軽減や病害虫対策、新たな品種開発などの研究開発を続け、様々な商品を世に送り出しながら今日に至っています。
- このように度重なる危機に対し、あるときは地道な研究開発の力で、あるときは思い切った転換で乗り越えて今日に至っています。

考察

- 隣接する新潟県の上越地方や魚沼地方では、これらの果物栽培はほとんど行われていません。気候条件をはじめ、地形・地質、それらに伴う中心的産業（稲作か養蚕か）の違い、観光地としての発達度の違いなど、自然の力の大きさを物語っており、近距離で生産物が全く異なるおもしろさを見ることもできます。
- 新潟県は、豪雪地帯として経済的に苦勞してきた地域ではありませんが、古くから稲作を中心に生計を立て続けてきた点では、歩んできた道に大きな違いがあるともいえます。
- ただし、これらを全く別々の環境と捉えるよりも、「県境に横たわるあの関田山脈があつて、新潟県側でたっぷり水分をいただくから、長野盆地でりんごやももの実が成り、お互いに食することができる」などの見方をすることによって、実は両者に深い関係があるとみることができます。
(全国トップクラスの果物生産量を誇る陰には、国内トップクラスの降水量の少なさがあり、その陰には国内トップクラスの降水量を誇る新潟県があるということになります。)
- 隣接しながらも対極的な側面をもつ両県域ですが、このようにこの県境をはさむ地域を一体として地域経営を考えてみると、意外に安定的な地域といえるかもしれません。

主な参考文献

内山幸久（1996）果樹生産地域の構成、大明堂 / 柏企画編（2007）信州のりんご 戦後を支えた赤い果実

日本酒

(国内有数の酒どころ)



1 はじめに

日本では、昔から米をつかった酒が飲まれていましたが、それが現在の日本酒となるまでには、長い時間をかけて行われた技術の進歩がありました。

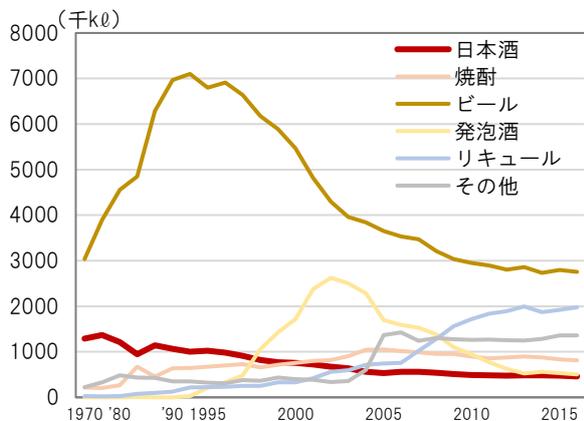
平安時代には、宮廷の中で行事用の酒がつくられるようになり、室町時代には京都市内に小規模な酒屋も現れます。そして、江戸時代中期ごろまでに、現代とほぼ同じ技術が確立します。酒づくりに適した冬季に醸造する方式が定着したのもこの頃で、杜氏・蔵人も誕生しました。

室町時代から江戸時代にかけては、奈良、伏見、伊丹、灘など近畿地方が一大産地となりました。明治時代以降は、全国清酒品評会の発足などにより全国的に技術が向上し、各地に名酒が生まれました。かつての日本酒は地域ごとに味が異なりましたが、最近は酒蔵ごとに異なる傾向にあります。

近年は酒類全体の出荷量が横ばい傾向にある中で、焼酎やリキュール類などに押されてここ 30 年間で半減していますが、中にはヒット商品を生み出したり、海外への輸出に活路を見いだす地域や酒蔵もあります。

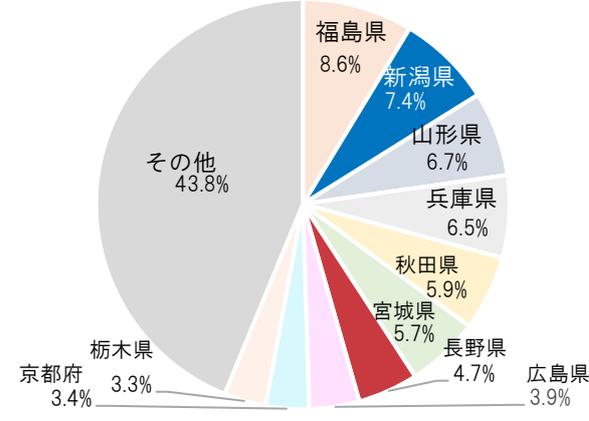
日本酒の生産量は、1 位兵庫県、2 位京都府で、3 位に新潟県が入っています。酒米の生産量では、1 位は兵庫県ですが、2 位に新潟県、3 位に長野県が入っています。

■ 酒類別出荷量の推移 (全国)



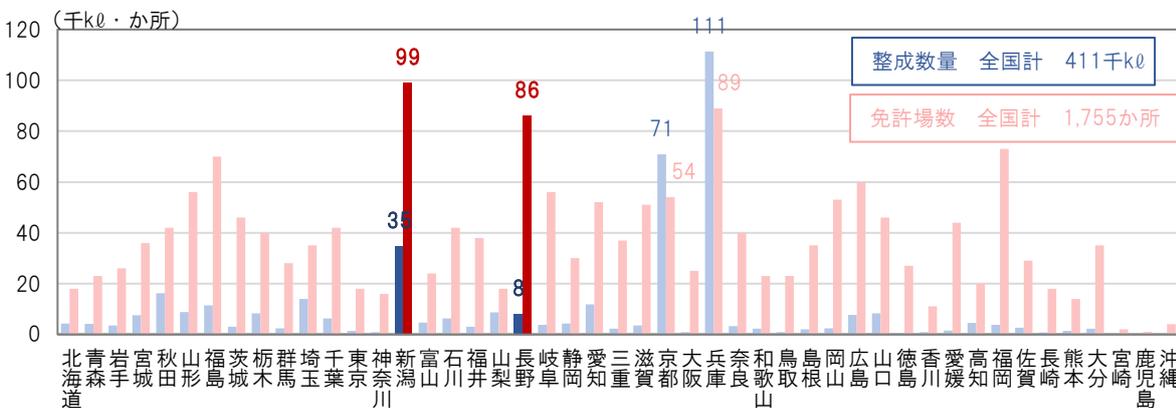
出所) 国税庁「酒のしおり」をもとに作成

■ 全国新酒鑑評会金賞獲得数 (2008-2017)



出所) フルネット「全国新酒鑑評会 金賞受賞蔵ガイド2018」をもとに作成

■ 日本酒の生産量・免許場数 (都道府県別・2017年)



出所) 国税庁「酒税課税関係等状況表」をもとに作成

2 特徴

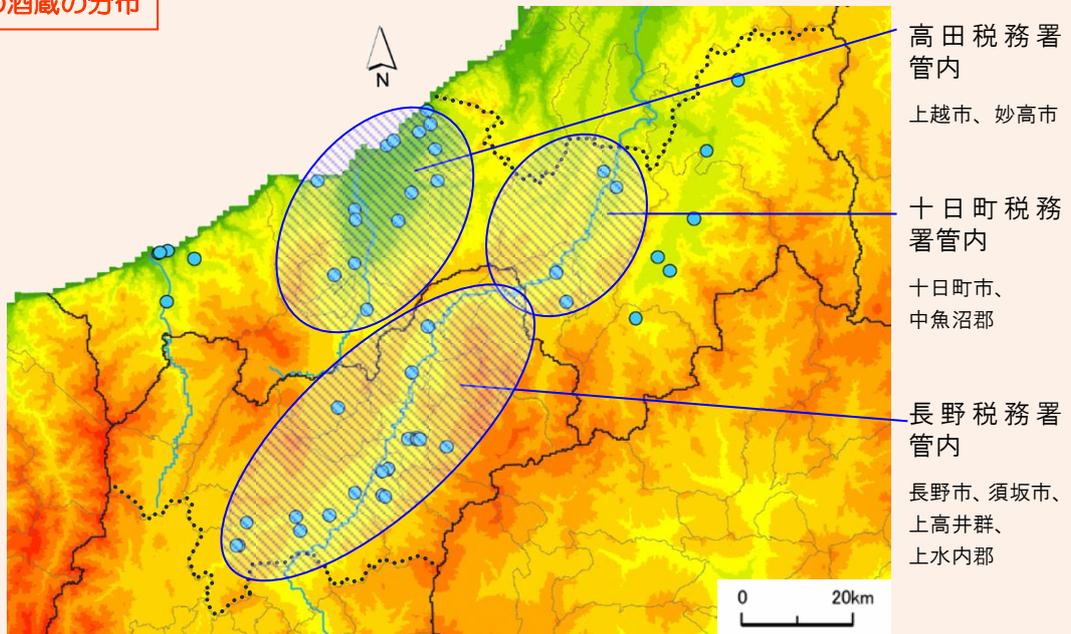
酒蔵数の多さ

- 全国に 524 か所ある税務署管内の中で、最も酒蔵（清酒の製造免許場：国税庁 2015 年度）の数が多いのは、京都府の伏見税務署管内の 28 場。長野税務署管内は 18 場で第 4 位、上越市の高田税務署管内は 16 場で全国 7 位。
- 新潟県、長野県とも酒蔵数に比して生産量は多くなく、比較的規模の小さい酒蔵が多いともいえる。

消費量の多さ

- 一人当たりの清酒消費量（国税庁 2015 年度）は、都道府県別で最も多いのが新潟県であり、2 位の秋田県に大差をつけている。新潟県内には 13 の税務署管内があり、十日町税務署管内は第 4 位、高田税務署管内は第 5 位、いずれも県内平均値を上回る。
- 長野県は全国 7 位の消費量である（6.49%）。

信越県境付近の酒蔵の分布



備考) 信越県境付近にある市町村（破線で挟まれた地域、市町村名は p. 3 に掲載）の酒蔵のみ掲載。
出所) 国土地理院数値地図および関東信越国税局「酒蔵MAP（平成 29 年 12 月現在）」をもとに作成

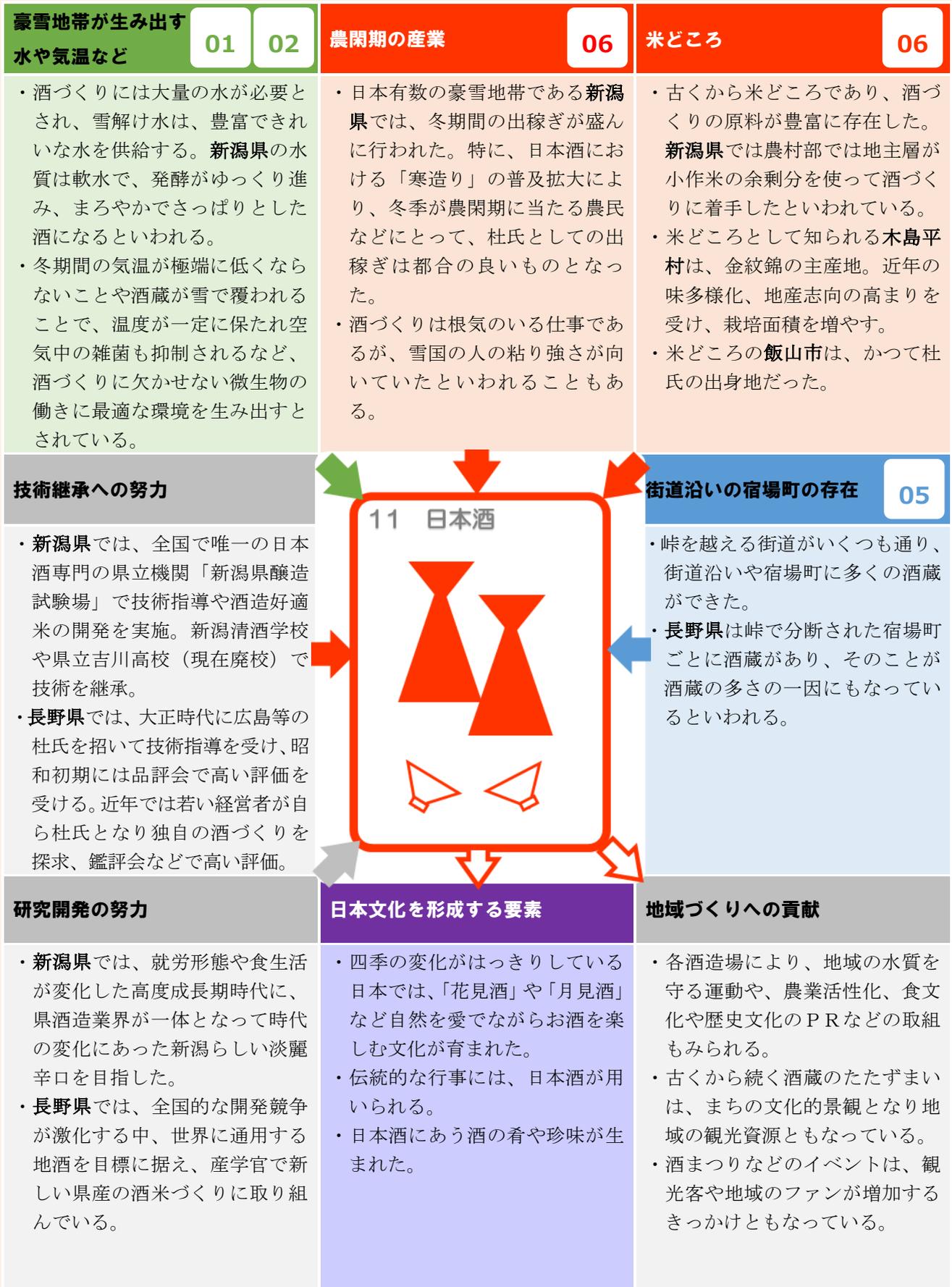
杜氏の存在

- 越後杜氏は、岩手県の南部杜氏、兵庫県の丹波杜氏と並んで、日本三大杜氏の一つとされる。その中の主要な位置を占める頸城杜氏は、上越地方（上越・妙高・柿崎・吉川）で活躍した。
- 長野県では、杜氏は外から雇うことが多かったが、その中においても、諏訪、小谷、飯山は、もともと杜氏の出身地であった。県が本格的に酒造工業に取り組んだ大正時代には、その 3 か所に広島から杜氏を招き、技術指導が行われた。

酒米生産量の多さ

- 酒米の中では山田錦に次いで 2 番目に生産量の多い五百万石は、新潟県での生産量が最も多く、上越地域はその一翼を担っている。
- 酒米の中で 3 番目に生産量の多い美山錦は、長野県での生産量が最も多く、北信・長野地域はその一翼を担っている。

3 因果関係



4 解説

要約

- 信越県境地域は、規模は大きくはないものの全国有数の酒蔵数を誇り、それだけ多様な日本酒が存在する地域でもあります。魚沼地域や上越地域は、日本酒の消費量も全国有数です。また、三大杜氏の越後杜氏のうちの一つ、頸城杜氏の出身地や、日本酒の原料となる主要な酒米の生産地も有するなど、生産基盤も充実しています。

このように、多様なお酒が継続し、技術・生産面でも全国の日本酒を下支えしてきたという点で、この地域は日本有数の酒どころともいえます。

- 豊富な雪解け水と、冬期間の気温が極端に低くならないなどの雪国の気候は、酒づくりに好影響を与えています。新潟県では、冬期間の出稼ぎとして杜氏となる人も多く、高い技術の杜氏集団が生まれました。また、古くから米どころであり、原料が近くで採れることも、酒づくりが盛んになった一つの要因といえます。このほか、多くの酒蔵が存在する背景として、この地域には、かつて峠を越える街道が多数通っており、街道沿いや宿場町ごとに酒蔵ができたこともあげられます。

新潟県では、新潟県醸造試験場での技術指導や酒造好適米の開発をはじめとして、様々な機関や酒蔵で研究や工夫が行われてきたこと、新潟清酒学校などで技術が継承されてきたことが味の維持・向上につながっています。高度成長期には、社会のニーズを捉えて県業界全体で取り組んだ淡麗辛口により、新潟のお酒が全国的に知られるようになりました。

長野県では、大正時代から県による杜氏の技術指導で評価が高まり、近年では若い経営者らが自ら杜氏となり独自の酒づくりを探求、高い評価を得てきています。全国的な開発競争が激化する中、世界に通用する地酒を目標に据え、産学官で新しい県産酒米づくりにも取り組んでいます。

- 日本酒は、伝統的な行事に欠かせないものであり、「花見酒」や「月見酒」などの楽しみ、様々な酒の肴など、日本文化を形作る重要な要素となっています。古い酒蔵のたたずまいは、地域の観光資源ともなります。また、各酒蔵では、食文化や歴史文化のPRなど地域に貢献する取組もみられます。酒まつりなどは、観光客や地域のファンが増加するきっかけともなっています。

考察

- 日本酒は、もともと風土を活かした生産品ですが、技術開発などにより全国各地に美味しい日本酒が増えていきます。この地域に多数ある小規模な酒蔵は全国的に見ても減少傾向にあり、地域経済や経営の視点から見れば厳しいものがありますが、小規模でもブランド化を図るなどの方法で成立可能な産業です。消費者の嗜好も変化する中で、生産技術の向上や研究への努力を怠らず、酒どころとしてのブランドを守り育てていこうとする姿勢は、これからも求められるものであり、地域づくりの参考にもなると考えます。
- 日本酒を取り巻く環境には、人々とのコミュニケーションを含めた多様な酒文化があります。酒文化の視点でこの地域をさらに深掘りしていくことが、地域のシビックプライド醸成につながっていくものと考えます。

主な参考文献

国税庁ホームページ / 農林水産省ホームページ / 日本酒造組合中央会ホームページ / 国税庁：平成 28 年度全国市販酒類調査 / 秋山裕一（1994）：日本酒、岩波新書 / 新潟県酒造組合（1961）：新潟県酒造史 / 中村豊次郎（1999）：越後杜氏と酒蔵生活/新潟市歴史博物館（2008）：平成 20 年度企画展 酒蔵～近代新潟の酒造り～ / 新潟日報事業者（2007）：新潟清酒達人検定 公式テキストブック / 田中武夫編（1970）：信州の酒の歴史、長野県酒造組合 / 朝日新聞長野総局編集（2018）：信州の日本酒と人、川辺書林



1 はじめに

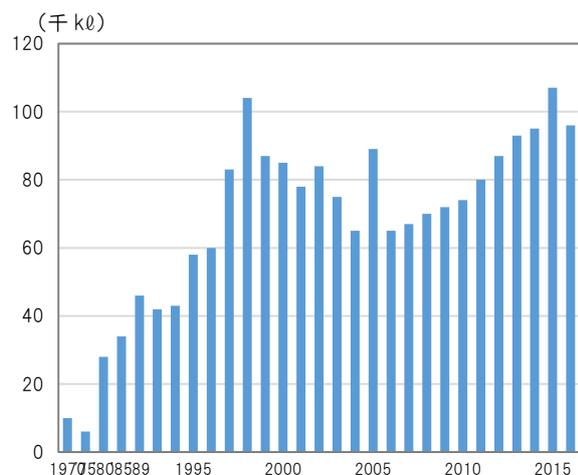
酒類全体の出荷量が減少から横ばい傾向にある中で、ワインを含む果実酒は増加傾向にあります。ワインの中でも、日本国内で栽培されたぶどうを100%使用して国内で醸造されたものは「日本ワイン」とされます。

日本のワイン造りは、今から約140年前の明治時代に、生食用ぶどう栽培が盛んであった山梨県で設立されたワイン会社から始まります。当時は米不足もあり、明治政府も殖産興業政策の一環として、ぶどう栽培・ワイン醸造を振興しました。その後、1927年には、川上善兵衛がマスカットベリーAを交配し、日本のぶどう栽培とワイン造りに大きく貢献しました。

ワインの消費自体が拡大したのは東京オリンピックの頃からで、その後いくつかのワインブームを経て今日に至っています。2003年からは国産ワインコンクール（現：日本ワインコンクール）が開催され、近年では世界のワインコンクールでも評価を受けるなど品質が向上しています。

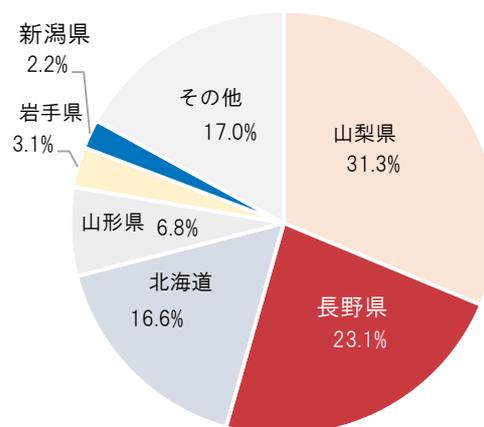
長野県は、ワイン用ぶどう生産量日本一、日本ワイン生産量では、長野県2位、新潟県6位、ワイナリーの数も長野県2位（34か所）、新潟県5位（10か所）となっています。

■ 果実酒の出荷量の推移（全国）



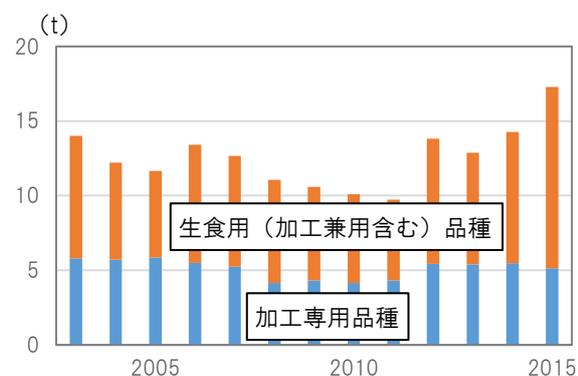
出所) 国税庁「国内製造ワインの概況」をもとに作成

■ 日本ワインの生産割合（都道府県別・2017年）



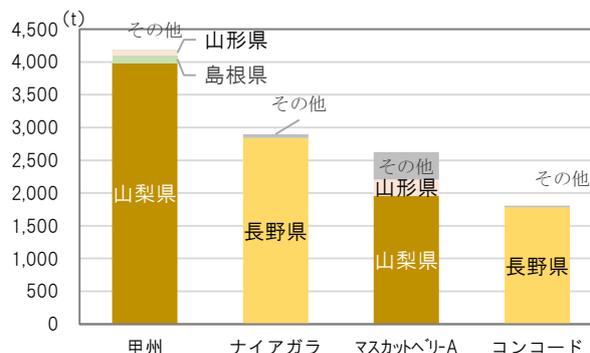
出所) 国税庁「国内製造ワインの概況」をもとに作成

■ ワインブドウ生産量の推移（全国）



出所) 農林水産省「特産果樹生産動態等調査」をもとに作成

■ 主なワインブドウの仕向量（2015年）



出所) 農林水産省「特産果樹生産動態等調査」をもとに作成

2 特徴

豪雪地帯のワイナリー

- **岩の原葡萄園**は、日本のワインぶどうの父ともいわれる川上善兵衛が1890年に設立した老舗。サントリー創業者との深い縁があり、現在はサントリーの傘下にある。冷却設備のない時代に、ワイン熟成庫である雪室を併設し冷却を実現。2015年には日本ワインコンクールで最高賞受賞。
- **越後ワイナリー**は、1975年、豪雪地帯の南魚沼市に設立。新潟県で最初に垣根仕立てのブドウ栽培に取り組んだほか、2001年に雪中貯蔵庫を備えた。

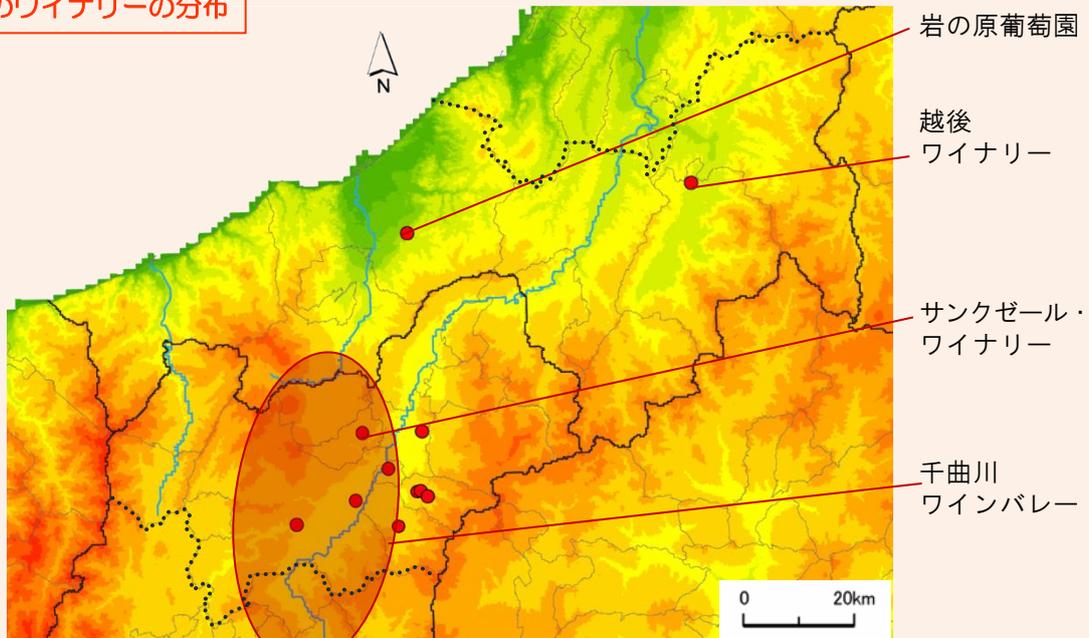
ブドウ栽培の適地「千曲川ワインバレー」

- 長野県はワイナリーの数が多く、長野県産の日本ワインはワインコンクールなどで高く評価されている。
- 長野・北信地方にもワイナリーが一定数集積しており、その一部は長野県内4か所のワイン集積地の一角を占める「千曲川ワインバレー」にも属している。

(長野・北信地方のワイナリー)

カンティエーナ・リエゾー、信州たかやまワイナリー、ドメヌヌ長谷(以上高山村)、西飯田酒造、今井酒造店(以上長野市)/楠ワイナリー(須坂市)/たかやしるファーム(中野市)/小布施ワイナリー(小布施町)/サンクゼール(飯綱町)

信越県境付近のワイナリーの分布



備考) 信越県境付近にある市町村(破線で挟まれた地域、市町村名はp.3に掲載)のワイナリーのみ掲載(出所) 国土地理院数値地図および関東信越国税局「酒蔵MAP(平成29年12月現在)」をもとに作成

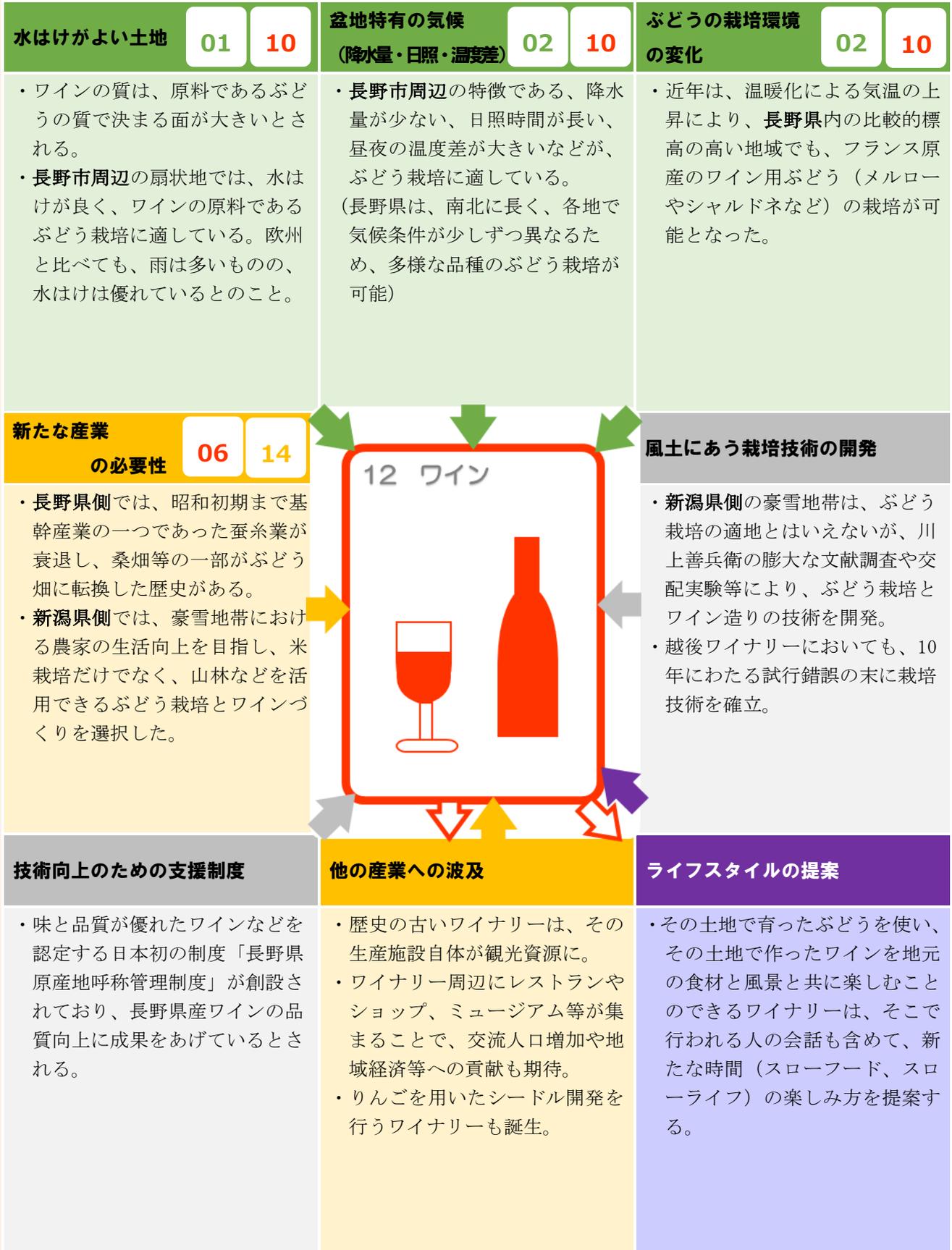
加工品の生産・販売も手掛けるワイナリー

- **サンクゼール・ワイナリー**は、1975年斑尾高原でペンション経営を始めた創業者が、ジャムづくりや農場経営を手掛け、その多角化の中で設立した。
長野の美しい丘の上で、田舎の豊かな恵みと上質な時間の提供をコンセプトとしている。フランスで誇りを持って暮らす人々に感銘を受けたこと、当時の村が掲げた農業立村の将来像と合致したことなども背景にある。

ワイン用ぶどうの生産

- **マスカットベリーA**は、岩の原葡萄園の創業者である川上善兵衛が交配した赤ワイン用の品種。現在、国産赤ワイン用品種の中では最も多く受け入れられており、日本のワインブドウの父とされる所以となっている。
- **長野県はワイン用ぶどう生産量が日本一**である。その中で、長野・北信地方を含む千曲川ワインバレーは、**欧州系品種**の栽培に適しているとされる。

3 因果関係



4 解説

要約

- 信越県境地域には、豪雪地帯の地域活性化の思いから設立された、「岩の原葡萄園」や「越後ワイナリー」があり、ぶどう造りに適した環境を活かした千曲川ワインバレーの地域が隣り合っています。その中には、日本ワインの育ての親などともいわれる川上善兵衛が創設した「岩の原葡萄園」や、ワインだけでなくジャムなどの加工品生産なども行う「サンクゼール・ワイナリー」など、個性的なワイナリーもあります。近年では、長野県産のワインの評価は全国的にも高まっています。

また、ワイン用ぶどう生産では、国産赤ワインの主要品種「マスカットベリーA」を交配した川上善兵衛の出身地と、生産量が国内有数の長野市周辺が隣り合い、日本ワインの生産を下支えする地域ともいえます。

- 長野市周辺は、降水量が少なく日照時間が長い、温度差が大きい、水はけが良いなど、ワイン用ぶどうの栽培に適した地域です。

また、環境に必ずしも恵まれていない地域においても、豪雪地帯の農家の生活向上や雪国の特徴を活かした地域活性化を目指す人材の強い思い、自地域への愛着や誇りも原動力となっています。

その他、近年の気温上昇により、長野県内での栽培に適する品種が出てきたこと、ぶどう栽培が盛んであることから良質なワインぶどうの生産が可能であったことや、長野県独自の優れたワインを認定する制度の創設などにより、品質向上への努力がなされていることも、評価が高まる背景となっています。

- かつて、長野県は養蚕が盛んでしたが、それに適していた地域は、ぶどうも含めた果樹栽培にも適しており、産業の転換が図られてきたともいえます。ワイナリーの集積などが進めば、周辺に様々な産業（レストラン、カフェ、ショップ、宿泊施設など）が誕生する可能性もあります。

また、歴史の古いワイナリーは、その生産施設自体が観光資源となり、レストランやショップ、ミュージアムを併設するワイナリーは、観光客や人が集まる場となっています。

その土地で育ったぶどうを使い、その土地で作ったワインを地元の食材と風景と共に楽しむことのできるワイナリーは、そこで行われる人の会話も含めて、新たな時間の楽しみ方を提案する場所ともなります。

考察

- ワインづくりの創業は、多分に個人のその土地に対する思い、あるいはワインづくりやスローライフなどに対する思いが強く出る面があります。
- また、ぶどうの品種改良から栽培、ワインの製造、マーケティングとすべてがつながるチームプレーが重要であることを再認識することは、近年、農産物の付加価値を高めるため注目される6次産業の本質を学ぶ上でも重要です。
- 恵まれた環境にないところからの成功は、人の知恵と努力の力を実感できる分野でもあります。

主な参考文献等

国税庁ホームページ / 山本博 (2013) : 新・日本のワイン、早川書房 / 上越市立総合博物館 / サントリーワイン博物館、中村幸一監修 (1976) : 日本のワインづくりの先駆者 川上善兵衛 / 越後ワイン (株) 編著 (2003) : 雪国でワインに挑んだ男たち 越後ワイナリー、新潟日報事業社 / 山本博 (2007) : 長野県のワイン、ワイン王国



1 はじめに

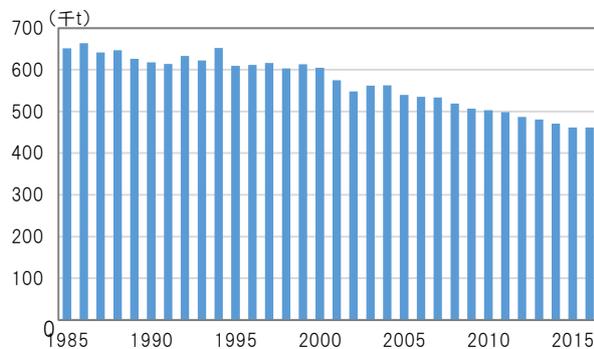
味噌の起源ははっきりとはしていませんが、古くは大宝令（701年）に「未醬」という言葉が登場し、これが味噌の前身ではないかと考えられています。平安時代にはぜいたく品であり、鎌倉時代から武士や僧侶へ、室町時代から一般に普及したといわれています。

地方の味噌の起源には、戦国武将にまつわる様々な話が伝わっています。例えば、越後味噌のはじまりは、上杉謙信が小田原から味噌造り技術を持ち帰り農民に伝えたことによるもの、信濃国に味噌づくりが普及したのは、武田信玄が行軍用につくらせた「川中島溜まり」以来などといわれています。これらは、当時、米と味噌が絶対に必要な兵糧（戦陣食）であったためと考えられます。

かつて、味噌は家庭でつくられ、その土地の原料事情や気候風土、食習慣などの条件により、それぞれの地域特有の味噌ができていきました。現在はほとんどが工場で作られ流通も発達していますが、それでも地域性がある程度残っている食品でもあります。一般的に、味噌は、麴の原料、味、色により分類されています。

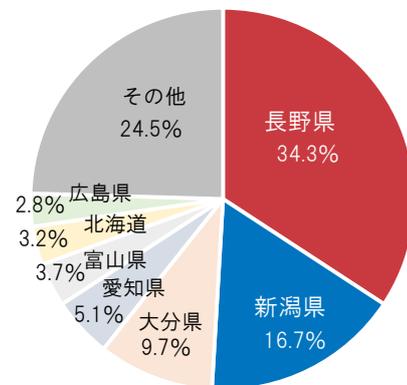
近年は、生活様式の変化とともに味噌の消費量は減少傾向にあり、新たな商品開発や栄養食品としてのPRなどの取組も見られる一方、海外での日本食ブームにより輸出量は伸びています。

■ 味噌の出荷量の推移（全国）



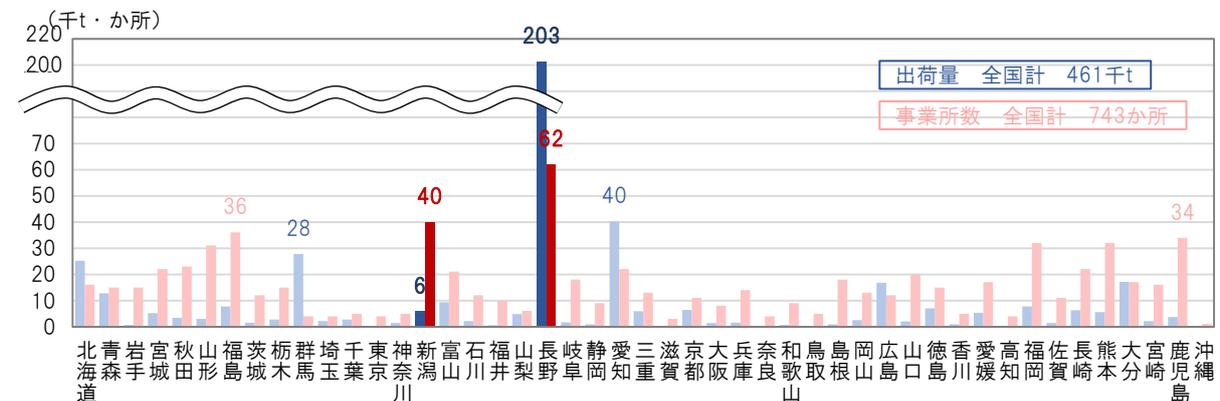
出所) 経済産業省「工業統計調査」をもとに作成

■ 全国味噌鑑評会の受賞数（2009-2018）



出所) みそ健康づくり委員会ホームページをもとに作成

■ 味噌の出荷量（都道府県別・2017年）



出所) 経済産業省「工業統計調査」をもとに作成

2 特徴

味噌の品質

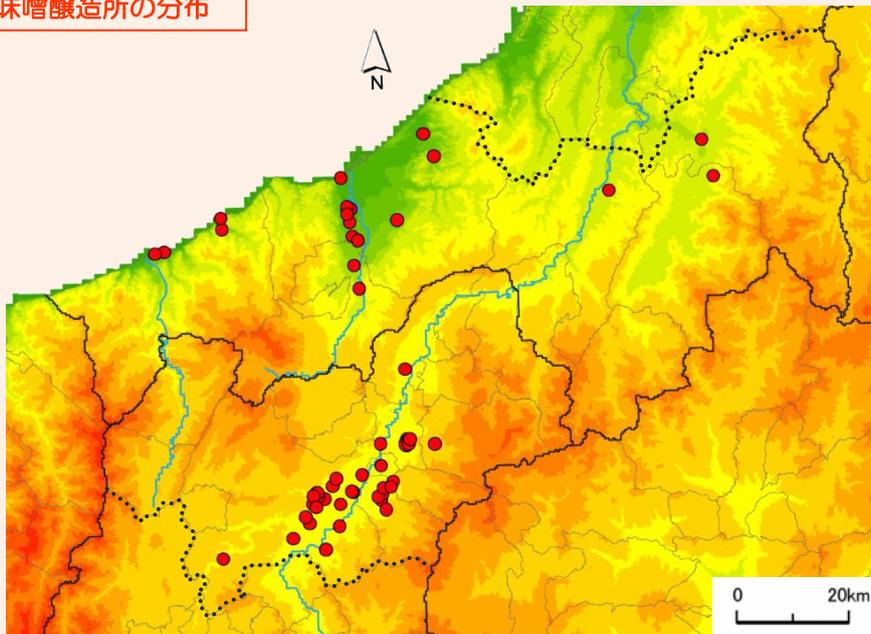
- **全国味噌鑑評会** *では、過去10年間の入賞者の約2割が信越県境付近の地域にある味噌蔵で占めるなど、毎年受賞者がある。
 - ・例えば2017年（第60回）は436品が出品されているが、農林水産大臣賞6品中で長野市、上越市の蔵が各1品受賞し、食料産業局長賞15品中で中野市の蔵が1品受賞している。
- **越後味噌**は浮き麴味噌という別名があるように、よい米を使い、米麴の粒が白く浮いて見える。中でも上越地方のものは麴割合が多く、大豆とほぼ同量の麴を加えるとされる。

味噌の生産量

- 都道府県別の出荷量をみると、長野県が第1位で、全国シェアの約4割を占める。
長野市には、業界上位のマルコメ味噌本社がある。長野県内には、その他にも業界上位のハナマルキ、ひかり味噌がある。

*日本一の味噌（農林水産大臣賞受賞味噌）を決定する「鑑評会」で、一般社団法人中央味噌研究所が毎年実施。

信越県境付近の味噌醸造所の分布

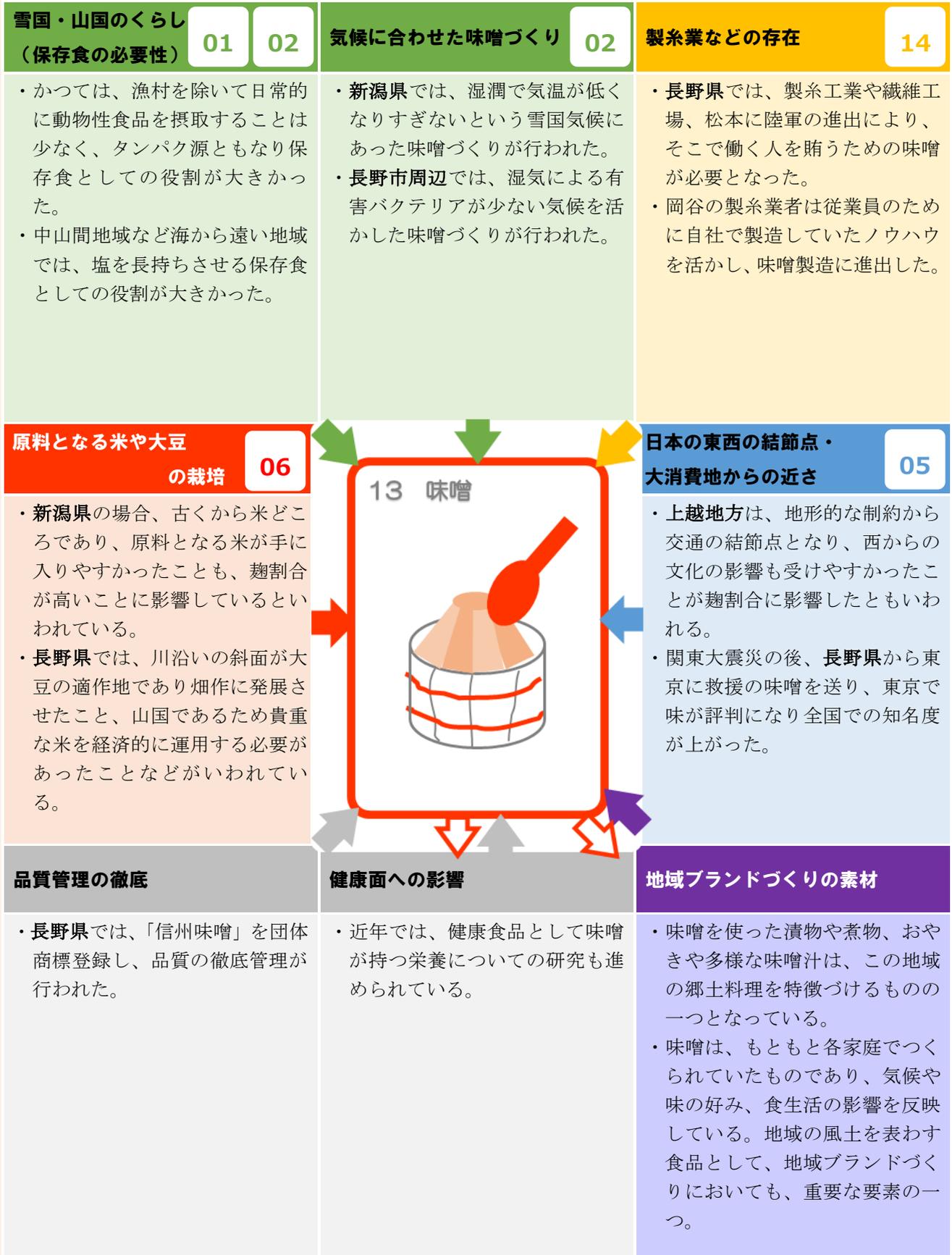


備考) 信越県境付近にある市町村（破線で挟まれた地域、市町村名はp.3に掲載）の醸造所のみ掲載
出所) 国土地理院数値地図およびiタウンページをもとに作成

味噌をはじめ発酵食品を核とした取組

- 長野県では、発酵食品で健康長寿を目指す決意表明として、2018年度に「発酵・長寿県」を宣言した。
- 上越市では、「発酵のまち上越」をキーワードに、2015年度から研究会を立ち上げ、発酵食品による地域ブランドづくりに取り組む。

3 因果関係



4 解説

要 約

○ 信越県境地域には、雪国気候と内陸性気候の両方の地域が隣り合っていますが、いずれも全国的に味の評価が高い味噌が製造されています。

また、生産体制では、規模は小さくとも原料や技術にこだわる味噌製造と、全国トップシェアの生産量を誇る味噌製造が行われる企業が共存している地域でもあります。

○ 味噌は全国的につくられていたものではありませんが、豪雪地帯や山間部ではタンパク源や塩を得るための保存食として役割は大きいものがありました。また、雪国独自の気候が発酵による影響を与え、湿気の少ない気候が有害バクテリアを少なくするなど、各地域で気候の特性を活かした味噌づくりが進められてきたともいえます。

上越地域の味噌は、米麴の割合が多く、良質の米を使った浮き麴味噌が特徴ですが、これは西の文化の影響を受けやすい交通の結節点であり、米がたくさんとれたことも影響しているといわれることもあります。

また、長野市周辺を含む長野県から味噌が全国展開する背景には、善光寺中心の大消費地からはじまり、製糸工業や繊維工場、松本の陸軍による味噌需要、岡谷の製糸業者の味噌製造進出があり、さらに関東大震災で信州から東京に救援の味噌が送られ、その味が評判になったなどの経緯があります。

○ 味噌を使った漬物や、おやき、多様な味噌汁は、この地域の郷土料理を特徴づけるものの一つとなっています。近年では、味噌が健康にとってもよい影響を与えるとの研究も行われています。

また、味噌は地域の風土を表わす食品として、各地の地域ブランドづくりにおいても、重要な要素の一つとなっています。

考 察

○ 味噌はもともと多くの家庭で作られていたものですが、規模の小さな家内制工業が出現することで味噌は商品となり、さらにその中から全国展開する規模を持つ企業も現れました。これらが同居する状態は、食品の製造や流通過程の変遷を学び、今後を考える上でも好材料といえます。

○ また、健康食品としても注目される味噌を通じて、地域の食文化の良さを再発見できる機会になるとも考えます。

主な参考文献

全国味噌工業協同組合連合会・中央味噌研究所（2001）：みそ文化誌 / 農文協（2006）：日本の食文化⑤甲信越 / 小泉武夫（1989）：発酵、中央公論社 / 小泉武夫（2016）：醤油・味噌・酢はすごい、中公新書 / 「信州味噌の歴史」編集委員会（1966）：信州味噌の歴史、長野県味噌工業協同組合連合会 / 本間伸夫（2010）：食は新潟にあり、新潟日報事業社



1 はじめに

衣服は人間生活に必要な不可欠なものであり、古くから麻、藁、絹、綿などの植物が用いられてきました。麻や絹は主に東日本、綿は西日本で中心につくられており、特に絹の輸出は日本の近代化を支えた時期もありました。

中でも、新潟県は織物、長野県は絹について国内トップクラスの生産を誇った時期もあります。その後、合成繊維や外国産の安価な製品が主流になる中で、生産量は減少してきていますが、重要文化財や伝統的工芸品などに指定されたものもあります。

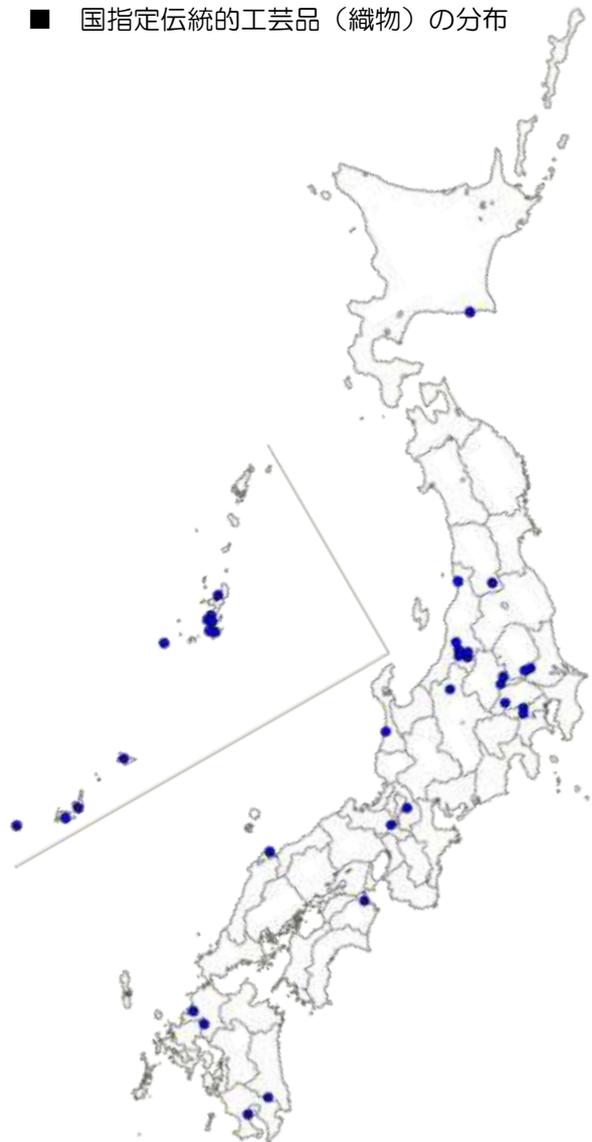
国内繊維業全体では、近年、衣料向けが減少し、自動車や航空機等の産業資材、おむつやカーペット等の衛生・生活資材向けの割合が増加しています。

■ 繭の収穫量の推移（全国）



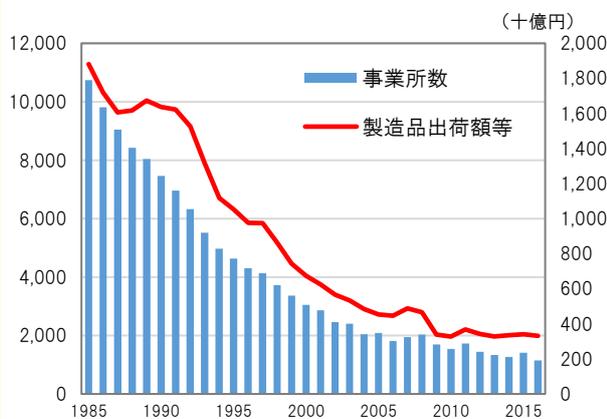
出所) 農林水産省「繭生産統計」をもとに作成

■ 国指定伝統的工芸品（織物）の分布



出所) 経済産業省「伝統的工芸品の指定品目一覧」をもとに作成

■ 織物業の事業所数と出荷額の推移（全国）



備考) 事業所数は従業員 4 人以上
出所) 経済産業省「工業統計調査」をもとに作成

2 特徴

魚沼地方を中心とする織物業の発達

- 縄文時代の衣料の主流であり、カラムシ（苧麻）の繊維を原料とする**アングイン**の製作方法が現在まで伝承されているのは、国内で十日町・津南を中心とする魚沼地方のみといわれる。
- 正倉院に上越市または妙高市の**庸布**が収蔵。中世には、越後の生産量が日本一の時期もあり。
- 中世・近世に発達した**越後上布**は、ユネスコの無形文化遺産に選定。
- カラムシを素材とし近世を中心に生産された**越後縮**は、薩摩上布に次ぐ高級夏織物。その用具や関連資料は国指定重要有形民俗文化財。
- **塩沢紬**、**本塩沢**、**小千谷縮**、**小千谷紬**、**十日町緋**、**十日町明石ちぢみ**は、国指定の伝統的工芸品に指定（全国の指定織物は38品）。
- **十日町市の絹織物**生産高は、ピーク時に比べて大幅に減少はしたが、西陣・丹後に次ぐ日本有数の**歴史的機織地**といわれる。

長野県を中心とする蚕糸業の発達

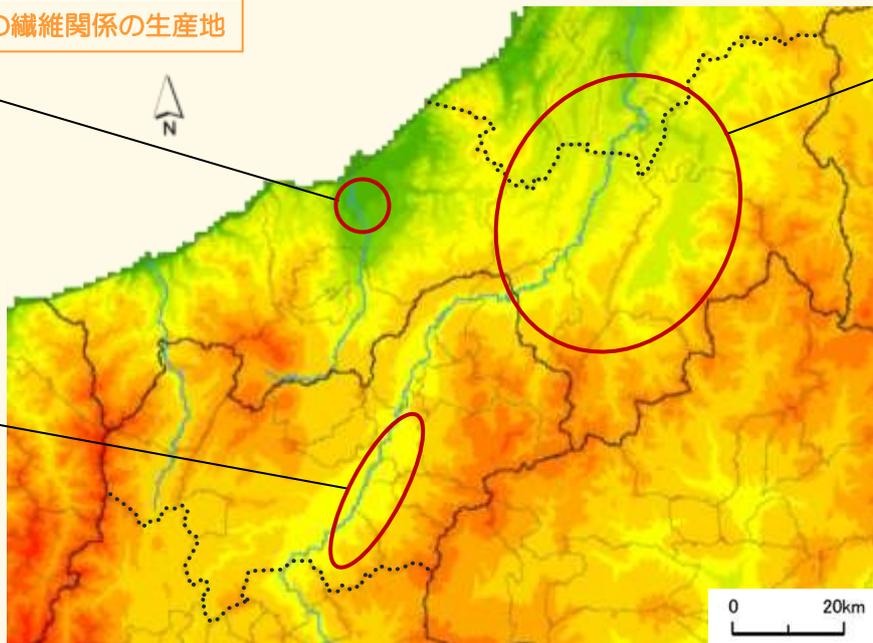
- 蚕糸業とは、蚕種製造・養蚕・製糸で構成される産業の総称である。明治時代に長野県は「蚕糸王国」と称される。県内では岡谷や上田などでの生産が際立つものの、**小布施**、**須坂**、**松代**などでも生産していた。
- 当時の**中野**器械製糸場は、富岡、二本松とならんで**日本三大製糸場**と称された。ただし、岡谷や上田に比べると早期に衰退した。
- **須坂市**では1887年頃に100を超える製糸場を抱え、「製糸王」と評される越寿三郎を輩出した。

※魚沼等の中山間地域でも、古くから養蚕業は営まれていた。上越市では、明治時代に長野県から桑苗を購入し、砂丘地帯や一部中山間地域で生産した時期もある。

信越県境付近の繊維関係の生産地

細幅織物の
発展

蚕糸業の
発展
松代
須坂
小布施
中野 など



織物業の発展
塩沢
十日町
小千谷 など

備考) 信越県境付近にある市町村（破線で挟まれた地域、市町村名はp.3に掲載）の取組のみ掲載
出所) 国土地理院数値地図および経済産業省「伝統的工芸品の指定品目一覧」をもとに作成

上越を中心とする細幅織物の生産

- 上越市高田は**バテンレース***の国内唯一の産地。
（福井、静岡などの産地は戦前に消滅）
- * バテンレースとは、ブレード（細幅織物）と呼ばれる糸で編んだテープで図柄の輪郭を縁取り、その内側にかがり縫いで模様を施したもの

- バテンレースの原料である細幅織物は、かつて全国生産の65%を占めていたといわれている。

3 因果関係



4 解説

要約

- 信越県境地域の織物は、魚沼地方を中心とした豪雪地帯における縄文時代のアンギンにさかのぼり、現在は、伝統的工芸品や産業として継続する織物の歴史は国内有数といえます。
北信地方では、須坂や松代を中心に蚕糸業が盛んであった時代もあり、そのことが現在のまちの基盤づくりに県を越えて影響しています。また、上越市のバテンレースは、国内唯一の産地です。
- 雪国ならではの、あるいは活用せざるを得ない制約条件を逆手に取って地場産業が形成されています。
魚沼地域では、雪国ならではの気候の特徴により、苧麻の生育に適していたり、織り作業に有利であったり、雪さらしによる漂白効果なども得ることができました。雪国ならではの人々の根気強さが織物産業を支えたともいわれています。
また、伝統と革新を繰り返してきたことにより継続したという要因もあります。例えば、上杉家の麻栽培奨励にはじまり、麻栽培衰退後は絹織物への転換、家内工業から工場制、手工業から機械化、季節生産から通年生産、織りから染めなど、時代とともに変化し生き残り続けてきました。
養蚕については、他の作物が育ちにくい河川敷を活用して桑の生産が行われ、信州各藩もそれを奨励しました。
- かつての繊維産業の発展は、今につながる他の産業へも波及しました。例えば、現在バテンレースの生産量は少ないものの、原材料の細幅織物の生産技術を活かしフィルム生産などへと転換した一部上場企業が存在します。
また、養蚕業からの投資により水力発電が行われ、そこから信越化学など企業の立地につながるなど、産業転換の原動力にもなっています。
そのほか、織物の産地で蕎麦のつなぎにフノリを使うことは、織物作成過程でフノリを使うことと関係しているともいわれています。

考察

- 農閑期の仕事をいかに確保するかという思いの中から、風土を活かして生み出された産業である点は共通しています。
- 時代は変わり、海外を含めた経済情勢の変動や輸入品等の影響を大きく受ける中で、規模は縮小しつつもその価値を高めていく方向、あるいは工程にアレンジを加える方向、さらにはその技術や風土を活かして別の産業へ転換してきた方向など、隣接する魚沼、北信、上越地方それぞれの繊維業発展の経過は異なりますが、この継承と革新を繰り返してきた伝統の歴史は、地域づくりに共通する点が大きいと考えます。

主な参考文献

犬丸直・吉田光邦編、伝統的工芸品産業振興協会監修（1992）：日本の伝統工芸品産業全集・第1巻染織、ダイヤモンド社 / 池田庄治編著（1978）、新潟県の地場産業、野島出版 / 阿部勇（2016）：蚕糸王国信州ものがたり、信濃毎日新聞社 / 企画集団ぶりずむ（1993、1997）：ゆきのまち通信 30号・49号



1 はじめに

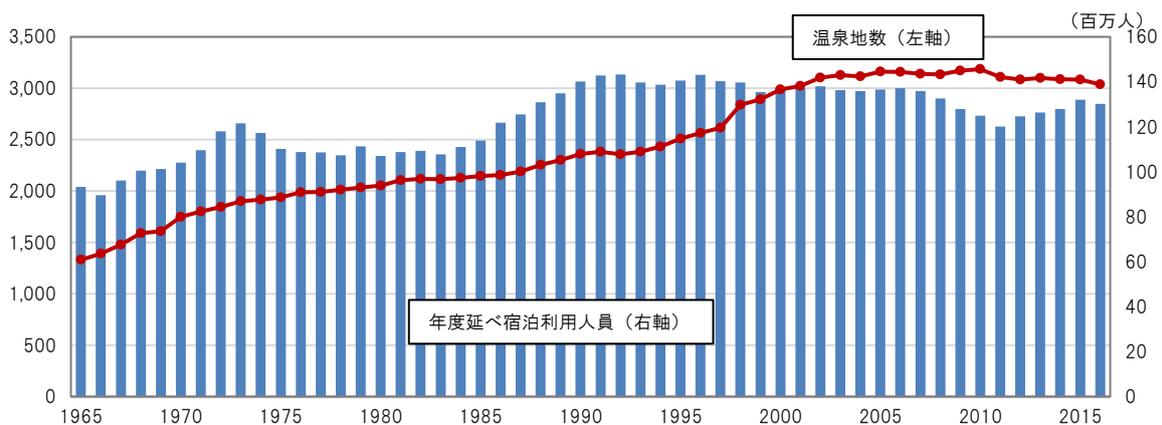
温泉は世界各地に存在しますが、日本国内には3,000か所以上の泉質の多様な温泉地が密集し、療養、保養、観光などに積極的に活用されていることから、温泉大国ともいわれています。

温泉の歴史は古く、日本三古湯といわれる道後、有馬、白浜温泉は古事記などにも記載されるほか、箱根、熱海、別府などのように古代から現在まで多くの利用客を集める温泉地もあります。

一般に温泉は火山帯に多く存在しますが、掘削技術の進歩などから非火山帯での温泉地も少なくありません。このことから、温泉地は全国的に分布していますが、その数を都道府県別にみると、第1位は北海道、第2位は長野県、第3位は新潟県となっています。

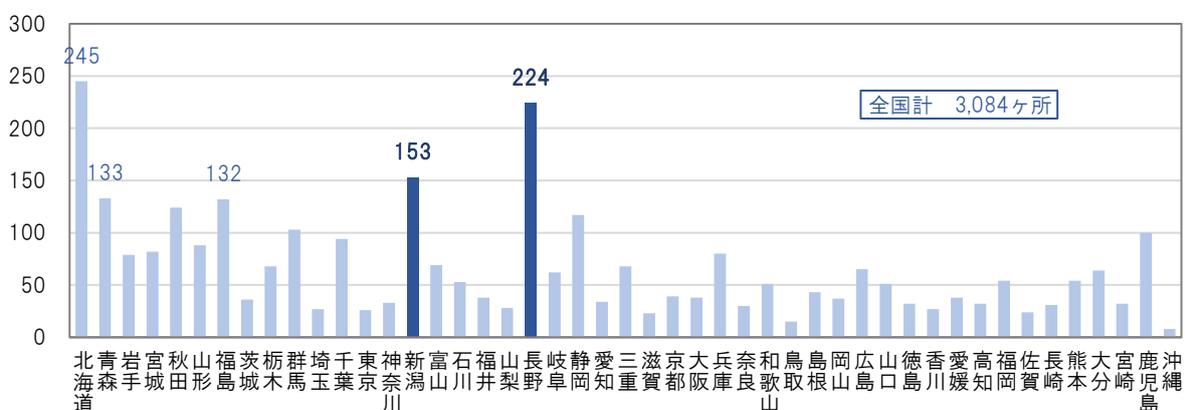
温泉地の宿泊施設や宿泊客の数は、バブル経済の崩壊後、日帰り温泉施設の増加とも相まって長らく減少傾向にありましたが、ここ数年は外国人旅行客（インバウンド）の増加などから宿泊客数が回復傾向にある地域もあります。

■ 温泉利用客数と温泉地数の推移（全国）



出所) 環境省「温泉利用状況」をもとに作成

■ 温泉地数（都道府県別・2016年）



出所) 環境省「温泉利用状況」をもとに作成

2 特徴

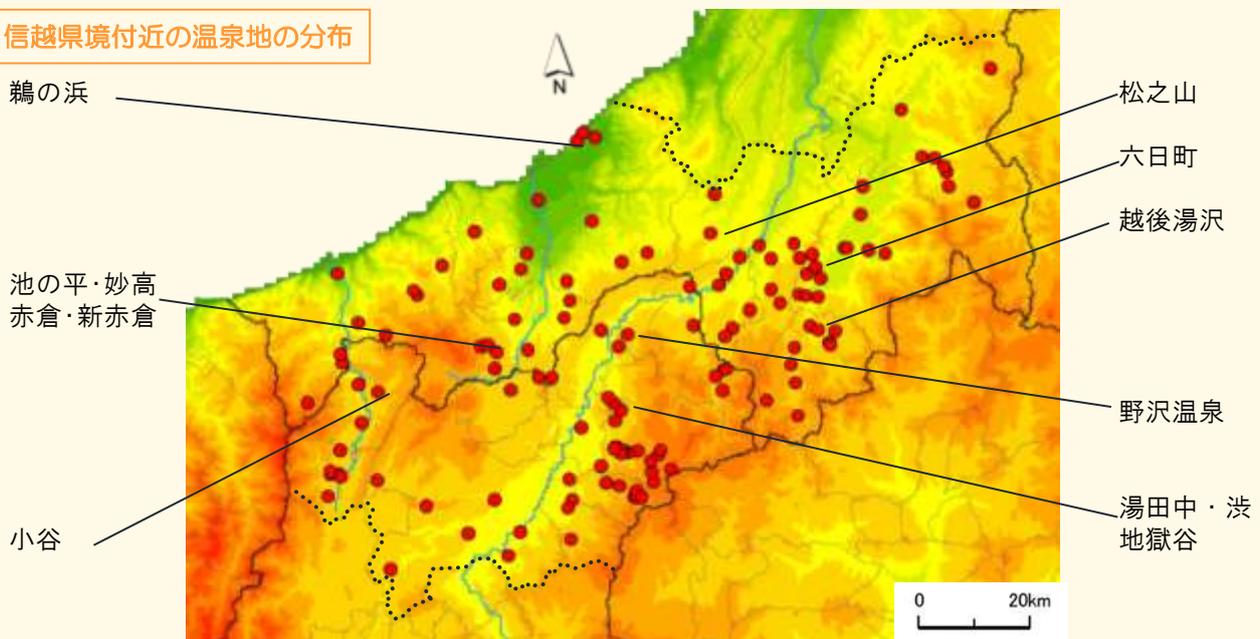
温泉地の多さ

- 都道府県別の温泉地数は、北海道に次いで長野県が第2位、新潟県が第3位。この両県境付近の温泉も同様に多く、国内有数の温泉密集地ということもできる。
- 全国3,000を超える温泉地の中で、宿泊客数が多いベスト3は箱根、熱海、別府などだが、この地域で宿泊客数ベスト100に入る温泉地には、赤倉・新赤倉、池の平・妙高（妙高市）、越後湯沢、湯田中・渋（山ノ内町）がある。

泉質等の評価を受ける温泉

- 江戸期のいわゆる温泉番付の評価によれば、常に最高位の大関には草津、有馬が挙げられていた。その中で、渋（山ノ内町）、松之山（十日町市）、関（妙高市）、塩沢（南魚沼市）の各温泉は前頭として評価される。
- 全国80か所が指定される国民保養温泉地には、六日町（南魚沼市）、小谷、関・燕（妙高市）が認定されている。
- 松之山温泉は、草津、有馬とならんで日本三大薬湯と称されることもある。

信越県境付近の温泉地の分布



備考) 信越県境付近にある市町村（破線で挟まれた地域、市町村名はp.3に掲載）の温泉地のみ掲載
出所) 国土地理院数値地図および新潟県「温泉利用状況報告書」および長野県薬事管理課資料をもとに作成

その他の特徴的な温泉

- 越後湯沢温泉の高半ホテルは、1075年創業の県内最古、全国でも9番目に古い老舗企業。川端康成が小説「雪国」の執筆で滞在。
- 鶺の浜温泉や六日町温泉は、石油や天然ガスの採掘中に発見された温泉。
- 地獄谷温泉の露天風呂にサルが入浴する様子は「スノーモンキー」といわれ、多くの外国人旅行者から注目されている。
- 野沢温泉の運営を担う野沢組は、地域コミュニティによる自治運営組織の老舗的存在として注目されている。

3 因果関係



4 解説

要約

- 日本国内の温泉地は 3,000 を超えており、近くに温泉のない地域はないといえるほどの数がありますが、この地域には比較的火山地形が多いことや、首都圏などの大都市から比較的近い場所にあることから、古い歴史を有する温泉地が数多くあります。
また、現代に入り市町村などが数多くの日帰り温泉施設を整備したことにより、様々な形態の温泉施設・温泉地が集積する国内でも有数の地ということもできます。
- 豪雪地帯や高原地帯の温泉ならではの展開として、スキー場やリゾート地開発の起点ともなりました。

考察

- 日本人にとってはもちろん外国人旅行者にとっても温泉人気は根強いものがありますが、全国どこにでも温泉、日帰り温泉施設も数多く登場する中で、産業として順風満帆な地域ばかりではありません。
宿泊施設自体の魅力だけでなく温泉地全体の魅力を高め、地域の回遊性を高め、ファンを生み出していくといったことに、数十年も前から取り組み、町おこしに成功したといわれる地域も数多くあります。そのような中で地域独自の地域づくりに取り組む際に、その核の一つとなる力が温泉にはあります。
- 旅館業など温泉に関わる産業は多くの人出を必要とする産業であり、高齢化・過疎化の影響を大きく受けつつあります。このピンチをチャンスに変えていくためには、地方回帰や働き方改革などの動向を捉えつつ、地域を挙げて新たな働き方やライフスタイルを提案することによって、従業員の確保につなげる面もあるのではないのでしょうか。
- 温泉や温泉地への訪問がもたらす健康、癒し、あるいはコミュニケーション促進などといった効果は、現代社会で人々が暮らす上で普遍的に必要なものといえます。このことも含めた温泉文化の視点から、この地域を深掘することによって、地域内外の人々のシビックプライド醸成にもつながるものと考えます。

主な参考文献

西川有司 (2017) : おもしろサイエンス 温泉の科学、日刊工業新聞社 / 山村順次 (2015) : 47 都道府県・温泉百科、丸善出版 / 島津光夫 (2001) : 新潟温泉風土記、野島出版



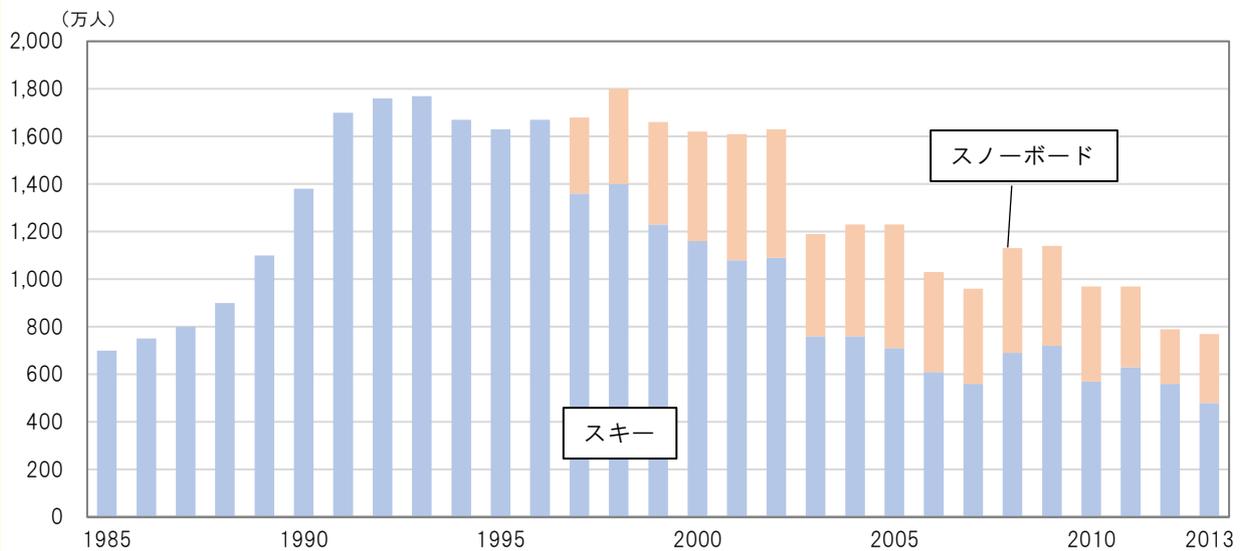
1 はじめに

日本国内での近代スキーは、1911年にオーストリアのレルヒ少佐が上越市高田で行った演習が発祥とされ、その後全国に広まりました。

戦後は高度経済成長期の観光開発ブームやその後のリゾート開発ブームによって開発が進んだものの、1990年代前半のバブル崩壊やレジャーの多様化などに伴い、スキー場利用者数は大きく減少傾向が続いています。ただし近年は、野沢温泉や妙高高原などインバウンド（訪日外国人客）によって活況を呈している地域もあります。

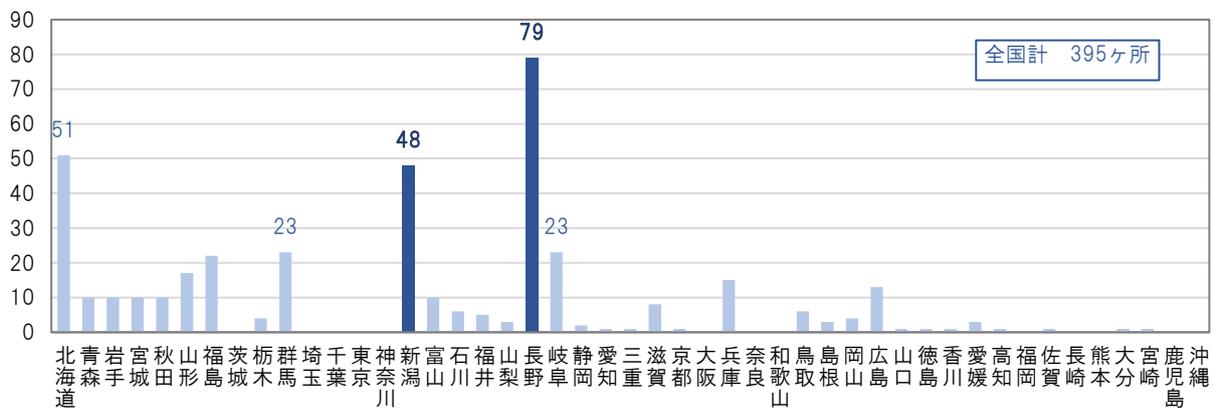
スキー場の数を都道府県別にみると、長野県、北海道、新潟県の順に多く立地しています。

■ スキー人口の推移（全国）



出所) 日本生産性本部「レジャー白書2014」をもとに作成

■ スキー場の数（都道府県別・2015年）



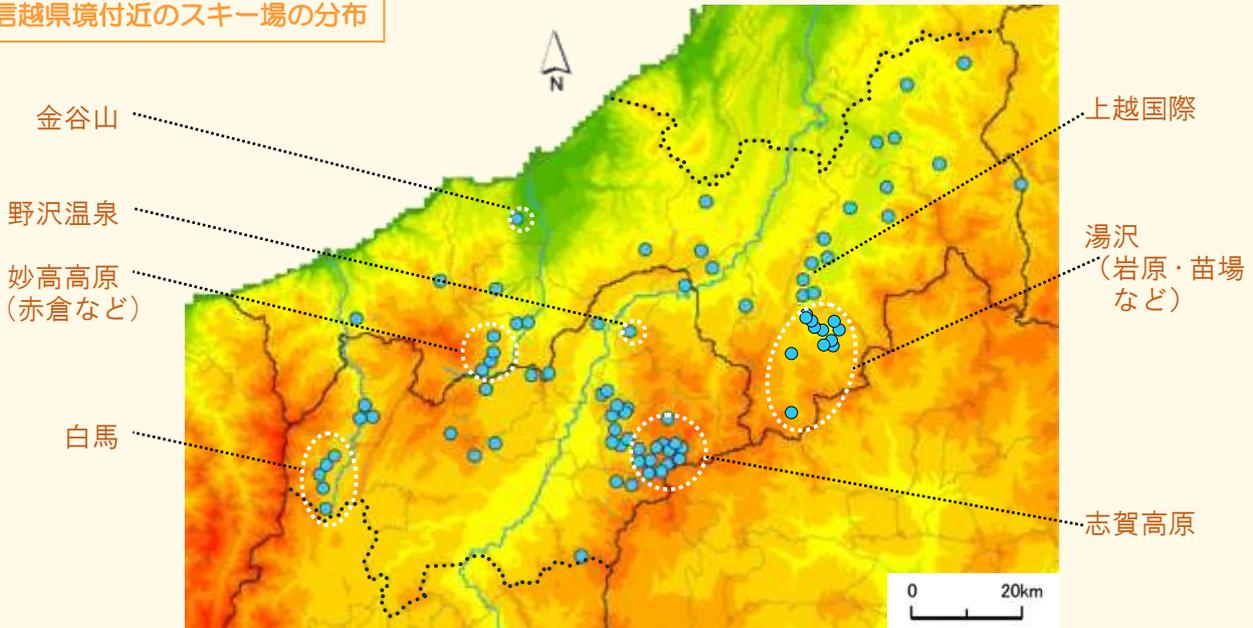
出所) 観光庁「スノーリゾート地域の現状」2015をもとに作成

2 特徴

スキー場の歴史

- 国内のスキー発祥の地は、上越市の金谷山スキー場。
- 飯山市の市川先生、湯沢町の本間氏は金谷山でスキー講習会に参加し、白馬村の丸山先生は高田からスキーを購入。それぞれ地元で実施したのがはじまり。飯山市は、この経過から長野県のスキー発祥の地に。
- 1912年に創立した小賀坂スキー（飯山市）は、高田から製造方法を教わり、現存するスキーメーカー第1号に。
- 赤倉（妙高市）と志賀高原（山ノ内町）は、国際スキー場の誘致合戦の末、両方認定。1937年に国際リゾートホテル建設
- 岩原スキー場（湯沢町）は、1931年の上越線開通により、当時「東洋一のスキー場」と宣伝されるまでになった。
- 1947年、志賀高原スキー場に本州で初めてのスキー用リフトがつけられる。

信越県境付近のスキー場の分布

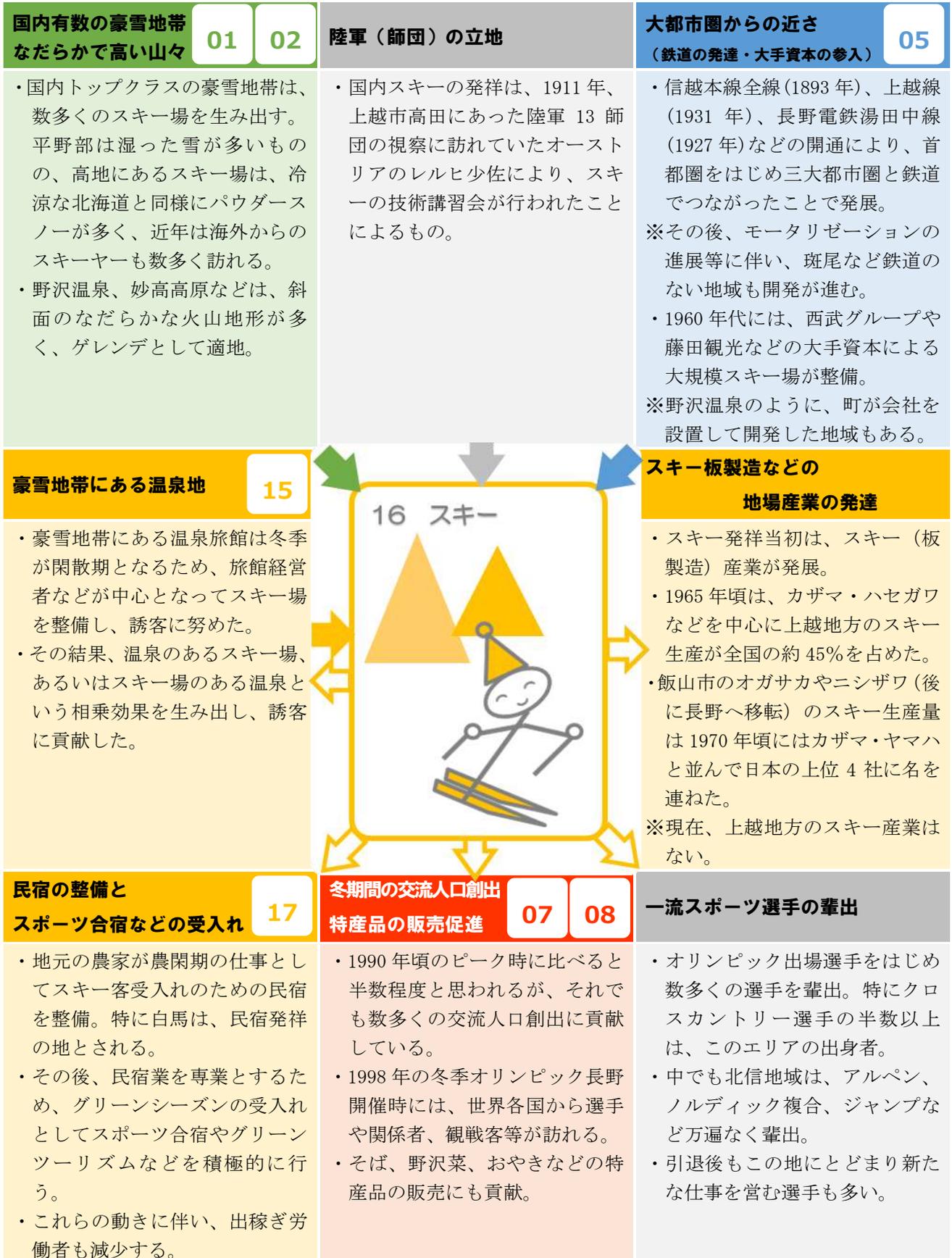


備考) 信越県境付近にある市町村 (破線で挟まれた地域、市町村名は p. 3 に掲載) のスキー場のみ掲載
出所) 国土地理院数値地図および新潟県観光企画課・長野県山岳高原観光課資料をもとに作成

スキー場の数や規模

- 湯沢町は、苗場をはじめ全国一のゲレンデスキー場群と称される。
- スキー場の面積では、上越国際、志賀高原スキー場が北海道のニセコとならんで三大スキー場と称される。
- 野沢温泉スキー場は、最長滑走距離 10,000m であり 日本最長とされる。

3 因果関係



4 解説

要約

- 信越県境地域は、国内のスキー発祥の地を擁し、そこから周辺地域にスキー技術やスキー生産技術が広まった、全国有数の歴史を持つ地域です。

また、この地域におけるスキー場の集積度も、国内トップクラスといえます。地元のファミリー層向けの小規模なスキー場から、国際大会が開かれるほど大規模なスキー場まで、バラエティに富んだスキー場があります。
- 国内スキー発祥の地となった背景には、八甲田山遭難事件を踏まえ、陸軍第13師団がスキー技術を習得すべく、オーストリアからレルヒ少佐を招いたことがあります。

国内トップクラスの豪雪地帯では、スノーパウダーを楽しめる志賀高原から、斜面がなだらかな野沢温泉や妙高高原など、ゲレンデとしての適地もありました。また、三大都市圏と鉄道でつながったことにより、スキー場へのアクセスが向上し、より多くの集客や大きな大会の開催にもつながりました。

他方、地元温泉旅館の閑散期や農家の冬の仕事としても、スキー客の受入れは好都合なものでした。1960年代にはスキーブームも相まって大手資本による大規模なスキー場も整備されました。
- スキー発祥当初は、スキー（板製造）産業が発展し、1965年頃には上越地方のスキー生産が全国の約45%になったほか、隣接する飯山市でも1970年頃には全国有数の生産量を誇る企業がありました。

また、冬期間の交流人口創出にも貢献し、これらに付随して、そば、野沢菜、おやきなどの特産品の知名度も向上しました。

その他、オリンピック出場選手をはじめ数多くの選手を輩出し、引退後もこの地にとどまり新たな仕事を営む選手も多いなど、人材の確保にも貢献しています。

考察

- スキー産業が衰退する中で、スキー場同士の競争から連携の動き、スキー+ α の取組、あるいはスキーシーズンとグリーンシーズンの連携など、様々な取組がなされています。
- 現在スキー場がある地域は、山間部に限られていますが、歴史的なつながり、人の流れを作り出す波及効果を考えると、この地域全体の資源とみるべきであり、広域的に物事を考える視点を得られる分野であると思います。
- インバウンドによる盛況も一過性のものと懸念される中、さらには地球温暖化の進行が不可避とされる中、その先をどのように見据えて今を取り組んでいくか、重要なテーマです。
- 雪国をポジティブに感じる人々が集まる貴重な地域資源であり、この地が有するスキーの歴史は間違いなく財産であると考えます。

主な参考文献

瓜生卓造（1978）スキー風土記、日貿出版社 / 白坂蕃（1986）スキーと山地集落、民玄書房 / 呉羽正昭（2017）スキーリゾートの発展プロセス 日本とオーストリアの比較研究、二宮書店

ニューツーリズム

(自然環境を活かしたツーリズムの草分け的地域)



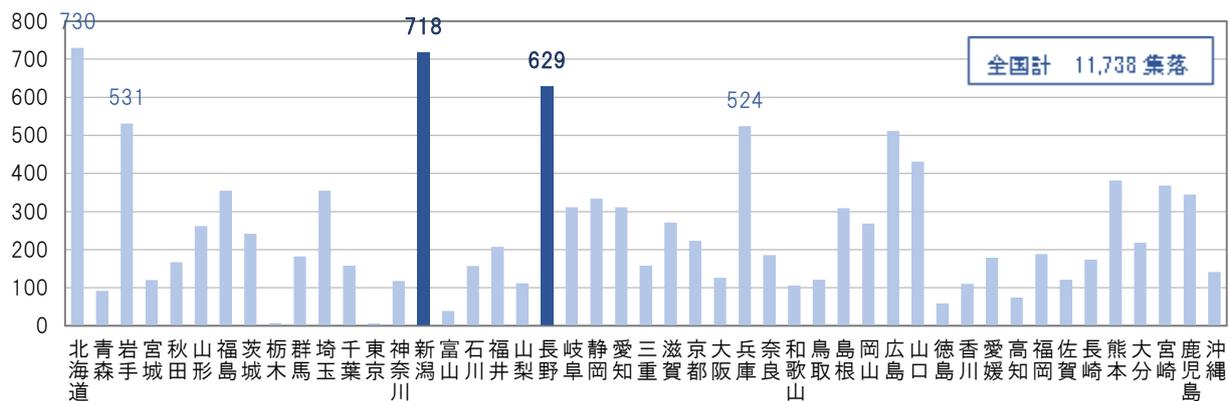
1 はじめに

戦後の高度経済成長期には旅行客数が急増し、全国各地でレジャー施設の整備やリゾート開発などが進みましたが、その後環境問題への懸念、バブル経済の崩壊、旅行ニーズや旅行形態の多様化などから、観光の在り様も変わりつつあります。2000年に入ってから、産業観光やエコツーリズム、グリーンツーリズム、ヘルスツーリズムなどのニューツーリズムの振興も行われてきました。

このうちグリーンツーリズムは、国内では1990年代から農林水産省の呼びかけではじまり、その後全国的に波及、当初の宿泊場所はスキー民宿が中心でしたが、その後一般農家にも波及しました。

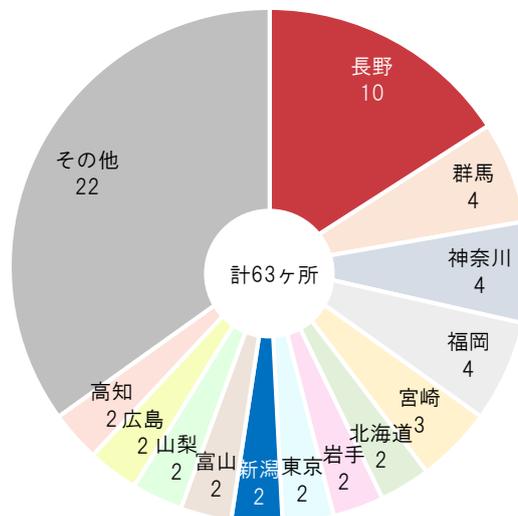
* スポーツ合宿は、比較的伝統のある交流形態であり、ニューツーリズムに含めるケースは少ないものの、本報告書では地域の自然や文化を活用し、教育や学習の要素を含んだツーリズムという観点からここに含めて説明します。

■ グリーンツーリズムの取組実施集落数（都道府県別・2017年）



出所) 農林水産省「農林業センサス」をもとに作成

■ 森林セラピー基地数（都道府県別・2018年）



出所) 森林セラピーソサエティホームページをもとに作成

2 特徴

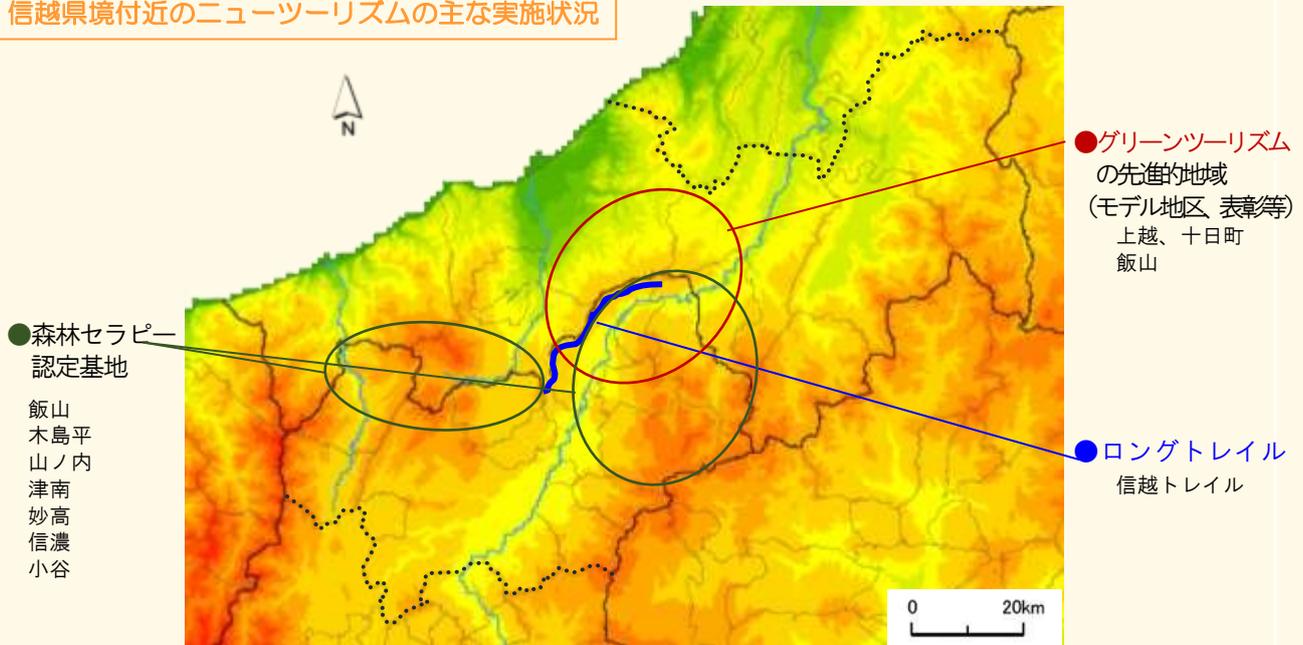
スポーツ合宿の地

- **飯山市**戸狩地区などでは、学生合宿地として民宿の隣接地にテニスコートや体育館などを整備。**須坂市**の峰の原高原も盛ん。
- **信濃町**や**妙高市**は、高地トレーニングの環境が充実（クロスカンントリーコース、競技場、急坂、宿泊施設などあり）。箱根駅伝の名門校や実業団チームが訪れており、合宿の町（郷）と称する。

森林セラピー基地・ロングトレイルの整備

- **森林セラピー基地**の認定箇所は、信濃、飯山、木島平、山ノ内、小谷、津南、妙高の7か所（全国では63か所）。うち**信濃町**と**飯山市**は、2006年に**第1期認定**を受けた全国6自治体に含まれる。
- **信越トレイル**は、総延長80km、2008年に全線開通。**国内ロングトレイルの先駆け**といわれる。信越トレイルクラブは、エコツーリズム大賞第4回優秀賞（2008）第7回大賞（2011）、地域づくり総務大臣表彰（2013）等受賞。

信越県境付近のニューツーリズムの主な実施状況

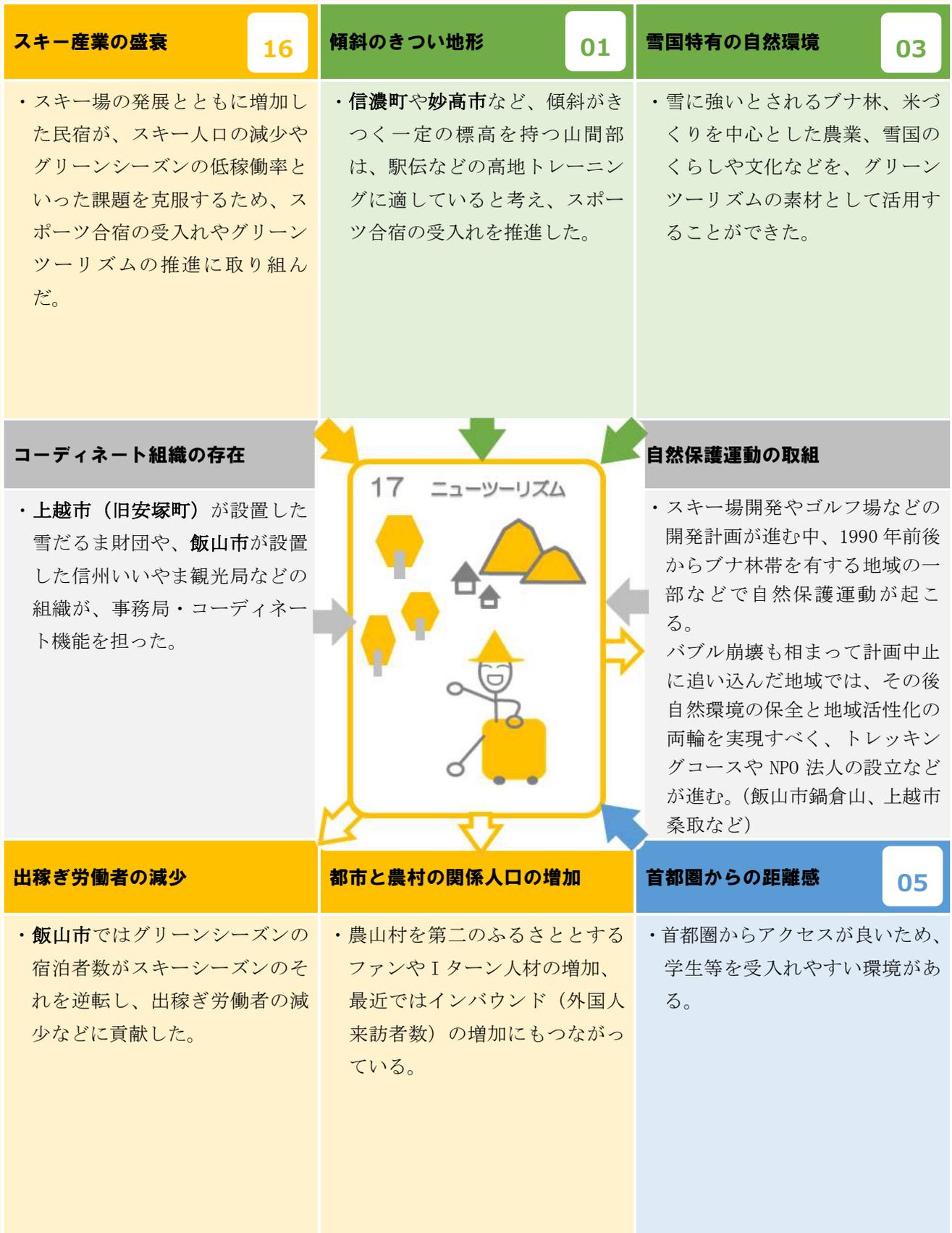


備考) 信越県境付近にある市町村(破線で挟まれた地域、市町村名は p.3 に掲載)の取組のみ掲載
出所) 国土地理院数値地図などをもとに作成

グリーンツーリズムへの積極的取組

- **民宿の発祥の地**は、**白馬村**とされる。
- **飯山市**では、**農村休暇法**が制定された**1994年**に受入れ開始。数々の表彰を受ける。
- 十日町市と上越市で推進する**越後田舎体験**は、1998年に受入れ開始。地域自立活性化優良事例「総務大臣賞」、グリーン・ツーリズム大賞「優秀賞」、オーライ!ニッポン大賞、エコ・ツーリズム大賞「優秀賞」など数々の表彰を受ける。
- **子ども農山漁村交流プロジェクト**(2008-09)の全国の先導型モデル地域16地区のうち、**上越市**、**飯山市**が選定される。全国の体制整備型地域74地区には、**長野市**、**妙高市**、**魚沼市**が選定される。

3 因果関係



4 解説

要 約

- 信越県境地域では、高地トレーニングの合宿の町と称する自治体や森林セラピー基地の集積地があるほか、国内ロングトレイルの先駆けである信越トレイルがあり、運営団体の信越トレイルクラブは、エコツーリズム大賞など数々の受賞をしています。

また、グリーン・ツーリズム大賞「優秀賞」などを受賞した越後田舎体験をはじめとして、グリーンツーリズムへの積極的な取組が行われている地域でもあり、農家民宿の数も国内有数といわれています。このように、ニューツーリズムといわれる取組が先駆けて行われてきた地域ともいえます。

- 豪雪地帯であり、身近にブナ林があることや、農業が盛んであることは、グリーンツーリズムをはじめとしたニューツーリズムが発展する基盤となりました。首都圏からのアクセスも比較的良好、学生の受入れがしやすいことも要因の一つとしてあげられます。

また、スキー場の発展とともに増加した民宿においては、スキー衰退やグリーンシーズンの低稼働率を克服する解決策ともなりました。

こうしたことのほか、ゴルフ場建設などが盛んに行われるようになり、環境保全運動が活発となる中で、自然環境の保全と地域活性化を実現する手段としても有効でした。

実際の取組では、各自治体バックアップの下設立された組織がコーディネート機能を担ったことも発展につながりました。

- 民宿の増加などは、雪国における出稼ぎの抑制に貢献しました。飯山市ではグリーンシーズンの宿泊者数がスキーシーズンのそれを逆転するほどとなりました。

また、農山村を第二のふるさととする首都圏のファンの増加や、1ターン人材の増加、インバウンドの受入れ増加など、さまざまな視点で交流人口の拡大が現れつつあります。

考 察

- ニューツーリズムは、今まで魅力ととらえていなかった部分に価値を見いだす視点を与えてくれるものでもあり、地域づくりにとって重要な分野であると思います。それは、生活における新しい価値観を考えることにもつながるかもしれません。また、地域の良さを地域外の人にどう発信するかを考える上でも重要なテーマと考えます。

- この地域は、ある意味でグリーンツーリズムの老舗的存在であったともいえますが、いまや全国各地で取り組まれる中で、改めてその質や継続性が問われる時代になっています。都市の人口は多く潜在需要はありますが、一朝一夕に需要が増加するものでもないように思います。人数や経済効果などの指標も大切ですが、人間関係の継続性から得られる力や自然災害等の非常時を念頭に置いた交流も大切であり、都市と農村の交流のあり方を考える中では今後も変化・深化を遂げるテーマであると考えられます。

主な参考文献

農林水産省ホームページ / 環境省ホームページ / 森林セラピーホームページ / 日本エコツーリズム協会ホームページ / 都市農山漁村交流活性化機構ホームページ / 毎日新聞ホームページ



1 はじめに

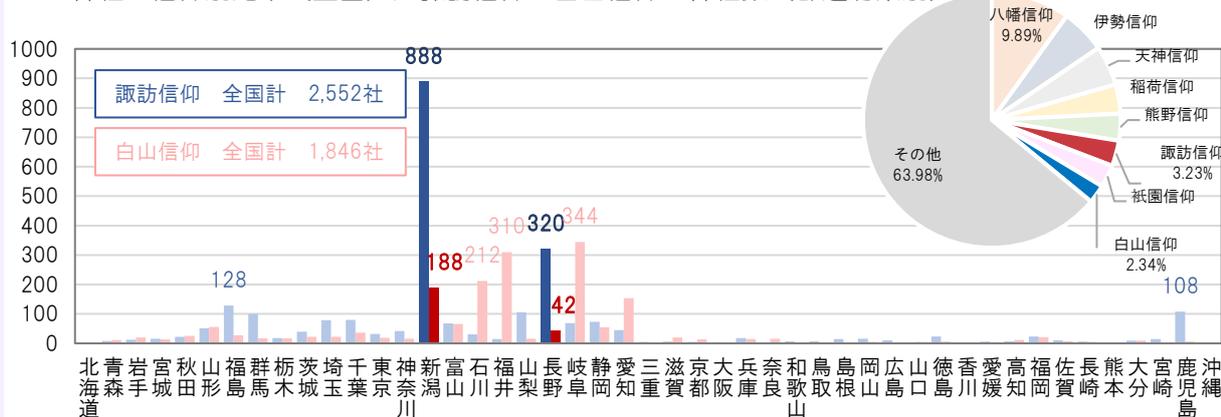
日本には、神道、仏教、キリスト教、諸教など多種多様な宗教が混在しますが、宗教団体の数では、神道系と仏教系が全体の約9割を占めています。

神道とは、「日本の民族に固有の神・神霊についての信念に基づいて発生し、展開してきた宗教の総称」とされています。全国に8万を超える神道系宗教団体のうち、最も多い信仰は八幡で、次いで伊勢、天神、稲荷、熊野などがありますが、八幡でも全体の1割に満たず、多種多様な神社が存在しています。ちなみに神社の数が最も多い都道府県は、新潟県(4,729社)です。

仏教は6世紀半ばに日本に伝わり、平安時代には天台宗や真言宗が、鎌倉時代には浄土系の仏教(浄土宗、浄土真宗、時宗)や日蓮宗、禅宗(臨済宗、曹洞宗)などが成立しました。現在、全国に8万弱ある仏教系宗教団体のうち、最も多い宗派は浄土系が4割強、次いで禅宗が3割弱、天台・真言宗で2割強となっています。

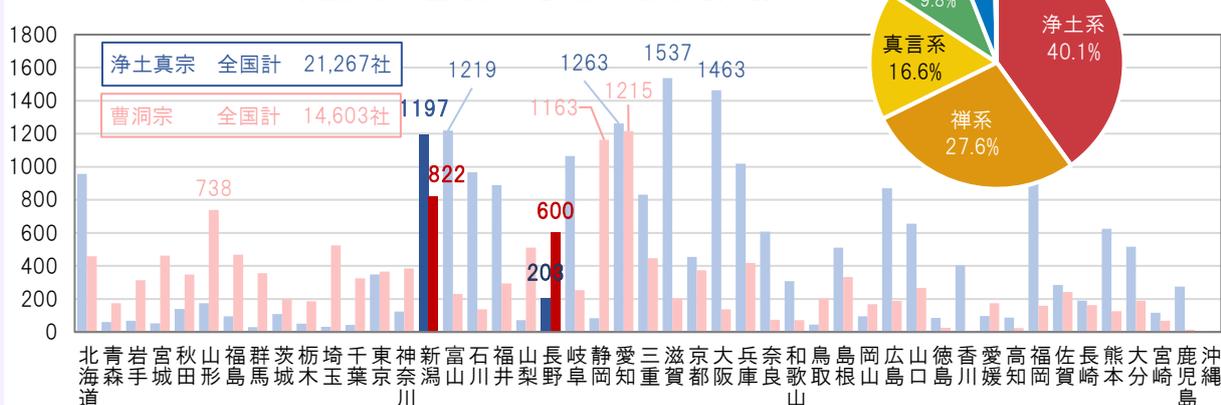
また、平安末からは日本古来の山岳信仰が仏教や神道などと習合した、修験道という宗教体系も作られていきました。

■ 神社の信仰別比率(全国) / 諏訪信仰・白山信仰の神社数(都道府県別)



出所) 神社本庁「平成1祭」データをもとに集計・作成

■ 寺院の宗派別比率(全国) / 浄土真宗・曹洞宗の寺院数(都道府県別)



出所) 「全国寺院大鑑」をもとに集計・作成

2 特徴

神社

● 諏訪信仰（諏訪神社・諏訪社）

- ・古くから風と水を祭る竜神の信仰、農業の守護神、海の守り神などがあり、武家の守護神ともなった。
- ・新潟県は888社で全国1位、長野県は320社で全国2位であり、両県が突出している。
- ・上越市や妙高市で特に多く、市内の4分の1を占める。魚沼・北信地方も全国平均よりは多い。

● 白山信仰（白山神社など）

- ・北陸・甲信越や東海道来に集中的に分布する中、新潟県内の数は188社で全国4位。
- ・糸魚川市では市内の1割を超える。

● 伊勢信仰（神明社など）

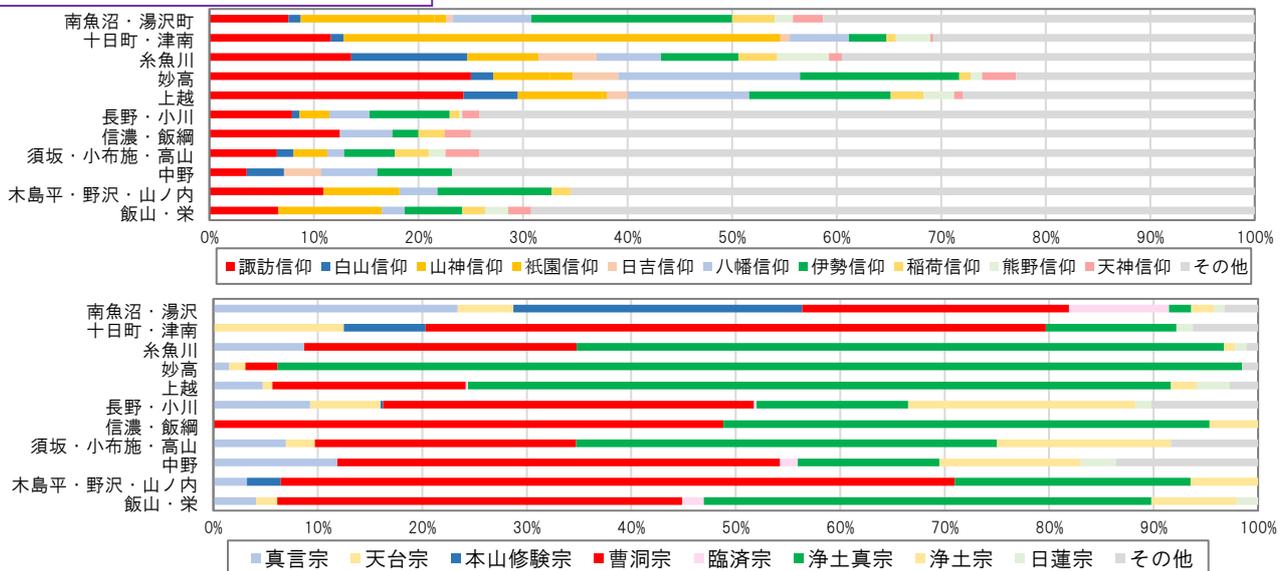
- ・新潟県は725社で全国1位。南魚沼では約2割、上越、妙高でも1割5分を占める。

● 山神信仰（十二神社・十二社・山神神社など）

- ・全国に1,493社ある中で、新潟県が424社と飛び抜けて多く、次いで長野県が71社。
- ・上越、魚沼、長野県北部に集中し、特に十日町・津南では4割強を占める。

※神社数は、全国で20社以上ある神社名称を抽出して集計しているため、実際にはさらに数や比率が大きくなる可能性がある。

信越県境付近の信仰・宗派の分布



出所) 神社本庁「平成「祭」データ」および「全国寺院大鑑」をもとに作成

寺院

● 本山修験宗

- ・もともとは天台系の本山派修験である。
- ・全国でも新潟県に最も多く、特に魚沼に集中的に分布、南魚沼・湯沢では約3割を占める。

● 曹洞宗

- ・天台・真言などの密教系が衰退後に広まる。長野県内では最も多い宗派で県内の4割弱を占める。下高井郡では過半数、上水内郡、中野市、飯山市でも約4割を占める。
- ・新潟県内では2番目に多い宗派で県内の約3割を占める。十日町・津南では過半数を占める。

● 浄土真宗

- ・新潟県では最も多い宗派で県内の4割強を占める。特に妙高市では9割以上、上越・糸魚川市も約3分の2を占める。
- ・長野県内では4番目に多い宗派で県内全体、中野市、長野市では1割強。長野県内では水内・高井郡に集中し、各地域では約4割を占める。

● 善光寺

- ・日本最古といわれる仏像を祀り、いずれの宗派にも属さず、男女平等の救済を説く寺院。
- ・江戸時代後期には、伊勢神宮や西国三十三所札所などとともに、遠隔地から参詣者が訪れる全国有数の神社仏閣の一つとされる。

3 因果関係



4 解説

要 約

- この地域の神社の分布に関する特徴は、新潟・長野両県では「諏訪信仰」系の神社数が全国的にみても圧倒的であること、魚沼地方では「山神信仰」系の神社数が同様に圧倒的であること、糸魚川市付近では「白山信仰」系の神社が比較的多いことなどが挙げられます。
 - ・ 諏訪信仰は、長野県諏訪地方を拠点とすることや、主祭神の母が糸魚川市を拠点とした奴奈川姫であるという地縁に加え、あるときは武神であり農業の守護神でもある性質から、長野県から新潟県に移住した武士や開墾・開田をした農民が広めたとされ、特に平野部を中心に多くみられます。
 - ・ 山神信仰は、古くから全国的に様々な形態で存在していましたので、はっきりしたことは言えませんが、農業や山仕事が盛んであり地形的にも奥深く雪深い魚沼地方では数多く残ったと考えられ、結果的に全国的にも突出した数になっています。
 - ・ 白山信仰は、北陸地方の白山を拠点として新潟県に伝播したことから、糸魚川市に若干ながら多くの神社がみられます。また、山岳信仰としての性質から、妙高山や戸隠山などを経由した後、日本海側や長野県側に伝播していきました。
- この地域の寺院の分布に関する特徴は、南魚沼市や湯沢町周辺を中心とする「本山修験派」の寺院数が全国的にみても多いこと、北信地方や十日町市、津南町などには「曹洞宗」の寺院が比較的多いこと、上越地方を中心とする平野部や北信地方には「浄土真宗」の寺院が多いこと、そして特定の宗派を持たない「善光寺」の存在が大きな影響力を持ってきたことなどが挙げられます。
 - ・ 本山修験派の寺院は、霊山との関係が強く伺えますし、別の言い方をすれば、その後全国に様々な宗派が伝播した中でも、その影響をあまり受けることなく残ってきたということができそうです。
 - ・ 曹洞宗は、総本山である福井県の永平寺から伝播してきたことや、その際に白山信仰の分布が基盤となったこと、比較的質素な性質を持つことから農民層や武士の気質にあったことなどの説があります。
 - ・ 浄土真宗は、広く民衆に受け入れられる性質を持ち、開祖である親鸞が上越市に配流された縁や、その後北陸を拠点とした蓮如の布教などと相まって広まったものと考えられます。
 - ・ 善光寺は、日本最古の仏像を祀る寺院とされるほか、特定の宗派によらないことや諏訪信仰、山岳信仰なども取り入れたこと、古くは例外的ともいえる女人救済を行うなど、全国から様々な信仰者を惹きつける影響力を持ち、一大観光地としての長野市の地位確立にも大きく貢献しています。

考 察

- 宗派ごとの分布は時代やそれぞれの地域特性によっても変わりますし、複数の要因が絡み合っています。全体としては様々な信仰を取り入れてきた地域ということができます。
- 神社に対しては、厄除けや冠婚葬祭、観光地などのイメージを持つ人もいますが、原点に立ち返れば古代日本人の自然への恐れや感謝の念の表れと捉えられます。この歴史を知ることは、自然と人との関係性についてこれまでを振り返り、今後のあり方を考えるきっかけになると思います。
- また宗教という言葉に対して少し距離を置く人もあるとは思いますが、かつては生活と密接に関わり、人間の道徳心や地域コミュニティの形成などに大きな役割を果たしてきたものでもあります。歴史的に宗教が地域に果たしてきた役割をあらためて再認識するとともに、今後の自治やコミュニティのあり方を考えることは重要と考えます。

主な参考文献

文化庁：宗教年鑑平成30年度版 / 各県宗教法人名簿(2018.7.31現在) / 神社本庁(1995)：平成「祭」データ 全国神社祭祀祭礼総合調査 / 全国寺院大鑑編集委員会(1991)：市町村区分 全国寺院大鑑別巻、法蔵館 / 岡田荘司・加瀬直弥(2007)：現代・神社の信仰分布—その歴史的経緯を考えるために、國學院大學「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」 / 小田匡保(2003)：日本における仏教諸宗派の分布、駒澤地理No.39、pp.37-58 / 小田匡保(2011)：新潟県における寺社の分布と地域区分、駒澤地理No.47、pp.13-33 / 鈴木昭英(1978)：山岳宗教史研究書9 富士・御嶽と中部霊山、名著出版 / 笹本正治(2007)：善光寺の不思議と伝説—信仰の歴史とその魅力—、一草舎出版

(様々な信仰を取り入れた靈山の集積地)



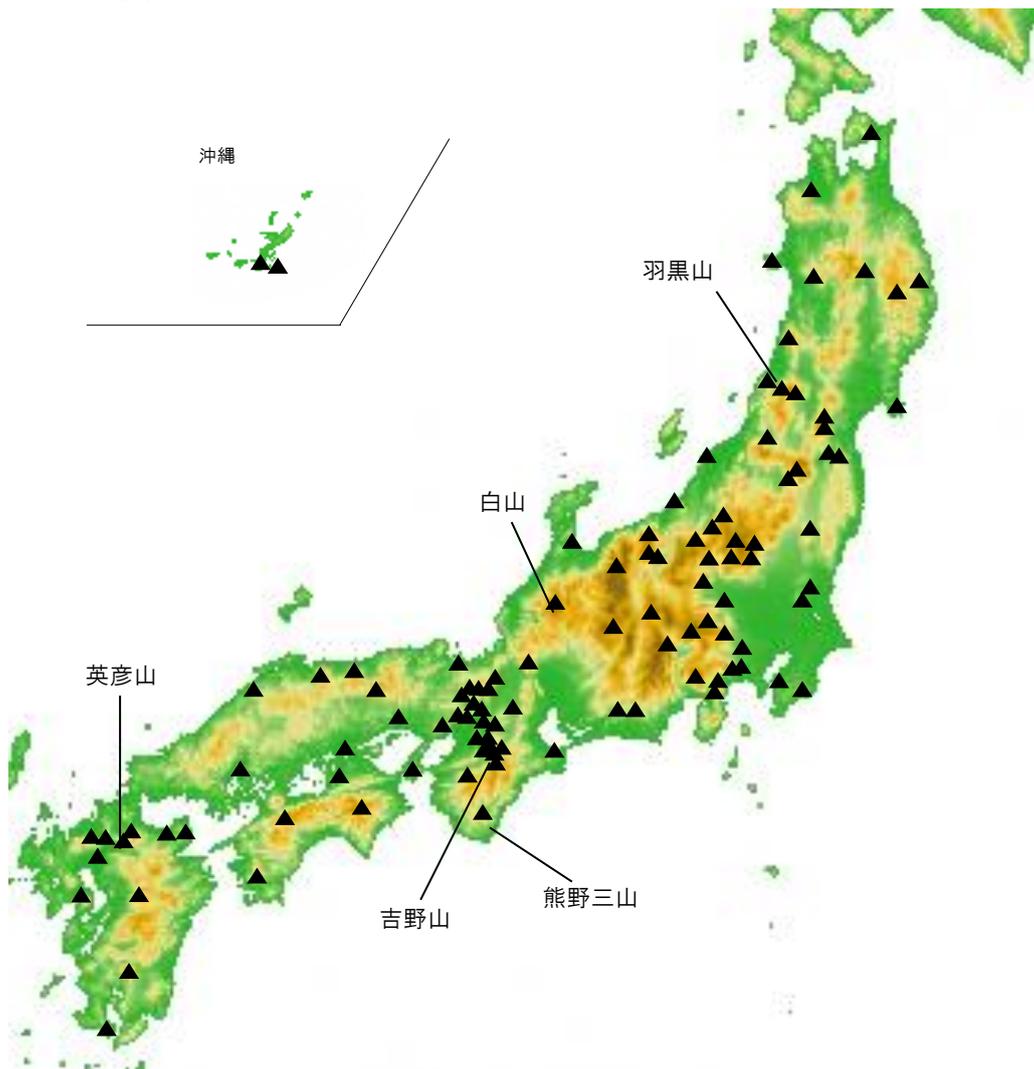
1 はじめに

日本では、原始時代から山岳が信仰の対象となっており、仏教や神道などの中にもその要素をみることができます。山の形や山への畏れから神秘感が生まれたり、水をもたらす農耕を守るものとして崇められたり、祖霊の住む他界、邪心邪霊が住む靈地などと恐れられてもいました。

こうした山岳で修業し靈力を持つとされた修験者により、山の神霊の宗教概念と仏教・神道などが習合し、修験道という一つの宗教体系を作り上げていきました。平安時代末期から、吉野の金峯山や熊野が修行の拠点となり、室町時代には、熊野側では聖護院を本山とする本山派、吉野側では大和を中心に当山派の二大修験集団が形成されていきます。そのほか、羽黒山（出羽三山）、英彦山、北陸地方の白山など、地方の靈山でも山林修行が行われました。

近世になると、修行の場とされていた山岳に庶民も登るようになり、従来の修験の山以外にも木曾の御嶽や富士山などへ信仰登山が盛んに行われるようになりました。

■ 主な靈山の分布



出所) 国土地理院数値地図および宮家準「靈山と日本人」をもとに作成

2 特徴

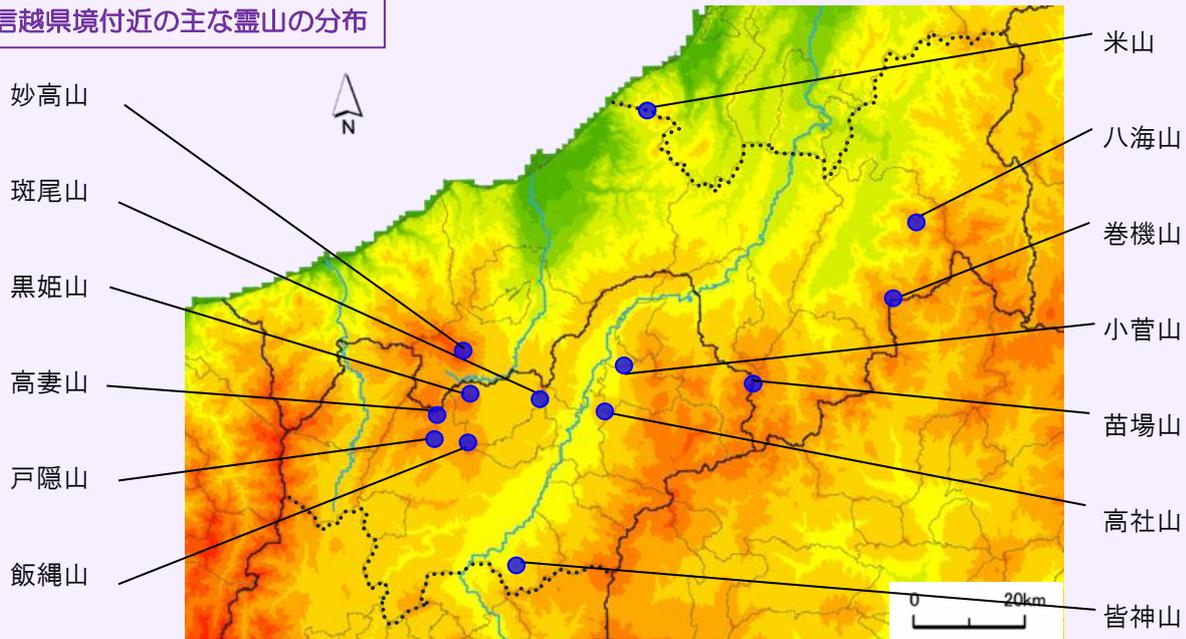
古くから中央に知られた霊山

- **戸隠**
 - ・平安末期に地方の霊山として、富士山と並び全国的に知られる。鎌倉時代には、高野山、比叡山に匹敵する一大霊場であったといわれる。
 - ・近隣の**飯縄山**との関係も深く、**妙高山**修験への影響も見られる。

その他の霊山

- 県境の**苗場山**や**巻機山**なども、修験霊山として知られる存在である。

信越県境付近の主な霊山の分布



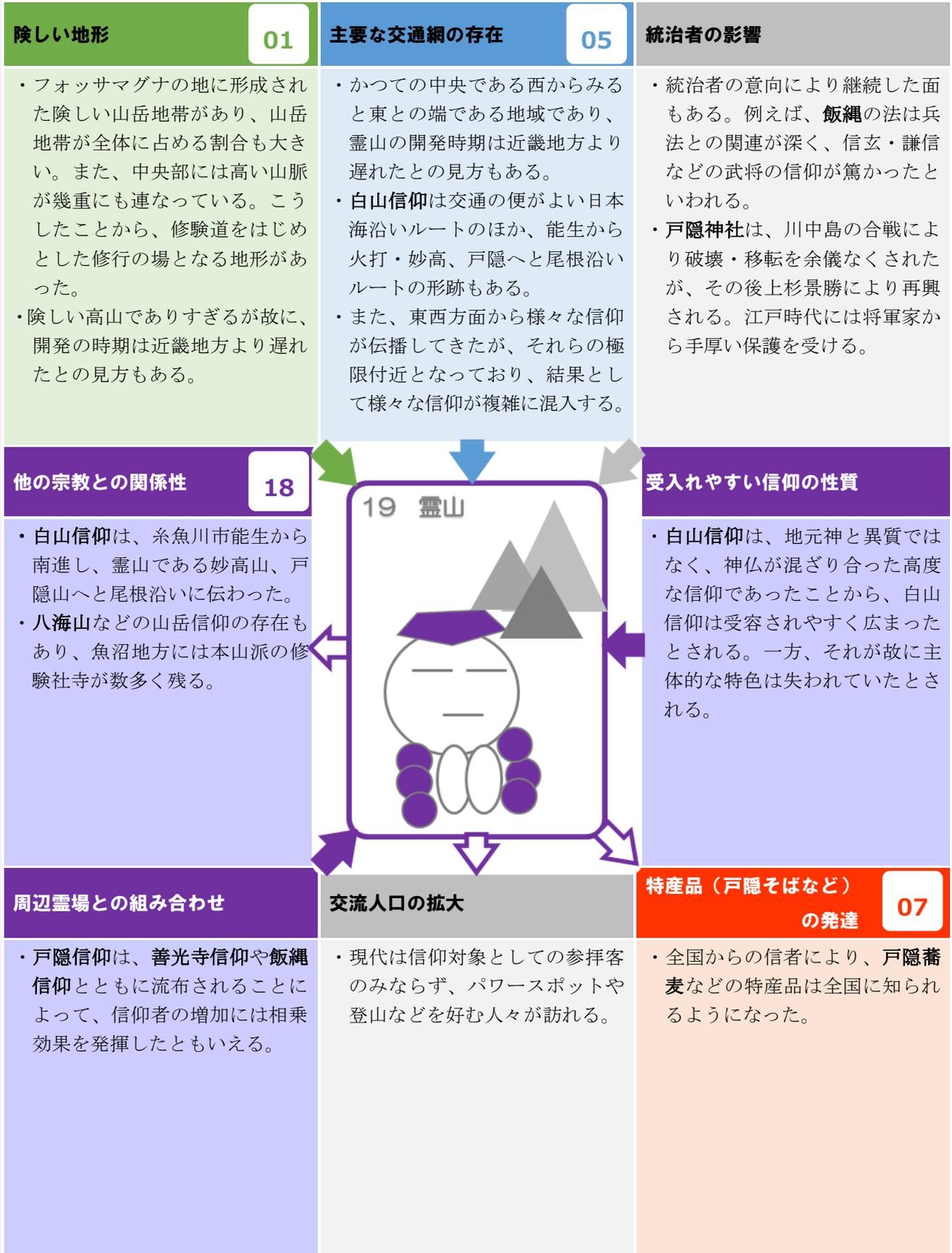
備考) 信越県境付近にある市町村(破線で挟まれた地域、市町村名は p.3 に掲載)の霊山のみ掲載

出所) 国土地理院数値地図、宮家準「修験道辞典」「霊山と日本人」、地方史研究協議会編「信越国境の歴史像」をもとに作成

主要な信仰の影響

- **熊野・金峯山信仰**
 - ・熊野と金峯山を結ぶ大峰連山は、平安中期に中央の修験道場に発展。
 - ・平安末期ごろ北陸から西頸城地方へ伝播して**妙高山**に達し、さらに上越市板倉区から東部山麓を通り北上したと考えられている。
- **白山信仰**
 - ・白山は、役小角とならび修験道の祖とされる泰澄が開山し、地方霊山としては最も早期に開発。日本海側に北上、一部が越後から信濃、関東に入り、一部が美濃から東海道沿いに進出。
 - ・平安末期に**能生白山社**(糸魚川市)が造られ、この信仰が鎌倉末期ごろ妙高山に定着、その後戸隠山にも定着したとされる。
 - ・**能生白山権現**を「竜の尾」、**関山三社権現**を「竜の胴」、**戸隠**を「竜の頭」とする九頭竜権現は、一連の白山信仰と考えられている。
 - ・**米山**や**斑尾山**にも白山信仰の伝播がうかがえる。
- **羽黒・湯殿修験(出羽三山)**
 - ・出羽三山から江戸までの羽州・奥州道沿いのほか、越後・佐渡にも一定程度広まる。
- **木喰行者**などによる復興
 - ・戦国時代の戦乱で山岳信仰が衰退する中、中部地方の霊山の特徴は、木喰行者により山岳宗教が復興し、霊山を広く民衆に開放したこととされる。その後の富士講、御嶽講といった庶民が霊山へ登拝する動きへもつながる。
(木喰行者が作成した木喰仏は、全国に 630 体ある中で、柏崎市の 83 体が全国最多、中越や佐渡でも数が多いとされる)
- **木曾御嶽講**の普及
 - ・御嶽講は、濃尾平野を中心に、関西や中山道沿いにも多いが、上越付近にも若干広まる。
- **八海山**(南魚沼市)も古来は大日如来や作神を祀り、修験道所として知られていたが、その後は御嶽講系統の霊山として栄える。

3 因果関係



4 解説

要約

- 全国的にみて最も霊山の多い地域は近畿地方ですが、一定の集積を持つ地域は全国各地にあり、この地域にも全国的に一定の知名度を持った「戸隠」をはじめ、一定数の霊山がみられます。かつてはフォッサマグナの海の底にあり、その後隆起や褶曲、火山活動などが盛んであったこの地域は、陰しく存在感のある山々の多い地域ではありますが、むしろ陰しすぎる地形や主要霊山からのやや離れた位置にある関係などから、霊山としての開発はやや遅れたとされます。
- この地域の特徴としては、近畿の熊野、北陸の白山、東北の出羽などの成立基盤を異にする山岳信仰が次々に入り込んだことが挙げられます。また、山岳信仰が衰退した戦国時代以降は、木喰行者や御嶽講の普及による復興なども行われました。
- さらには、善光寺をはじめとする寺社との様々な関わりもありました。複合的で多様な状況を生み出した象徴の一つとして妙高山が挙げられます。複数の信仰が重なり合ったり混ざり合うことは、様々な参拝客を受入れ、長野市などの一大観光地が発達した一因ともなっているといえます。

考察

- 日々の暮らしの中で自然の恵みと災いを実感でき、陰しく存在感のある山々が多いこの地域では、自ずと山が信仰の対象とされてきたものと思われます。自然への畏れという精神性は、当時に比べれば薄れているものと思いますが、堂々とした存在感を持つ山の風景は日々の暮らしの中で自ずと目に入ってきます。妙高山を例にとると、東西南北に妙高山を眺めることのできる集落が広がる中、それぞれの集落において「自分たちの住む場所から眺める妙高山が一番いい」などと誇らしげに語る人は少なくありません。今後の環境問題や自然災害への対応、地域の結束力などを考えるに当たっては、改めて重要性が増す存在と思われる。
- かつてはこれらの山が持つ霊力を得るために、修験の山伏たちがこの地を訪れたとされます。現代社会においても、修行ではないにせよ登山やロングトレイルなどを楽しむハイカーが数多く訪れています。この背景には、運動機会としての魅力のほかに、山に接することで精神の安定や自己を見直す機会を得られるなどの多様な魅力があり、昔も今も変わらない地域の価値を考えさせられます。

主な参考文献

宮家準 (1986) : 修験道辞典 / 宮家準 (2012) : 修験道 その伝播と定着、法蔵館 / 宮家準 (2012) : 修験道の地域的展開、春秋社 / 鈴木昭英編 (1988) : 富士・御嶽と中部霊山、名著出版 / 和歌森太郎 (1975) : 山岳宗教の成立と展開、名著出版 / 田上善夫 (2008) : 地方における霊山の配置とその影響、人間発達科学部紀要 2-2 / 鈴木昭英 (2004) : 越後・佐渡の山岳修験、法蔵館



1 はじめに

お祭りは全国津々浦々、多種多様に存在しますが、ここでは雪国らしさを醸し出す冬のお祭りを中心に紹介します。

冬の風物詩の一つに小正月行事があります。一般的には、どんど焼き・サイの神などと呼ばれ、しめ縄や門松、書初めなどを神社の境内や田んぼなどで燃やし、五穀豊穡や無病息災等を祈るものが知られていますが、このほかにも新郎新婦を祝うものなど行事の内容は多種多様です。ちなみに、2018年ユネスコ無形文化遺産の一つに認定された秋田のなまはげも、元々はこの小正月行事の一種です。

また、戦後に生まれた現代的な雪まつりには、全国的には北海道・札幌の雪まつりや秋田・横手のかまくらまつりなどが知られていますが、当地域でも歴史を有する多種多様なイベントが行われています。

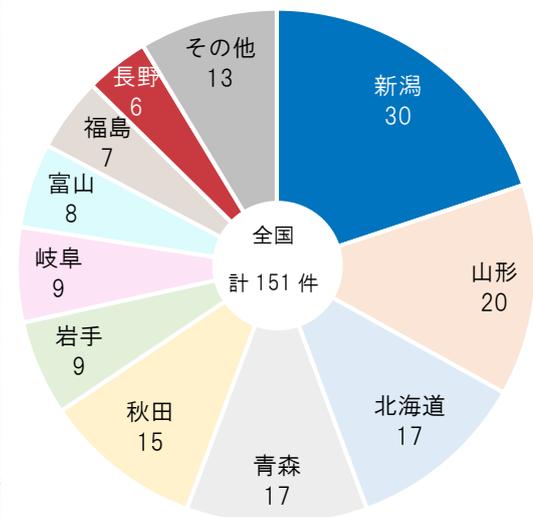
■ どんど焼きの呼び名の分布



備考) 上記は概ねの傾向であり、細部においてはその他の呼び名を含めて複雑に分布する地域もある。

出所) 糸魚川ジオパーク協議会ホームページ

■ 雪まつりの数(都道府県別・2016年)



備考) 雪センターの会員自治体内で開催されるお祭りのみ
出所) 雪センター「雪まつり・雪関係のイベント」(2016)をもとに作成

2 特徴

小正月行事

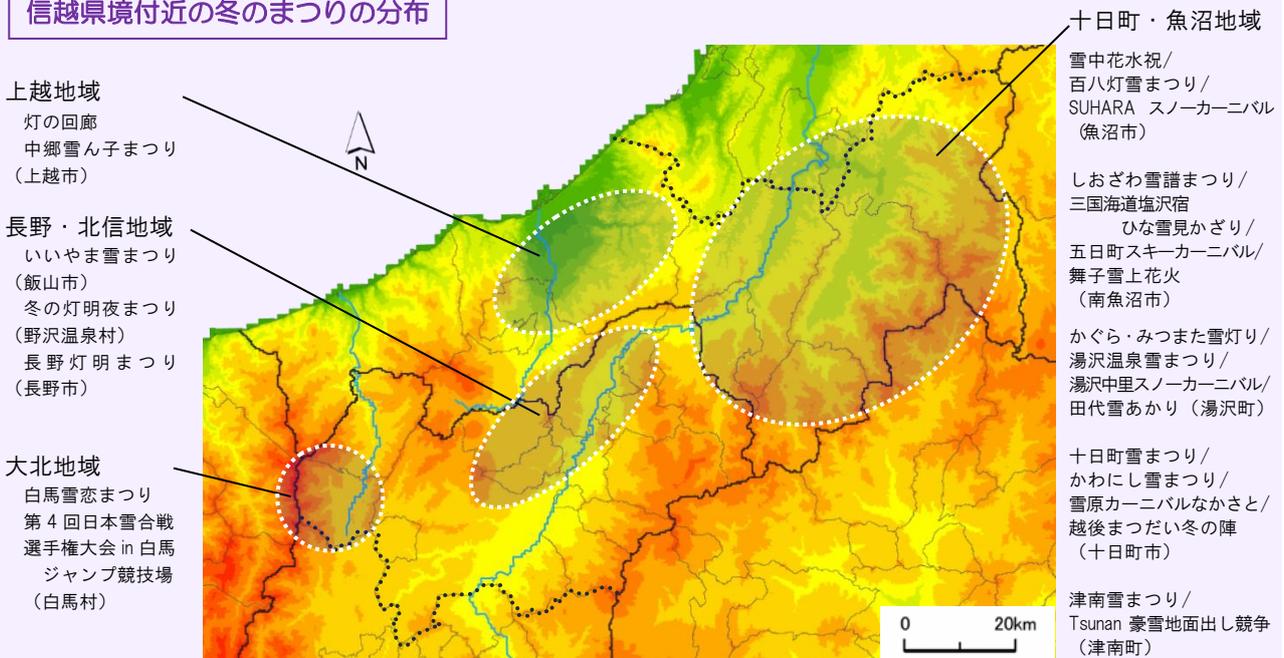
道祖神祭り

- 国内では**どんど焼き**や**ドウソジン**と呼ぶ地域の多い小正月の集落行事は、例えば上越地域では**サイの神**、北信地域では**ドウロクジン**が多いなど、その呼び名は様々である。
(さらに周辺地域では、サギチョウ、オンベヤキ、サンクローなどと呼ぶ地域もある)
- 野沢温泉村の道祖神祭り**は、京都鞍馬や和歌山那智の火祭りとならんで日本三大火祭りの一つと称される場合もある(国指定無形民俗文化財)
- 飯山市では、107の集落のうち91集落で行われているなど、その数の多さも特徴である。

その他の珍しい小正月行事の例

- 糸魚川市青海地区の**竹のからかい**
(国指定無形民俗文化財)
- 十日町市松之山地区や栄村箕作地区の**婿投げ**
(新婚男性を崖下の雪原へ放り投げるなど)
- 十日町市大白倉地区の**パイトウ**
(30m以上の火柱が上がる奇祭)
- 上越市西横山地区の小正月行事
(かつて世界的な写真家集団にも所属した濱谷浩が写真集「雪国」(1956年)で世界に発信。現在も一連の行事が比較的多く残る。)

信越県境付近の冬のまつりの分布



備考) 信越県境付近にある市町村(破線で挟まれた地域、市町村名はp.3に掲載)のまつりのみ掲載
出所) 国土地理院数値地図および雪センター「雪まつり・雪関係イベント」(2016)をもとに作成

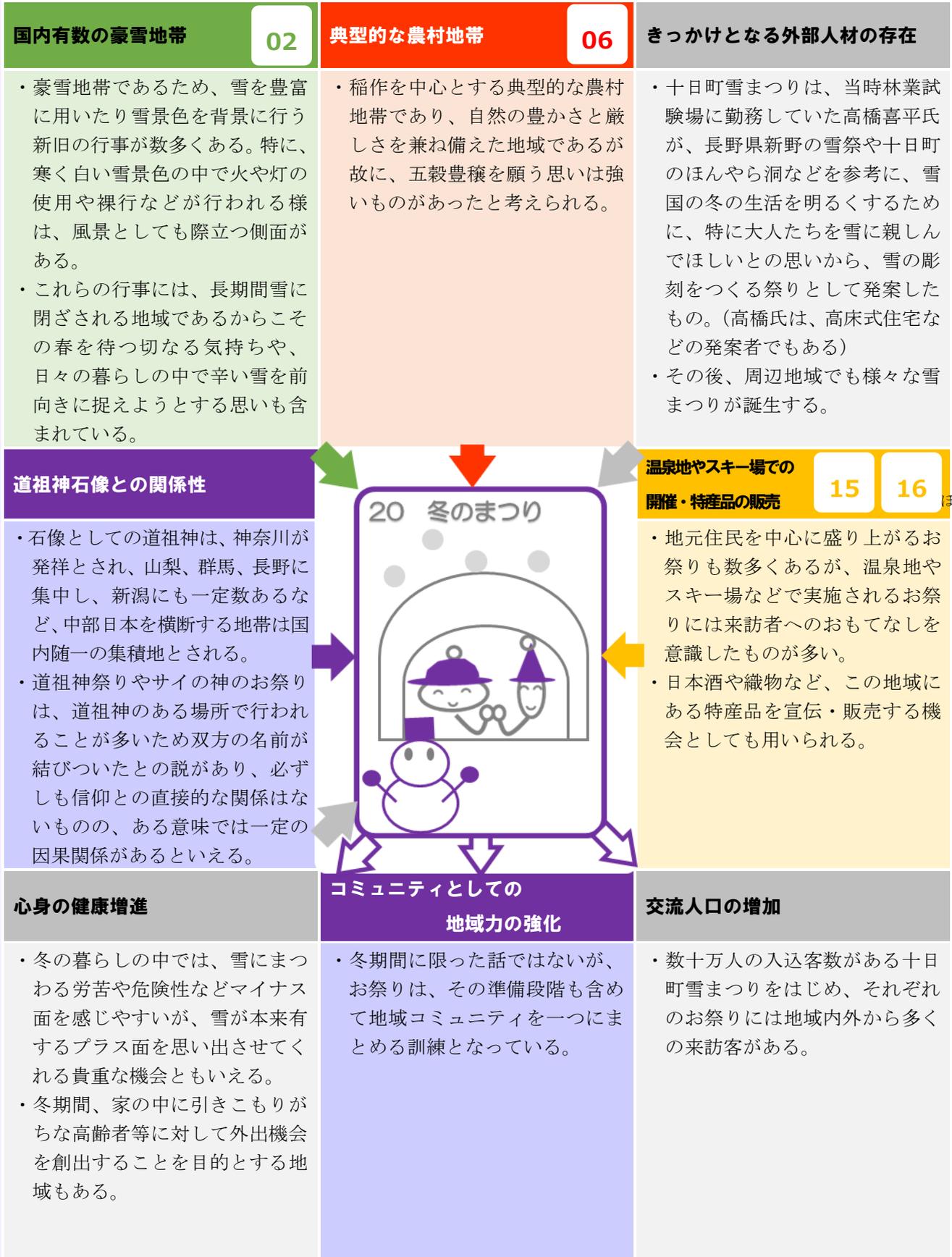
地域活性化を目的としたお祭り

- 十日町市の**雪まつり**は、1950年から行われており現代雪まつりの発祥とされる。(札幌雪まつりより2週間早い)
- 翌年には、**六日町雪まつり**(現・南魚沼市雪まつり)が始まっている。
- 各地域では、かまくらや雪の彫刻、雪道のローソク、気球やスカイランタン、雪合戦に力を入れるなど、**雪にまつわる多彩なイベント**がある。

その他特徴的な冬のお祭り

- 十日町市の**節季市**は、1月に開催。
- 南魚沼市の**毘沙門堂の裸押合**は、3月に開催。諏訪の御柱祭や秋田のなまはげとならび**日本三大奇祭の一つ**と称されることもある。国指定無形民俗文化財。

3 因果関係



4 解説

要約

- 昔からある冬のお祭りでは、日本三大火祭りの一つと称される場合もある野沢温泉村の道祖神祭、マスコミに数多く取り上げられる旧松之山町の婿投げ・墨塗り、世界的な写真家といわれた濱谷浩が写真集で世界に発信した上越市西横山地区の小正月行事など、個性的なものが数多く見られます。
- 米を中心とした農村地帯が多いことから五穀豊穡を祈願することや長い冬の間春を待ちわびる人々の気持ちなどが祭りの背景となっています。
また、現代雪まつりの発祥とされる十日町雪まつりをはじめ、戦後にはじまった数多くの雪まつりもあります。これらは、地域活性化を目的として、雪をポジティブに捉えた地域振興策の面も強く作用しています。
- 特に、豪雪地帯で冬の白く寒い雪の中で、火を用いた行事や裸形を行うことは、より意味合いが際立つようにも思います。また、雪国ではありながらも外で祭りを行おうとする機運は、東北地方の寒さとは異なる雪国ならではの見方もあります。
- 冬期間の外出や交流を促進する機会となる一方、地域外からの交流人口の増加にも貢献しています。

考察

- 豪雪地帯に住むことの困難さは、昔も今もあるとは思いますが、雪まつりを通して昔の人は雪の恩恵もしっかり認識していたのではないかと感じます。冬のまつりを知ることで雪への認識を考え直すことも、地域の価値を見直す上で重要と考えます。
- お祭りは、その準備段階も含めて地域コミュニティを一つにまとめる訓練になる側面も持っています。コミュニティの過疎化やライフスタイルの多様化などからこうしたお祭りが減っていく中、お祭りが果たしてきた役割を再確認する中で、機能としてどのように維持発展させていくか、数ある地域づくりの課題の中でも大きなものと考えます。

主な参考文献

高橋喜平(1979) 雪国の人びと、創樹社 / 飯山市伝統文化保存活用実行委員会(2012)：奥信濃 飯山の道祖神火祭り / 石田耕吾(1987)：頸城の祭りと民俗信仰

おわりに

地域の特徴やそれらを構成する地域資源には、それぞれの成立に至った背景・要因があり、その結果として生じた別の地域資源などもあります。すべての真実を明確にすることはできませんが、地域資源の多くは、地形・地質や気候、位置などの風土を背景に生まれ、時代とともにそれらを取り巻く環境が変化する中で、あるときは継続の努力をし、あるときは変える決断をして現在に至っているのではないのでしょうか。その歴史の積み重ねの上に、今日、私たちが暮らしている地域があるのだと。そして様々な地域資源を総合的に捉えたとき、そこに何かしらの共通性や関係性を見いだすことができ、地域の個性もおぼろげながら明確になってくるのではと思います。

地域資源の陰には、必ずといっていいほど人の存在があります。人は不利な条件下におかれたときにこそ知恵を絞り、危機感を持ったときにこそ行動する、このことは今も昔も変わらないように思います。その点においては、一見暮らしに不向きな条件や危機感を与える環境も地域資源であり、そのことを敏感に感じ取り、周囲の人々と力を合わせて行動することができる人々は最大の地域資源ということができるでしょう。そして、この行動力こそ、我々が次世代に引き継いでいかなければならないことでもあります。

一方、現代社会においてはグローバル化や知識情報化の進展の中で、数多くのものや情報がどこにいても手に入る利便性と裏腹に、分業化が進み、全体像や因果関係が見えづらい社会となっています。また、本冊子に掲げた地域資源も含め、かつては必然性の中から生まれ、育まれてきた風土が消えつつあります。地域資源の持つ役割が低下し、担い手が減少し、あるものは既に失われ、あるものは失われようとしている中で、単なるノスタルジーを越えてこれらを守り育てていくことの意義が、今改めて問われていると感じます。

多くの無形文化遺産などがそうであるように、このような社会においては、かけがえのない地域資源を維持・継承していくことが、重要な課題となります。それは、地域づくりに直接関わっている現役世代の人にとってはもちろん、次代を担う若い世代にとってはより喫緊といえるのではないのでしょうか。地域資源が、本質的に学ぶべきものであることは疑いのない事実です。そこで、次世代を培う教育の現場においてこそ、地域資源を率先して取り上げていくべきと考えます。これからの教育においては「主体的・対話的で深い学び」が求められており、地域資源はそのための教材としても最適と思われる。

その場合、教える立場にある教員にとっても、地域資源についての理解を深めることは必要不可欠となります。地域資源とは何かを見極める力も、要求されることになるでしょう。そこで、本冊子を学校教材として検討する際の資料等にご活用いただければと考えております。このように、新しい時代を担う教員の役割はますます多様化するものと思われ、今後は教員を養成する制度や体制にも改革や発想の転換が求められるようになると思います。

もちろん、教員以外の方におかれましても、本冊子を広域的、総合的、中長期的な視点をもって今後の地域づくりを考えるために、あるいは「信越県境」というエリアに関心をもつきっかけのためにご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、本研究は、文部科学省共同利用・共同研究拠点「越境地域政策研究拠点」である愛知大学三遠南信地域連携研究センターの2018年度一般共同研究、及び上越教育大学公募型地域貢献事業の採択を受け、共同研究として実施したものです。

また、本研究の実施及び本冊子の作成に当たっては、各テーマに関する有識者や国の関係省庁、新潟・長野両県における県庁、市役所、町村役場、博物館、図書館、観光協会等の方々など、数多くの皆様からご協力をいただきました。すべての方々のお名前をここに掲載することはできませんが、この場をお借りしまして厚く御礼申し上げます。これを契機として、この地域資源情報を皆様方と共に育むことができるプラットフォームづくりにも取り組みたいと考えております。

○ 共同研究者一覧 (*は責任者)

内海 巖*、太田 栄里、伊倉 悠示 (上越市創造行政研究所)

光永伸一郎、橋本 暁子 (上越教育大学大学院 教科・領域教育専攻)

望月 静雄 (飯山市文化財保護審議会)

佐藤 雅一 (津南町教育委員会)

○ 掲載写真

各テーマ冒頭の掲載写真は、下記のご提供によるものです。

長野県農政部 (8, 9, 10, 13)、一般社団法人十日町市観光協会 (2, 14)

一般社団法人信州いいやま観光局 (3, 7, 15, 17, 18, 19)、十日町市役所 (20)

上越市役所 (6, 11, 12, 16)、共同研究者等による撮影 (1, 4, 5)

※ () 内の数値はテーマの番号を表す。

信越県境地域の地域資源情報 2019

2019(平成 31)年 3 月発行

編集：上越市創造行政研究所

〒943-8601 新潟県上越市木田 1 - 1 - 3

TEL (025) 526-5111 FAX (025) 526-6184

E-mail: souzou@city.joetsu.lg.jp

<https://www.city.joetsu.niigata.jp/site/souzou-gyosei/>